
金色（コンジキ）の花

bluewind

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の花

【Zコード】

N4279C

【作者名】

bluewind

【あらすじ】

地平が金色一色に染まっている。金色に輝く花が、風になびき、黄昏の海のように美しくたゆたう。そんな村の大切な花を、一生懸命世話することがお仕事である、少女エウム。そして、彼女の幼い頃からの友達である少年ウジカ。彼の病気の世話をするのも、彼女の大切な仕事。

辺り一面の大地に黄金の花が咲き誇り、空の太陽の光によつて、地面は眩いほどに輝いています。そよそよと柔らかな風が、花々の頭をくすぐり、波を打ち、それはまるで黄金に輝く夕焼けの海のよう……。

その海原をよく覗いてみれば、ところどころに黒い点々とした影が、金色の海の中を泳ぐようにあられます。その中の一人の女の子……黒く長い美しい髪を後ろに一つに束ねた、唇のブクツと可愛く膨れた、エウムといふ名の子がいました。エウムは金色の海の中で……せつせつせと花の手入れをしていました。彼女のお仕事は、この金の花が枯れてしまわぬように、余計な細かい枝を切つたり、水をあげたりすることでした。今日も、目も眩むような光り輝く花々に囲まれながら、汗を流し、一つ一つとても大切にいたわり……時に花の頭を撫でてあげたりもして……お世話していました。

さてその日も一日があつという間に過ぎ去つて、お日様も大分さがつてきてきた夕方、お花仕事の長の合図で、今日の仕事の終わりが告げられ、皆真っ黒に働いた女たちは畠の片隅に集まり、一緒にお喋りをしながら村へと帰つていきました。一人の、エウムとともに仲良しのノツポの女の子が話しかけてきました。

「エウムは今日もウジカのところに行くの？」

「ウン、毎日手当てしてあげないと、身体が腐り死んでしまうつて、長老様がおつしやるから」

「まだ、直らないの？」

「長老様は根気よく世話をあげてつて……黄色い花はたやすくは死にやしないって……それを信じるしかないの」

やがて、そんな話をしているうちに、村へと到着しました。

「道具はいつもの通り、水で綺麗に洗つて小屋にしまつておきなさ

い」長は皆にそう告げると、次の仕事場へと向かって行つてしましました。エウムが早速、水場へ行こうと、道具を持ち上げようとした時、周りにいた子たちが首を振つて、それを掘みました。

「エウムはウジカさんのお世話をするのでしょうか？」

いいから私たちに任せて行つてきなさい。後のことばやつておくわ「でも道具洗いまでがお仕事だから……」

「大丈夫、任せて」

エウムはみんなの優しげな笑みに甘えて、もうしないように微笑み返して、道具を置いて、早速ウジカの家へと向かいました。

ウジカは、村のはずれに立てられた、掘つ立ての小さな小屋に住んでいました。ウジカの身体はとても危険な流行り病に犯されており、長老の判断で、他の者に病気がうつらないようにと、村の中心から離れた場所に粗末な家を作つて、そこに住まわせていました。その流行り病は男にだけに掛かる病気で、女の子のエウムが、彼のお世話をすることを買って出たのでした。勿論女は村に何人もいるのですが、他の者たちはその奇病のあまりの不気味さに恐れをなし、すぐに世話をしようという者が現れなかつたのです。その会議を横で聞いていたエウムは、なかなか話が決まらないことにウズウズしていて、ついには「あたしが……します！」と、たまらず声を張り上げたのでした。

さて、途中に出会つた村の者に挨拶をしながら、よしやくウジカの家の前にたどり着きました。

ウジカの家は、木を簡単に組み込んで、周りにワラを……それは屋根だけでなく四方の壁にまで囲つた作りで、こうすると病の毒菌がワラに遮られて、病気を周りに散らさないですむように出来ているのです。屋根のワラは、エウム自身が上にのぼつてのせました。

「ウジカ、起きてる？」

エウムはワラの壁のすぐ横に立つて、その縦横に重なつた茎のわずかにあいた隙間に、厚い唇をうずめるようにして、そつと小さな声で中に声を掛けました。すると……耳を澄ませてみると、何かかすかに衣擦れのような音が聞こえたような気がしました、どうやら、ウジカは起きているようです。

「入るね」、一言声を掛け、そつとワラの隙間に指を添え、静かに開けて入りました。

外の夕日は大分傾いてきましたが、光にはまだ濃い赤みを残していて、薄暗いながら部屋の様子は何とかつかえました。ウジカは、背中を家の一番太い柱にもたれかかるようにして、手も足も前に放り出すようにベッタッと地面に投げ下ろして、座り込んでいました。ワラを通した光の陰影で、彼の顔の左半分が、赤黒く……うすら寂しく照らされています。瞳に赤色が差し、まるで充血したような暗い眼で、どこを見るとも無く、いうならば何も無い空中を見つめているように、定まらない視線で、呆然と、ただぽつねんと座り込んでいたようでした。

「遅くなつてごめんね！　すぐに服をかえてあげるね

エウムはあえてわざとらしくらいに声を高くして上げて、サッと勢いよく部屋の中へと上がりこみました。ウジカのすぐ横へと行き、彼の脇においてあつたワラの寝床を一度持ち上げ、軽く叩いて、崩れていた形を綺麗に整えて、敷き直しました。そしてぐるりと向きを変え、今度はウジカの体を、その寝床の上へと寝かせようと思

いました。ウジカは変わらず無表情のまま、エウムがしていることを、ただ目だけでそれを追つて見ていましたが、彼女の顔がこちらに向くのに気付くと、棒のようにだらしなく投げ出されていた腕を、震えながらエウムのほうへとまっすぐ差し出しました。

エウムはその手を、上と下から……彼の手を挟み込むように包み込むように、手を取り、そして何気なく彼の瞳の中を覗き込んでいました。彼の眼は、相変わらず、うつろに濁った灰色の瞳で、顔はこちらに向いているけれど、はたして自分のことをしつかり意識して見ているのかいなか……よく分からぬ顔をしています。彼が言葉も発せず、また目が、彼の黒い瞳が灰色になっているのも、全て病による影響だと長老様に聞かされました。しかし、何も反応もせず、何も言葉を返してこない彼を見ていると、果たして一体自分が何をしているのだろうかと、彼の世話をしていることに意味があるのかと、エウムは時々、ふと不安になるのでした。

しかし、そんな気持ちが胸の中一杯に……服に跳ね飛んで、付き、染み込んでいく汚れた泥水のよう……ジワジワと大きさを広げていった……ある瞬間！ ハッと気付き、彼女の顔が急激に、物凄く熱くなるのでした。今もエウムは、火照った顔を冷ますように、ブルブルと頭をかき回し、そして必ず一つ、突き出した厚ぼったい唇から、薄く細くため息を吹くのでした。

「さ……いくよ！」

エウムは膝を立ててグッと体中に力をみなぎらせ、ウジカの腰と背中に手を回し、そして力いっぱいウジカを持ち上げて寝床へと引つ張りました。しかし彼女の力ではなかなか及ばず、わずかに体が浮いては、少し横へ、わずかに浮いて、また少し動いてと、ゆっくりゆっくり、ワラの方へと運ぶのが精一杯でした。ウジカも氣を使つて、エウムを手伝うように自ら動こうとするのですが、彼の病気は背中や腰の神経が壊れていて、自分では思うように体を動かせないのです。一人とも、すぐに汗まみれになってしまって、それでも何とかゆっくりと時間を掛けて、無事にいつも寝床にたどり着く

ことが出来ました。

「ふう……」とエウムは一息を置いて、そして「口リと、彼を寝床の上で反転させました。

彼の……茶色い背中が……それはまるで火傷でただれたように酷く醜く汚れた……「腐れ花」の咲いた背中が目の前に現れました。

ここに、この村のことを少しお話しなければなりません。

この村の全ての男の背中には皆、あの先ほどの村の畠に咲き誇っていた「金色の花」が咲いているのです。この村に生まれた男の赤ん坊は、ある「洗礼」を受けるならわしがあるのです。それは、生まれたての赤ん坊の背中に針で無数の穴を開け（それは目には見えないほど細かい無数の穴です）、そこにこの村の象徴ともいえる「金色の花」の種をたっぷりとすり込むのです。赤ん坊の成長と共に、花は養分を背中から吸つて、一つは共に大きく育つていくのです。その金色の花が、太く大きく立派に育つほど、その男は天寿を全うし、美しく立派な人生を歩んだのだといわれています。そして、その男たちの遺骸はやがて死に、あの畠へ順々、植えられていくのです。またその畠でさらに大きく育ち、やがて花に多くの蜜が作られると、村人全員で畠へ向かって収穫をして、それを飲むのでした……長寿の妙薬としてありがたがられているのでした。

しかし……ウジカの背中の花は金色に光り輝いているどころか、花びらは土氣色に醜くよどみ、莖は狂ったように縦横によじれ曲がり、全てがグシャグシャに腐食し、さらに臭いを嗅げば、すえた鼻に付くような異臭さえ放つているのです。ウジカと花は共に生きており、朽ち果てた花は、背中に根ざした根っこから、どす黒い毒を吐き出し続け、彼に容赦なく痛みや苦しみなどの苦痛を与えて続けるのです。そのただれたようなあまりに酷い姿に、エウムはいつも見慣れたものながら、喉の奥からの吐き気を覚え、それを口元に手を当てて必死に押さえつけて、ようやくしてからグッと唾を飲

み込んで、そしてその背中に触れるのでした。はじめは触る」とさえためらい、恐る恐る指を当てて手当をしていましたが、三度四度繰り返して世話をすること、今ではすっかり自分には何もうつらない（女の子の背には花はありませんが万が一何かの偶然で菌が自分につりつてしまいやしないか……そう思つほどにその腐った花はおどろおどろしく見えるのです）と分かつてからは、手早く治療してあげることが出来るようになりました。

腐りきった花びらや葉を丁寧につまんで落とし、茎に髪の毛のようなどとも細い針を刺してある秘薬の液体（それは黄金の花の花粉や他に色々の薬草を混ぜて作られた薬です）を流し込み、そして仕上げにエウムは秘薬を今度は自らの口に含み、フウと霧吹きをして背中の花全体にかけてやりました。

じつして全ての手当が終わり、ふとウジカの様子を見てみると、この時のウジカは、霧吹きの秘薬の冷たさが心地良いのか、彼の頬は少し緩み、かすかに微笑んでいるように見えて、その顔を見るのがエウムの一番の楽しみなのでした。

「さあ、それではご飯を食べようね」

ひとまず仕事を終えて、一段落ついたので、ウジカのためにご飯を作ろうと、エウムは立ち上がり、一度小屋の外に出ました。二人はいつも一緒にご飯を食べるのです。

エウムは料理がとても得意でした。エウムの親……母親は病気がちで、いつも寝ていることが多かったのです。父親は仕事でとても忙しく、いつも家にいる母親は床に伏せていて、自然エウムは自ら家の家事を手伝うようになりました。結局エウムの母親は長生きせず、エウムが十年の年月を生きた時、母親は床に眠つたまま静かに息を引き取りました。

それからエウムは、親の忙しい、村の小さな子供たちの世話を進んでするようになったのです。幼い頃から人の世話をするのが当たり前の環境で育つたせいか、それは実際大変な仕事なのですが、頑張つて必死に働きました。それが彼女の大切な、彼女自身やりがいのある仕事なのでした。今ではたまに金の花の世話の代わりに、子供のお守りを任せされることもしばしばあるのです。

しかしウジカには、また特別な思いを持つていて、彼女自身進んで世話をしたがったのです。先に書いたようにエウムの家は母親が倒れていて、父親も毎日が忙しく、家ではほとんど一人ぼっちといつてもいいような世界で育ちました。幼い時分……体の小さい力の無い頃、料理を作つたり家事をするのは当然の重労働です。鍋を振るつたりすることさえ全力の力仕事なのです。また家にいるとはいえ母親は眠っている時の方が長く、家にいる時は誰とも話をする相手もなく、大抵は我慢できずに家を飛び出して、友達のところに行つたりして、寂しい心をごまかしていました。

しかしウジカは病氣のために、家でたつた一人ぼっちでいても、自力で外に出られないでの、友達のところに行くことは出来ません。

それ以前に、自らの病気の伝染を恐れられて、嫌がつたりからかわれたりするので、友達も誰もいません。ウジカの親は二人ともいません。エウムはそのことについて詳しくは知らなく、ただ両親とも生きていらないということだけは聞いています（村の人にはそのことを詳しく教えてもらおうとするとエウムは彼らに物凄く怖い目で睨みつけられてそれ以上何も聞けなくなってしまうのです。きっと何か特別な事情があるのかもしません）。

自分自身、たった一人で、話す相手もなく家にこもっている怖さを知っている彼女だから、ウジカがどんな恐ろしい病気を患つていると聞かされても、決して放つておくことが出来なかつたのです。

さて、エウムはひとまず小屋を出ると、水をくんでこよひと村の井戸へと向かいました。もう外はすっかり日が暮れていて、星空と、辺りの家々の明かりを頼りに、薄暗がりの真つ黒な草を踏みしめ踏みしめ、やがて井戸場に着くと、一人のおばさんが先に水をくんでいました。

「エウムちゃん、こんばんは」

「こんばんは」

少し緊張した面持ちでエウムは軽く会釈すると、くみ終つたおばさんと入れかわり、一度井戸の中を覗き込んで、綱を掴みました。すると背後からおばさんが、「ねえねえ」と、ヒソヒソ小さな声で話しかけてきたので、エウムは綱を持ったまま顔だけ振り向きました。

「あの家の子……まだ大丈夫なの？」

あの……というのは、いうまでもなくウジカのことでしょう。

「ハイ、なかなか良くならないけど……前より顔はずつと楽そうにしています」

「そう」

するとおばさんは、別れの挨拶もせず、そのままさつと帰つていきました。……それは少し、早くエウムから離れようと怠いでい

るようにも見えました。Hウムはしばらくあのおばさんの（少し驚いていたような）顔と、ウジカの顔を思い出して、サツと顔を戻して手元の綱を引いていきました。桶に水をいっぱい入れて、そしてそのまま一度自分の家へと向かいました。

「帰ったか」、部屋に入るとすぐに父親の声が聞こえました。

「ただいま、すぐにご飯を作るね」、ガタガタと足元の農具や道具を蹴つたりして、慌てて桶を置いたりしてご飯の準備を始めました。

「早くしろよ」

父親は、とてもよく働くのですが、とてもよくお酒を飲みました。今もご飯が待てないとばかりに、大分たくさんあおっていたようでした。父親は酒を飲むと少し気が荒くなるのですが、いつも仕事を頑張っているのだし、本当の気持ちとしては酒を飲んでいる時の父親はあまり好きじゃないのですが……そのことは何も言わず、早くご飯を作つて機嫌よくなつてもらおうと、急いでご飯の準備をしました。

食卓にご飯を並べると、Hウムはすぐに立ち上がり、幾つか料理を見繕い、大きめの袋にそれを入れました。

「またあの家で食べてくるのか」

「うん、お皿はそのままにしておいて。ちゃんとあたしで片付けておくから」

タジ飯はウジカと一緒に食べるのです。

「いつもベタツと世話をしているが、気をつけろよ」

「大丈夫よ、もうじれだけずっとお世話をしていると思うの。女の子にはうつらないから大丈夫」

「そうじゃないんだよ……」

そこで父親の言葉は途切れました。まだ何か後に続くと思つたけれど、父親はそのまま黙り込んでしまつたので、「なに?」と聞き返してみました。しかし父親は酒瓶を掴んで、注ぐことに目を向けてしまつたので、それ以上待つても何も返つてこないので、すぐに袋を持ち直して、家を出て行きました。

再びウジカの家に向かう途中、先ほどの父親の「そうじやない」という言葉の意味が……一体どんな意味を持っているのか、ふと頭の中に浮かんで気になつて仕方がありませんでした。歩きながら、おぼつかない真つ暗な足元から、ガサゴソと草の踏まれる音が、妙に大きく印象深く聞こえました。

ウジカの家に入ると、どうやら彼は眠つているようで、黒い影から細い寝息が漂い聞こえきます。エウムはウジカの肩に触れて軽く揺すると、彼はすぐに目を覚ました。お腹が空いているはずですので当然でしょう。背中に手を当てて起こしてあげました。

そして「飯をウジカの目の前において、サジを彼の手に持たせて、しっかりと握らせました。お世話のはじめはエウム自らご飯をすくつてあげて食べさせていましたが、それではいつまでたつても一人で食べられないし病気も治らないだらうと思つて、今では自分でサジを持たせて食べさせました。幸い指にはさほど症状が出でいないので、腕はゆっくりりゅつくりしか動かないのですが、それでも……ひとくち……ふたくち……と何とか食べることは出来ました。今日も上手く食べられるようになつたのを確かめて、あらためて自分もご飯を食べ始めました。

04・ウジカの不思議な力 事件発生

食事も終つて、エウムは片づけを済ませると、しばらくウジカと「遊び」ました。やはりウジカの体の体操の意味もあつたのですが、それ以上のウジカは凄い才能を持つていたのです。

「いい? ここに十枚の紙があるよ。この中に丸を書いた紙が一つだけあります。さあそれはどれだ?」

エウムは持ってきた紙に、一つだけ何か目印を書いて、それを裏に伏せたままウジカに見せるのです。ウジカはその紙のことは何も全く知りません。

「…………、…………」

ウジカはヌウツと手を伸ばして、紙の上を右へ左へ動かして……ある紙の上で止まって手をのせました。

「それ?」エウムは少し目を見開いてウジカにたずねました。ウジカはコクリとうなずきました。

「正解、凄い凄い」

エウムはウジカの手を退けて、その紙を裏返すと、ちゃんと丸が書いてありました。

「ウジカは紙が透けて見えるの?」

それはウジカのとても不思議な力でした。

今日はもう時間も遅いためまだ簡単なことでしたが、ずっと前に、エウムが食事の片づけをしている時、ウジカは突然、地面に指を立ててなにやら絵を描き始めたようなのです。それまでそんな姿は見たことがなかったので、何を描いているのかと興味津々覗き込んでみました。震える手で書くのではつきりは分かりませんが、大きく立派な三角形の上の角に、これまた大きく太い十字架がつけられて、その三角形の囲まれた中には丸模様が。もう一つ、水の零が落ちてくるような涙の形が、その十字架三角の真上から降りかかるように

垂れている……そんな絵でした。

はたしてそれが何を描いたのか全く分からなかつたけれど、エウムはただウジカがそんな絵を自分から積極的に描いたことが嬉しくて、「凄い凄い！」と、とても興奮して拍手しました。エウムはその地面を削つて掘り出し、絵ごと土くれを、木箱に入れてしまつておきました。それはきっとウジカにとって、とても大切な宝物になると思い、木箱はウジカの部屋の隅に大切に置いておきました。

さて数日後、長老様の家である事件が起きたのです。長老様の家に村の宝として保管してあつた、ある丸い宝玉が消えてなくなつたのです。怒り狂つた長老様は、村の者どもを村の中央の広場にいつせいに集め、次々に尋問をはじめました。

「貴様が盗んだのか！」、あるお腹が林檎のようにまるまる太つた男のところで、長老様は止まって、厳しく声を掛けました。

その声に恐れをなしたのか、林檎腹は何か気まずそうに眉根をひそめて、ブルブルと指先を震わせ縮こまるばかりです。その男は村一番の急け者で有名で、時に人の家に忍び込んで食べ物を食ひ漁つたことが何度かあつたのです。

「貴様……宝玉をどこにやつた！」、林檎腹の煮え切らない態度に完全に怒つた長老様は、男の頭を踏みつけて地面に押し付けると、男の背中に生えている金の花の茎を掴んで、引っ張りました。根がしつかり体に食い込んでいますので、背中の皮が伸びて、ギリギリ……と背中がきしんで音が聞こえるほど強く引っ張られています。「ア、ガ、ガ、ア、ウウ……！」

林檎腹の声にならないほど悲痛な叫びが漏れるように聞こえます。花の根は体の骨に絡みつくように生えていて、絶対に抜けることはありません。また茎の中にも骨のようなものが入り込んでいて同化しているのです。

何度も、何度も、引いて、引いて！ 拷問を続けましたが、一向にらちがあきません。すると、それを見ていた長老の側近はたまり

かねて、「もうそのぐらいで……」この男は少々頭が弱いのです。花の痛みは神経に響く痛み。どうかお放しになつて、詳しく話を聞きましょう」と言いました。

長老様の足元からは……ハアハアハア……地面に顔をつけように伏せていて、男のくぐもつた息が寂しく聞こえました。

「宝玉を盗んだとなれば、簡単に許される罪ではないぞ」

「お前はそこまで落ちてしまつたのか」

「さつさと白状しろ」

「こいつは働かず、親には今でも迷惑をかけているんだぞ」

「こんな奴、追放してしまえ」

「そうだ、働かない奴など死罪と同じだ」

「死罪にしろ、死罪にしろ！」

周りからそんな声が、囁きから叫びへと声がどんどん強く大きくなつて、地面の男に降り注がれました。死罪というのは、この村の定めで「背の花を全て強引に抜き取る」というもので、根に骨が引張られ、肉が裂け、体がバラバラになるのです。

林檎腹を取り囲むように村人が幾重に輪を作つていて、その場を遠くから眺めていたエウムは、ふと目を外にそらすと、遠くの方からオズオズとした物腰でその場を見ていた男の両親を見つけました。両親の近くにいた人が、ふと振り向いて彼らを見ると、両親はスッと顔を横に向けてしまいました。気まずく思ったのかと思えばそういう様子でもなく、唐突にどこぞ歩き出して、その足で輪の方に入つていき、長老様のところへ近寄りました。

「長老様、こいつはいつまでも家で寝てばかりのまるで怠け者、まるで働くことをいたしません。どうかこいつを成敗してやってくださいませ」

「何を言うか、それを育てたのはお前たちだぞ。お前たちが何とかすることだら?」

「私たちの言葉などまるで耳を貸しません。長老様の仰られることならば、いへりこいつでも意味ぐらいは分かるでしょう。どうか長老

様の手で……」

長老様は両親の言つことにも少し呆れたようで、やや困ったように渋い顔を作りましたが、ややあつて氣を取り直して、あらためて林檎腹の方を向きました。

「顔を上げろ」

静かな落ち着いた長老様の声に、男は恐る恐る上を向きました。「盗んだのなら、ただちにここに出せ。されば命は助けてやる。ただし、村を追放だ」

すると林檎腹は何か目じりに悲しみのような細いしわを作つて、オロオロと顔を横に振りました。

「盗んでいないといふのか、では何故先ほどはあれほど動搖した？後ろ暗いことがなければ怖がる意味はなかろう」「

しかし林檎腹は、相変わらず首をブルブル震えるように横に振るだけで、一向に要領を得ません。すると、ある一人の長老様に仕える仕官が、「長老様、こやつの服をはぎましょ。もしや体のどこかに隠しているのかもしぬません」と言いました。

フム……と頷き、長老様は数人の仕官に指図をして、林檎腹の手足を押されて、全て素つ裸にはいでしまいました。しかし、服の隠しは勿論、体にあるあらゆる隠し場所や、薬を飲ませて嘔吐させましたが、しかし宝玉は出ませんでした。

結局、その場では答えは出ないまま、長老様の提案で、「長老様と仕官で、村人全員の家を取り調べる」ということになりました。林檎腹の家は勿論、エウムの家も、ウジカの家は……特にエウム一人で調べられました。しかしこの家にも見つからなかったのです。

「長老様、もしや盗賊が入り込んだのでは……」仕官の一人がそう呴きました。

「かもしけぬな。この村は周りは金の花で埋め尽くされているが平原だ。監視の者によほどのことがない限り何か見落とすとは考えられぬが……」長老様は見張りの者を前に並べて、睨みつけました。

「交代で昼も夜も見張つておりましたが、怪しいものは何もありませんでした。風がやや強く吹いていて、花がいつもよりはうるさくざわめいていましたが」

「そのざわめきで、人の足音を聞き逃したのではないか？」

「そう言われてしまふと……」

……結局、見張りの証言があいまいなので、盗賊が入り込んだといふことに決まってしまったようでした。

「愚か者め！ 貴様らには後で相応の罰を与える！」

最後に長老様は激昂し、一人の見張りの頭を杖で叩いて、邸宅の方へと戻りました。そしてその事件はひとまず終止しました。

しかし、それから何日も日が過ぎ、皆、日々の忙しさにその事件のことを忘れていた頃、思わず形で真相が発覚しました。

村にある井戸が枯れたり何か起きることから守る役割を担う、ある女がその犯人だったのです。その女が夜にこっそり長老様の家に忍び込み、宝玉を盗んで、それを井戸の中に沈めておいたのでした。村の皆が寝静まつたある夜に、女は一人、井戸に近づいて、宝玉に繋げてあつたとても細い糸をするすると上にあげていた時、通りかかった見張りがその姿を見つけ、ひとつうなづかれたのです。

「宝玉を盗賊に渡さなければ家族が殺されてしまうのです」、女はそう言い訳をしました。

数ヶ月前に、ずる賢い流浪の盗賊が女に近寄り、女の子供を人質に取り宝玉を奪えと命令したということでした。

「子供はまだ捕まっているのか？」

「はい……今夜の月が天の真上に昇つた頃に、村のはずれの大樹の元で落ち合つ約束を……」

「フム……それは困った。子供はどうにかせねば……」

長老様ら周りにいた野次馬の皆が首をひねつてみると、その連中をかき分けて一人の男が姿を現しました。女の夫でした。

「長老様、今回はどんでもない迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「して、お前は見張り番役だらう？ 今回の盗賊のことについて何も知らなかつたのか？」

「はあ、うかつながら、村人皆で行う花の蜜の収穫の時に、妻が子供と一緒に、他の者と少し離れて仕事をしていて、その時に盗賊が近づいたと」

「そうじゃない、見張りでいて、そのよつ怪しい者を見つけられなかつたのか？」

「私は番の時は常に真剣に仕事を取り組んでおります。勿論、子供がいなくなつてからは、特に注意して、いつもより広く長く見張りをしています。しかし奴は用心深いのか、この村に下手に近づくような油断はしていないようです」

そして、シーンと、しばし沈黙が流れました。すると夫が何か決心したような強いまなざしで、長老様に言いました。

「とにかく、今夜の盜賊との接触は、私が行きます。何とか子供を連れ戻します！」

「駄目よ！ 私が行かないと、あの子は殺される！」と、妻が突然叫び出しました。

「夫でも、また誰でも他者を連れてきては駄目と言われてるのよ」「しかし、君一人ではうかつに行つては返り討ちにあうぞ。宝玉を渡すというのか？」

「それは絶対にならんぞ！」長老様が激しく怒りました。

「しかし……そうだ、私も行こう。なに、他の誰にも見つかれないようになまく隠れて近づくぞ。隙を見て、子供を助ける」

そしてこの夫の提案で万事が決まり、早速今夜に向けての準備を、村をあげて始まりました。夫は見張り番という仕事柄、闇に隠れて動くのは得意です。そして、村人全員は、万が一のこと備えて、賊との約束の待ち合わせ場所である大樹の、すぐ側の金花畠の中に身を低くして隠れて、いつでも助けに入れるように準備しました。長老様は、側近や、他の見張り番の者と共に、村で一番高い監視台に居座つて、全ての様子を見張っていました。

そして、約束の満月の中天に昇る真夜中になりました。

村人たちは息を殺し、花の茎の間から大樹の方を食い入るように見つめ、長老様たちも息が詰まるようなこの夜に緊張した面持ちで大樹の周りを見渡していく、そして妻は手には宝玉を似せた石を持ち、ゆっくりと大樹の方へと歩いていく。夫は……妻のいるところとは大樹を挟んで反対側にいて、地面に伏せて、腹ばいになつて、少しづつ……大樹へと近づいていきます。

辺りは、シーン、と静まり返っています。そこらに村人たちが皆ひそんではいるといふのに、まるで誰もいないかのような……静かにそよぐ風に金花が揺れ、その小さな葉擦れの音さえはつきり聞こえるほどに静かなのです。白い月が、田の前の大樹をまばゆく照らし、不気味に光るその木こそが、かの盗賊であるかのような、ズン……と妖しげに一つ大地に立つてあります。

やがて妻は木の根元、すぐそばまでたどり着きました。木の根元は、上に大きく膨らんで生えていた枝や葉に邪魔されて、全くの陰になつていてよく見えません。そこに盗賊はヒツソリ潜んでいるのか……妻は目を凝らしてうかがいました。すると、木の幹に、何かで削つたように、文字が書いてあるようでした。辺りに人の気配がありません。恐る恐る近づいて、その文字を読んでみたところで、以下のような文句が書いてありました。

『宝玉を置いて立ち去れ』

「誰かいの!? 宝玉は持ってきたわ! すぐ子供を返して!」
妻は、グルグルと辺りを見回してそう叫びました。

さて困りました、このまま言つとおりに宝石を置くべきなのか。しかし子供がいないので、全くお話になりません。どうやつてこちらに返してくれるのか。それに、石は偽物なので、仮に賊の命令どおりにすれば子供が帰つてくるとしても、この偽物を置いておいて、それを見た賊が怒り狂つて、そのまま子供を殺してしまうこと

さえ考えられます。本物の宝玉はもう長老様にお返ししてしまって、いまさらやり直すわけにも行きません。

妻は大いに迷つて、助けを求めるようにオロオロと辺りを見回しましたが、しかし一つの決心をして、偽者をその木の根元に……賊の指示通りに従いました。石を置き、少しづつ大樹から後ずさりするようになっていました。やがて妻は、金花の陰に村人皆と一緒に隠れて、息をひそめて待ちました。

「（大丈夫、絶対に助かるよ！）」、隣にいた人にそう励まされ、妻は頷き、そして沈黙しました。

07・夫の決心

時が止まったような静寂です。さっきまでの弱い風さえも止まつてしまい、ただゆつたりゆつたりと空の雲がたゆたつていて、地に落ちた影が、辺りを暗く隠したり明るくなったり……。

すると妻は突然ハッとした表情をしました……根元の偽物が無いのです。妻は慌てて立ち上がり、よく目を凝らしました。しかし遠くてよく見えないので、小走りで近づいていきました。

「……ありません。偽物の宝玉は、忽然とその姿を消しています。『おい、これを見てみろよ』と、それはいつの間にか駆けつけていた夫の声でした。

妻はその指差す方を見てみると、偽物を置いておいたすぐ近くに、小さな穴があいています。

「こんな穴、知らないわよ。石を置いた時にも無かつたはずよ」「まさか……」

夫は突然その穴に手を突っ込みました。丁度その大きさは腕がピツタリはまるくらいで、モグラの穴のようにも見えます。

「中が、空洞だ。よし！」

腕を引き抜き、その穴を広げるよう土を掘り始めました。すると中は大きな空洞になつていて、地面を這つぱりすっと洞穴の道が出来ていました。

「この中にひそんでいたのか……お前が最初に木に近づいた時には既に居たんだ」

「穴は無かつたわ」

「おそらくギリギリまで掘つてあつて、お前が木から離れたのを見計らつて、手が出るくらいの小さな穴を掘り開けたんだ。それで宝玉を掴み取つて……」

隠れている村人や、長老様も、事情が読めてきたのか、もう隠れ

もせずに、皆が大樹の下に集まりました。

「あの子は……どうなるの？」

妻のその言葉に、誰も返す言葉がありません。結局、石だけ相手に持つていかれて、交換するはずだったのに、子供の姿はどこにも現れません。騙されたのか……後で子供を返してくれるのか……それはあまりに絶望的な希望といえるものでした。もし後で子供を送り返してくれるとしても、賊が宝玉の偽物であることに気付いたら、どうなるでしょう。きっと相手は怒り狂って子供を……。

「私が、行きます」、唐突にそんな声が聞こえ、周りの皆がいっせいに声の方向を向くと、夫が胸に拳を作つて、まっすぐに立ち上がっていました。緊張した目には、強い覚悟の意志を感じられました。「この穴を辿つていけば、賊のいるところへ通じているはず。行きます」

「ウムウ……穴は一人が通れるだけの広さ、危険ではあるぞ」長老様が仰いました。

「偽物の宝玉なんです。放つておいたら必ずあの子は……殺されてしまします」

「フム……」長老様は腕組みをして難しい顔をしています。

「それで……一つお願いが……一生のお願いがあります

「なんじゃ？」

「宝玉を、本物の宝玉を、お渡し頂けないで……しょうか？」

すると長老様は声には出わすとも、恐ろしいほど鋭い形相で夫を睨みつけました。

「お願いします！ もう下手に賊を刺激しては命取りになります！ 本物を相手に渡して、ちゃんと相手の条件にしたがつて交渉するのです！」

夫があまりに真剣にお願いをするので、長老様はやや深く思案にふけました。腕を組み、うつむいて、ブツブツとなにやら小さな声を漏らして、やがて何か心に固く決めたように頭を上げました。

「やはり駄目じや。もし貴様が賊に脅されて、宝玉だけ奪われてしまつとも考へ得る」

「……」で夫は言葉を挟んで言い返そうと口を開きましたが、すぐに長老様の言葉が重ねて、

「我々も至急、辺りの畠を搜索する。一いつして穴を掘つてゐるんだから、出口はさほど遠くではあるまい。一重で探せば、すぐに賊は

「ウ、ア……はい、分かりました……」

そして妻と共にもう少しだけ穴を大きく開けて、そして夫は頭から突っ込んで穴へと這い込んでいきました。暗い穴の中へと、落ちるように消えていく夫の後姿を、皆で祈るように見守りました。

穴は体がぎりぎり通れるくらいの大きさで、背中や両肩で土の壁を擦りあげながら、ズルズルと体を引きずるように這つていきました。時折、道は少し曲がったりして、頭をぶつけたりしましたが、痛みなど気にしている場合ではありません。

「（一体どこに通じているんだろう……下手して出口を出たとこを後ろから襲われないだろ？）」、そんなことを考えると、わざとまでの勇み足が少し弱まってしまうのです。この進む時の擦る音でも感づかれるかもしれない……少し進む速度を落として、慎重に、慎重に、ジリジリとした焦りを必死に抑えようとしながら、暗闇の見えない一本道を辿りました。

やがて、頬にかすかに風を感じました。土の道は蒸し暑いので、その風が心地良く感じました。

「（出口が近い……）」

とたんに緊張が、胸を押し潰すかのような衝撃が、心臓に走りました。

した。

「（一体どんな奴なんだろ？……）」、闇の出口、そこには我が子を奪い妻を脅迫する恐ろしい敵がいるのです。怖くもあり、しかしまた、それを超えるほど怒りもこみ上げてきます。体がじつとりと汗ばみ、既に顔も体も土まみれでしょう。暗闇の夜、真っ黒な姿で現れれば、自分の姿を闇に隠して、上手く子供を助けられるかもしない……そう思いました。

そして、やがて光が見えてきました。

それは何か揺らめき、せらめこっていて、不思議な光でした。星空にしては、どこか幻のよくな……不思議な輝きをしています。

慎重に進んでいき、ポツカリと開いた出口がはっきりと分かり、頭を下の地面にこすりつけるようにして、進みながら外を窺い窺い、

やがてその不思議な光がはつきり分かりました。出口のすぐ下には、水がたまっているのです。星や月が水面に当たり、水面が揺らめいていたのです。

「（……池？　……水溜り？　ここは……どこだ？）」

とにかく遠くてはどこなのかよく分かりません。夫は思い切って、グッと体を穴からり出して、上を向きました。

それは、真上へと長く伸びるトンネルでした。横に伸びた洞穴から出たら、また真上へと穴が続いて伸びているのです。そして、ふと、何かが見えてきたようでした。

「（ここはもしかして、…………井戸？）」

そう、その垂直の穴は、さっきまでぐぐつてきた「ゴボゴボ」の穴とは違つて、周りの壁がきちんとしたまっすぐな形に固められています。よく見れば、壁には取っ掛かりが幾つも付いていて、それに足を掛けた上に登れそうです。夫は気持ちを固めて、縦穴を登り始めました。

やがて、上の出口から頭を出すと、そこはやはり見覚えのある村の井戸でした。

「（どういうことだ……まさか……まさか犯人は……村の者！？）」
それはゾッとする考えでした。もし村の人間だとしたら、唯一犯人と接触をした妻は……その顔を知らないはずはありません。

「（どういうことだ……まさか……まさか……妻は全て知つて？）」

その時、首筋に冷たいものが触れ、その恐ろしい感触に体中の毛が逆立ちました。

「動くな、喋るな」

その声は間違いなく、妻の声でした。

「…………どういうことなんだ」

「説明する必要は無いわ、あなたは死ぬから」

あまりに冷たく、あまりに無情な言葉でした。

「立ち上がりなさい」

突きつけた刃物で頭を突かれて、夫はなすすべなく従いました。

「他の連中は外をずっと捜索している、まさか村の井戸に繋がっているなんて思いもしないしね」

妻はそう喋りながら、歩けと突いてきます。促されながら、聞き返しました。

「狂言だったのか、お前一人の」

「…………」

「あの子はどうしたんだ」

「…………」

「一体何を考えてこんなことを」

「黙れ」

「痛ッ」

グッと刃物を強く押され、首に痛みが走りました。

もはや二人の間は、「夫婦」というつながりは完璧に壊れていることは明白でした。单なる……いや他人よりもずっと遠い存在であるような一人の「女」、それはある意味で突きつけられた刃物よりも怖ろしいものでした。

やがて“女”に連れられて着いたのは、長老様の家でした。屋根のてっぺんに十字架の付いた大きな邸宅は、まだ誰も人が戻っていないと見え、明かりは何も無く真っ暗です。

男は目だけ後ろを見ようとしたら、そのまま中に入れと……再び刃物を傷口に当てます。痛みがしみて、刃先を離そうと首を下げ、肩をすくめました。しかし門をくぐり、入り口の戸に手を掛けても、扉は開いていません。どうしようもないと男は両手を左右にあげてポーズすると、

「横の窓へ行け」

女が低い暗い声でそう言いました。

窓は一面大きな硝子窓で、その前に男が立つと、女が突然後ろから背中を蹴りました！

突き飛ばされ、混乱してとにかく顔を守るために腕を前で組み、勢いはそのまま、窓硝子に激突し、ガシャガシャンと大きな音を立てて窓ガラスは粉々に割れ、長老様の愛用する絨毯の上に転がり倒れ込みました。

「皆は烟のずっと遠くを探しているわ。ここには誰もいない」

後ろから、汚れた足のまま家中に入る女の静かな足音が……恐ろしくて、男は体を起こし、向きを変え相手を睨みつけ、しりもちを付いた格好でズルズルと後ずさりしました。

「痛……」、両腕は硝子で切れて血まみれで、ベットリと絡み付いていて、下がる時に何度も床を滑りました。

女は腰に手を当てて、落ち着いた格好で仁王立ち、じちらを冷たく見下ろしています。

「立ち上がりなさい」

「どうするつもりだ、長老様の家なんかに来て」

「さつさと立て」

「クッ……」、血が沢山出てきて、少しぴくらきとします。両足を踏ん張つて立ち上がりました。

「長老の金蔵へ案内しなさい」、刃を首筋に当てて女は威嚇します。「金蔵に宝玉がしまわれているのでしょう、お前は合鍵を持つているのでしょうか？」

「まさかそのために！」、男は、女の告白に息を呑みました。男の目の色が、弱弱しい恐れから、急激に、鋭い怒りの光を帶び始めました。腕の痛むことも構わず、段々と拳に力がこもってきます。

しかし……「……あなたは何も知らないからね」、そう女は寂しげにポツリと呟きました。

「な、何が！」、男は少し氣後れがして、しかし疑い眼で油断無いよう、言葉は強く氣勢を吐きました。

「いない子供は、どうしていると思うの？」

「そ、そうだ、誘拐されたつてのが嘘なら、あの子はどうなんだ。家にはいないぞ」

「あの子は、もう、『死んだ』わ

「死ッ、ン……！」

あまりに驚きの告白……思わず身を乗り出して、血で滑つて横に倒れ転がりました。

「フン、あなたはいつも家にいないんだから知らなくて当然ね」、愕然とする男に向かつて嘲笑の笑みを浮かべています。

「どうこう、ことなんだ？」

「この村によそ者が来たところのは本当よ」

「賊が……」

「いいえ、魔法使いよ

「…………」

「魔法使いがあたしにこう言つたの……『お前の村一番の宝物を譲れば、秘術で必ず子供を治してやる』。それであたしは、長老の宝玉を盗んでやつた。フフ、あの阿呆、頭はイカれてるけど、人の

命令にはしつかり従うわ

「林檎腹の奴か、やはり奴が盗んでいたのか」

「アンタは知らないだろうけど、アイツはあたしに惚れてたみたいだからね。フフ、いつも色々な雑用に使ってたのよ

「それで、子供は、治つたのか？」

「……魔法使いは現れなかつた。約束の大樹の下で子供と待つたけど、誰も現れず朝を迎えてしまつた」

「ちょっと待てよ、それが今田じやないのか？」

「もう何日もずっと前の話よ。それから毎回、満月が中天に昇る日には必ず大樹に行つたけど、全く現れる気配が無い。騙されたと思つたわ」

女……妻から次々発せられる真実に、ただ啞然として、頷き伺うことしか出来ません。

「何故僕に、そのことを知らせなかつたんだ。そうすれば何か……」

「村を守ろうとしている男に話せというの？ 前の林檎腹のことを覚えてて？ きっとあなたはあたしを長老に知らせていたでしょう。そうしたらあたしは確実に長老に鞭打たれるわ

「しかし……」

「あなたが誰よりも信用ならないことは、あたしが一番よく知つている。ずっと昔に村で食の中毒が蔓延した時のことを覚えてるの？ あなたは村の一大事だとか言って、あたしたちの子供のことをちつとも気にかけなかつたじゃない」

「それは……仕方が無いだろう……あの時は本当に村全体がとても危険だつたんだ」

「とにかく、あなたを頼るなんて思いつくことすらないわ。そしてあの魔法使いが現れないまま、……あの子は『死んだ』。もうどこにも、『いない』の」

「…………」、男の……夫の生氣がみるみる青ざめ、力なく絨毯にグツタリと体を横たえています。

「もう全てが終ったの」

「何も、何も僕は、知らなかつた……」

「それで、自分が許されるとでも?」 クスリと、あざ笑う妻。

「しかし、もう宝玉を盗む意味は無いのだろう? もうこんな馬鹿な真似は止めて、事情を長老様にお知らせしよう」

「これから、最後の仕上げをするのよ」

「な、何を……?」

「こひよ

……夫の胸倉に、刃がスルリと刺し込まれました。

「ア……ガツ!」、夫は口から血を吹き、苦しさに両手で空気を掴むように動かしました。

「サヨナラ」

「…………ッ!」

夫の声は音にならず、やがてガクリと首が折れ、ゆっくり沈もうに倒れ込みました。背中の金花が、ツンと茎を張り誇り高く咲いていた背中の花は、夫の命と共に、命の流れをピタリと止め、いきなり茎が折れたように全ての花が力無く曲がり、金色は内から毒が染み渡るよう黒色が侵蝕し、やがて一瞬のうちに腐り、土ぐれのようになってしまいました。

その様子をつぶさに観察し、確かに死んだのを確認して、夫の手を取つて、その刃物の柄に握らせました。

夫……男の懷を探り、服の裏の隠しに鍵を見つけると、それを盗み取りました。やがて女は静かに立ち上がり、あらためてその死体を見下ろしていると……耳に、痛いほどの静寂が襲ってきました。

真つ暗な長老の邸宅、月明かりだけが青白く辺りを照らし、目の前に転がる、打ち捨てられた人形のような体からは、真っ黒い血がジワリジワリと、深い深い底無しの水溜りをつくっていく……。

「（フン、何を怖がつてゐる！　後は、宝玉を持っていくだけ。全てを壊して、この村を出て行く。そう、それから全てが新たに始まるのよ）」

気付けば女の体は細かく震えていました。自身に叱咤するよう、「平手を自分の腕に打ちつけると、氣を取り直し、鍵を握り締め、死体を通り越して、家の奥へと進んでいきました。

やがて一つの重厚な鉄の扉の前に出ました。女は手の鍵で穴に差し込み、ガシンと重々しい音を立てて錠が開きました。女の心臓は段々と重く大きく鳴り出しているようでした。もう後戻りの出来ないところまで犯している“罪”。後ろに帰ることは出来ないという、怖さ。汗ばむ掌で力いっぱい（鉄の扉の冷たさが女に得体の知れぬ恐ろしさを与えてきました）、押し開きました。ところどころ鎔びていて、ギリギリと濁つた音を立てて、ゆっくりと口を開けていきます。

かび臭いにおいが辺りに漂い始めました。

女は左腕で口と鼻を覆い、慎重に中へと足を運びました……もしや陰に何か長老の仕向けた刺客が隠れていやしないかそんな気がしたのです。が、誰も人の気配はないと安心すると、まっすぐに闇の奥へと歩を進めました。林檎腹からあらかじめ金蔵のことのある程度聞いていたので、確認しがてら、すぐに宝玉は見つかりました。

「（……よし）」、手を伸ばして取ろうとした……その時、何かに

……気付きました。

「何？……きな臭い……まさかッ！？」

金色の村が、満月の夜に、真っ赤に燃えています。炎は長老の家を囲つて、「ゴウゴウ」と焰を、屋根の上の十字架へ、黒空へと高く伸ばして、勢いよく豪奢な邸宅を焼き尽くしています。

「鼠め、炎で炭になるまで燃えてしまえ！」

長老様は赤き炎に向かつて、そう叫びました。

長老様は一度宝玉を盗まれてから、盜賊のことを探りながらも、また村人のことも同時に部下に探らせていました。ある日エウムが、ウジカの描いた土の絵の入った木箱を持って、長老様にお見せしたことがありました。

「これ、ウジカが描いたんですよ。手を動かすのも大変だったんだから凄いですよね」

「何だこれは……記号、暗号か？」

「うーん、よく分かりません。でも、この三角の上に十字が描いてあるのは、これってひょっとして、長老様のお家を描いたのではないかと思いました」

長老様はエウムから木箱を受け取り、ジッと覗き込みました。

「なるほどどうかも知れんな。しかしあやつ、ワシの家を見たことがあつたか？ 生まれて奴の命名の時には一度来たが、それは記憶もままならぬ幼き時。それからすぐに病気を発して、一度も家には近寄つたことも無いはずだがな」

「わたしが色々お話しているので、きっと何となく知っていたんだと思います」

そして、ある日、長老様はハツと思つたのです。あのウジカが描いたという、意味の不明な絵……二角の中の“ ”、そして雲がそれに垂れるように落ちている……まるで何か意味を持つて暗示して

いるように、ふと思つたのです。

それが、あの井戸守の女の事が発覚されて、にわかに女を怪しく思いました。しかし女の切迫した話を聞いたりしているうちに、ふと迷いが生まれました。あの絵を描いたのは、所詮、方端者の戯れ事。そんなものを眞面目に信用するべきか。いや、少なくとも女の言つことの方が信用に足る。しかし、一抹の疑念も完全に晴れるわけでもない……何故女はもうずっと前に宝玉を盗んでいながら、未だに手元に持つていて、そして子供が消えているのか。

そこで長老様は、女の言つことも半分信じながら、もう半分では女のことを疑いつつ、罠を張りました。宝玉はあらかじめ、長老様の手で別の場所に移し、邸宅の中を空っぽにしておきました。そして見張りの者の連絡を受けて……女が邸宅に入り込んだと……それを聞いて、すぐさま盜賊探しから引き返し、邸宅の前に来ると、部下に命令し、火を付けさせました。

「疑わしきは、罰せよ。灰となり、全て消えてしまえ」、不気味な呪詛を唱えて、長老の顔も真っ赤に血を浴びたように光っています。

炎は一寸中うなりを上げ、やがて明け方になり、不意に通り過ぎた通り雨が、静かに、赤い地の熱を完全に奪い去りました。朝日が村に注がれ始め、雨に濡れた金花が眩く光り、辺り一面、目の痛いほど輝きに包まれました。

焦げ臭いにおいが立ち込めています。火も消えて、熱も落ち着いたと見た長老は、目の前の自分の館だった黒炭の山へと近づいていました。杖で所々焼け跡を、掘つたり、崩したり、右から左、奥から手前と、入念に突き回しました。が、あの女の死体は、跡形も残らないほど完全に焼き尽くされたのか、ついに見つかりませんでした。

炭山から出て、近くにいた部下に命令しました。

「さて、新たな家を作らなくてはならぬ。おい、棟梁や連中を集め

て来い。二日三晩不休で急いで作りせら
部下は皆、何も言わず、ただ頷き、そして急いで動き出しました。

時は今に戻り、もうすぐ金花の種が実る季節です。

金花は、花びらは年中いつでも咲いているのですが、その命の元である種は、何ヶ月か置きに周期的に作られます。男の背の上で咲いている時は、精力は全て男が吸収し、力となり栄養となるので種は出来ません。地に植えられてから、種は次々に出来てきます。

また種は新たに土に蒔かれるのではなく、全てが収穫され、村の大きな倉にまとめて持つてきます。もし仮に地に落ちたとしても、種はなぜか根を下ろさず、そのまま土となり、地に帰ってしまうばかりなのです。倉の中で、種は中に含まれている油を搾り取り、それを力メに入れてたくわえておくのです。

エウムはその仕事をするのがとても好きでした。金花の種を取る時、とても良い香りがブンと漂うのです。それは鼻の粘膜から直接脳へと伝わっていき、甘くとろけるような心地良さを覚えるのです。時々、力が入つて手の中で潰れた種が、また良い香りを発して、こつそりその油を舐めたりすると、フツと目の前が真っ白になつて……いいようの無い震えるほどの心地良さに頭が眩むのです。その幸福感は他では代えようも無いほどの強さで、本当ならもつと舐めたいのですが、それが見つかると長老様にきつい仕打ちを受けるのです。

「種の油は貴重な商品、勝手に舐めるんじゃない」と、物凄い剣幕で叱られてしまします。

仕方なく隠れ隠れ舐め、そして眞面目に一生懸命、種を集めています。背中にしおった大きな布袋に詰めていきました。

またこの至極の香りは、恋の香りでもありました。

背中に金花を咲かした男たち……彼らの背中からも芳しい甘い香

りが立ち込めていました。男に抱き寄ると、ふと彼女たちの鼻に、背中から漂う香りに意識が奪われ、男の腕に包まれて、女たちは皆、幻の桃源郷へと飛び立つていくのです。男の腕の中で、夢の世界に眠るのです。

しかし、エウムにはそんな男性はいませんでした。というのも、毎日ウジカの世話をかりしていて、周りの男たちは、エウムの体にウジカの病気の菌が付いていると思い、近づくことさえも避けがちなのです。そして勿論、ウジカの背中の金花は、どす黒く腐っているので、あの甘い香りは全く漂ってはいません。

でもエウムは毎日がとても忙しいので、そんなことは何も気にしてはいませんでした。

さて、ある日のこと、です。その日も金花の種の収穫の仕事があり、エウムたち、村の女たちと共に、男も総出で畠へとやってきました。地平線まで広がる金花の畠、村の者は皆、各自の任せられた場所にバラバラに分かれ、種取りの仕事が始まりました。のんびりとした陽気な日で、朝から暖かな太陽の光りが金花を照らし輝かして、とても心地の良い仕事日和でした。

しかし始まつてまもなく、唐突に、辺りの穏やかな花畠の空気を切り裂くような、女の鋭い叫び声が走つてから、畠の空気は一変しましたのです。

「皆！ これを見て！」

女はあまりの興奮に声が裏返り、顔を……眉や目口をきちがいじみた形に乱して、畠の前の辺りを震える指でさしています。辺りに数人の女と男が集まり、その示す方を見てみると……金花に……黒い斑点が……花びらや茎に、まだらに、妖しげに浮かび上がつたのです。周りの者たちはいっせいに悲鳴や奇声をあげました。

「長老様！ 長老様！」

誰かが大きな声で叫びました。

長老様は遠くで仕事を監視していましたが、すぐにその異変に気

付き、カツカツと杖を突いて、事件の中心へと向かいました。

「なんじゃ、どうした！？」

騒ぐ連中に活を入れるように大声で怒鳴り、既に二重二重になつていた人の輪を掻き分け、未だ腰を抜かして指差している女の前へ出ました。

女は声にならないようなので、そのまま“その”金花を見て、ハツと顔を曇らせました。

「これは……凶兆じや」

「長老様」、部下の体の大きい屈強な男が、後ろから声を掛けました。

「私の生きている内に限り、このようないことは初めて見ました」

「……ワシは、一度だけ、これと同じようなものを見たことがある」ザワリと、周りの者たちが息を呑みました。

「その時は、一体どうしたのですか」

「災厄の原因、それを焼き払つた、この世から消した」

「原因……」

「ウジカジヤ！」

エウムは仕事が始まつて、しゃがみ込んで一つ種を取り、香りを嗅ごうと鼻に近づけたその時、唐突な長老様の叫び声にびっくりして、持っていた種を地面に落としてしまいました。まさか香りを嗅ごうとしたことがばれて怒られたわけではないと思いつつ、自分に對して怒られたような氣もしてしまい、ドキドキと立ち上がって、そちらの方を見ました。

「どうしたのかな」、隣で仕事を始めた（やはり彼女も同じように呆然と立ち上がっていました）仲良しノッポの女の子に話しかけました。

「ウジカつて叫んだよついに聞こえたけど

「…………」

「長老様、最近特に怖いよね。昔はそんなこと無かつたと思うんだけど……エウム！？」

エウムは唐突に走り出し、長老様の方へと急いで向かっていきました。

「長老様！」、エウムは走りながら、息を切らし切らし、叫びました。広大な金花畠をひた走ります。

「あの！ 何かあつたのですか？」、ようやくフフラフフラとたどり着いて、膝に手を置いて落ち着こうとしながらも、真っ直ぐに長老様の方を見ていました。長老様の顔は厳しく、冷たい表情でエウムを見つめています。

「エウム、この花を見なさい

指差された、黒斑の金花を見つけました。

「村に起じる災厄は、全て払い除けねばならぬ。この金花も焼き灭ぼす

エウムの息はようやく落ち着いてきました。しかしそうに荒々しい氣勢をあげました。

「待つてください！ もしかしてそれは……」

「ウム、残念じゃがウジカは、」

「待つてください！！」エウムは我を忘れて、長老様の胸倉に飛び込んで、顔のすぐ下から唾を飛ばしてかかりそうなほどな勢いで叫びました。

「もう手遅れじゃ

「…………ッ」

エウムは長老様の胸を突き飛ばしました。

「こら！ エウム！」

長老の部下か誰かの叱責の声など無視し、エウムはまた一直線に疾走……村の方へと急いで向かいました。

ウジカは昔に一度、死んでいるはずでした。ウジカの奇病が発覚した時、長老様はすぐに「焼き捨てよ」と、ウジカをあの木とワラの粗末な家の中に置かれたまま、火が付けられるところでした。たまたまその時、エウムはウジカの家に遊びに来ていました。小さなエウムは好奇心が旺盛で、ウジカの背中のドロドロの花が、かえつて何か変わったもので面白そうに思えて、たまに父親に隠れて（見つかると凄く怒つて引き離そうとするのです）ワラの家に入り込み、背中の腐った花を触つたり（その時に花がボロボロと崩れて取れたりしたのもウジカにとつては良いことだったといえるでしょう）、またウジカの体を突つたりして遊んでいました。

その火を付けられようとしていた日も、エウムは遊びに来ました。

……長老が三歩前に出て、火の付いたタイムツを持つて、ワラ家へと放り投げました。乾き切ったワラは一瞬の内で火が燃え移り、恐ろしい勢いで家全体を炎が覆いつくし、「コウ」「ウ」と唸りをあげて焼けていきます。

「…………！」

焼ける炎の中から“ウジカ”的叫び声を聞いて、周りの見物人の

村人たちの、幾人かが眉をひそめて、耳を両手で覆いました。

その時！ 突然焼け落ちていくワラの間から、何かの影が、倒れるように外に飛び出しました。

「キヤア！」「ワア！」、家の目の前で見ていた部下達がびっくりして、ビクリと体を退けて硬直しました。

炎に包まれた影は、土の上でゴロゴロと転がり、悶えています。

「いかん！ 誰か！ 水を！」

それは長老の命で、すかさずその声に反応したのは、エウムの父親で、慌てて井戸の方へと走つて行つて側に置いてあつた桶二つに、水を一杯にくんで、両抱えで水を跳ね散らして持つて行き、ザツと勢いよく流しかけました。すると、少し赤く肌の腫れた、一人の人間の姿が見えました。勿論、ウジカとエウムです。幸いだったのは、燃えていたのは外の服だけだつたようで、少し肌は熱で赤くなっていますが、裸になつただけで済んだようでした。

それよりも、中からウジカの他に、エウムが出てきたことに驚きました。側で見物していた者は、ウジカの姿を認めるに、ザツと二人から離れました。長老とエウムの父だけは、呆然と側に残つてしました。

長老は、杖でエウムの目の前の地面の土を突きました。

「エウムか、お前、何をしておつたのだ？」

エウムは煙や水に咳き込みながら、答えました。

「長老、さま、その、遊んで、い、たの」

「遊んで？」

その言葉には長老のみならず、周りにいた父親も、部下達も、いえそれを聞いていた村人の皆が驚きました。無理もありません、誰もがウジカのことなど避けたがり、彼の両親がいなくなつてからは、ワラの家に近づく者さえ誰もいなくて、ほつたらかしにされていると皆思つていたからです。

「エウム、お前、いつもあの家に行つていたのか？」、エウムの父が、燃え炭となつた残骸を指して聞きました。

「え？ う、ウン。『メンナサイ、皿つとお父さん怒ると困つて…』

…」

すると何か父親はギクリと眉をひそめて、自分の背中の金花を見よつと首を後ろに回しました。金花は特に黒くも何もなつていませんでした。ホツと息を吐きました。

「馬鹿、この家には近づこいやいかんと何度も言つただひつー。」

「エ、でも、男の子がいるよ。背中のお花の真つ黒な子。皆、金色の花なのに、変なの」

「だからー」父親は手を上げて、エウムの頬を張りつきましたが、しかしピタリと動きを止めて、そのままゆっくりおひしてしまいました。

「あの子は病氣なんだよ。花が黒くなつてるなんておかしいだろ？ 病氣がうつっては駄目だから、あの子だけ遠くに隔離……離していたんだよ」

その言葉を聞いて、エウムはハツとしました。

「ねえ、あの、あの子、そういうえぱすつじへ瘦せてたよ。『飯はどうしてゐるの？ 食べてるのかな』

父親はクルリと後ろを向いて、何か長老と話し始めました。

「すみません、娘がご迷惑お掛けしまして……あの、娘の方は……

「ウム、あの疫病は金花に掛かるもの。女児には平気だとは思つが」「ねえ」

「それでは……」

「ウム、エウムは毎日、家に帰つていたのじゃりつー。だつたらオヌシにも触れていたはずじや。しかし、何とも無いのじゃりつー。」

「お父さんー」

「まあ特には……」

「まいい、とにかくウジカじや。家には水をかけてしもつた。新たに焼くことはまた“棺”を作らねばな」

「…………」

「やうですね、一番にお手伝いさせて頂きます

「ウム」

「ふう……ヒウム、ヒウム?」

後ろにいると思ったエウムが、いなくなっていました。

「あいつ、どこに行つたんだ。早く長老様に謝らなければならぬのに……」

「まあいい、あの子には特に悪気はなかつたのだろう」

「スミマセン……」

「よし、皆の者、ワラを沢山集めてきなさい。このウジカの上に被せてから焼くのじや。ワラが毒を覆つて防いでくれるからな」

そして数人の部下と、父親がすぐに走つて、村の集落の倉庫からワラを運んできました。とりあえず長老の目の前まで持つてきて束を重ねると、あとは女中がそれを持って、いまだ地面に突つ伏して転がつているウジカに、次々とうずたかく重ねていきます。肩に当たると、わずかに意識があるのか、モゾモゾと腕が少し動きました。「ウジカの体をシッカリ覆い隠すようにな、隙間無く重ねていきなさい」

女中の中で一番歳のいった老女が、最後に丁寧に、汚く積まれた所を整えて、さて、全員ウジカのワラから後退り間を空けました。

「では、タイムツを」

長老の後ろに控えていた部下が、既に火をつけて準備してあつたタイムツを、伸ばした長老の手に渡そうとしました。すると……、「え、エウム!」

トツトツトツ……と、ヒウムが軽快な足どりで、長老の横をスルリと通り抜け、ワラの方へと走つていきます。

「おい、エウム!」父親が強い声で叱りつけても、ヒウムは聞こえないように走り続けます。腕を引っ張つてこちらに来させよつにも、ウジカが気になつてそれ以上エウムの方に行けません。

やがてワラの前に着くと、手に持つていた丸い何かを地面に置いて、せつかく積んだワラを除けていきます。さすがに周りの者、皆

はザワザワと騒いで、そのエウムの仕草を、注意深く遠くから眺めています。

「さ、食べなよ」

ウジカの顔だけがワラの外に出ると、エウムは置いておいた丸いもの（よく見ればそれは調理用の鉢でした）を取つて、サジで中身をすくつて、ウジカの口にあてがいました。ウジカは暫くジックしていましたが、ややあって静かにほんの僅かだけ口を開くと、エウムは強引にその中にサジを突っ込みました。喉に詰まつたのかウジカは激しく咳き込みました。

「へへ、じめんじめん」

そして、エウムは立ち上がり、長老を、父親を、周囲にいた皆の方を見つめました。

「誰もお世話する人がいなくて困つてたんだしょ。じゃあ、あたしがするよ。ねえ、それならいいでしょ、だいじょうぶでしょ？」

誰もが呆気にとられて、皆、口をポツカリ丸く開けてしまいました。

「おい、エウム、違うんだよ、これから焼くんだから。浄化され、天空の神のもとへと旅立つていくんだから」

「ねえ、女の子なら、病気は大丈夫なんでしょ？」エウムは長老様の前へ駆け寄つて、何故か嬉しそうな顔をして訊ねました。

「ウ、ウム。この病は背に金花を持つた男のみに掛かるもの。かつて同じ病にかかった者がいたが、女にはうつる様子は無かつた」

「あたしがお世話をしてもいいですか？　あたし、小さい子のお世話を好きだし……ウジカはそんなに小さくないけど……これまでずっと遊んでたから、別に、同じだよ」

「ウーム、キッチンと世話は出来るのか？」

「平氣！」

「ウム……分かつた」

「長老様……」

「じゃがな、今言ったように、ウジカは重大な病気なんじや。決し

てワラの家から外に出したりして、災厄を外に漏らしてしまつ」とだけは絶対にしないように。それは、いかなることがあっても破つてはならぬ約束じゃ」

「はい！ 分かりました！」 ハウムはどうぞきりの笑顔で答えました。

「フフ」

「長老様！」

「のべ、お前の娘じゃ。約束事は必ず守るじゃね。」 その子はしつかつしてある

「…………」

ハウムは跳ね上がり喜んで、またウジカの方へ駆け寄つて、口にくわえたままのサジをスボッと抜き取り、またご飯をすくつてゆつくり口に運んできました。

「ツ！」

小石に足を引っ掛け、エウムは顔から倒れそうになり、しかしグツと足を踏ん張つて耐えて、さらに次の一步、次の一步を踏み出します。足の親指にひりつく痛みを感じました。しかし下を見る余裕も無く、強く足を踏み込んで、痺れで痛みを「」まかして、止まることは決してしません。

足は、本当に地面を蹴っているのか、まるで踏み応えの無い空気を蹴つているような感覚、少しでも急いで急いでと気が急いで、気持ちほどに体が早く動かなくて、もどかしくてたまりません。

「……！」

どこからか分からぬけれど、それは間違いなくエウムに向かつて叫ばれた声でした。チラと目だけ横へ向けると、ぶれて溶けて金色の背景の中から、あのノッポの子が「」ちらに向かつて走ってきたのが分かりました。

エウムは……「クリ」と一つ、彼女に向けてお辞儀をしました。

「エ……」

エウムはもう何も言わずに、彼女の前を猛烈な速さで走り去つてしましました。ノッポの子は足を止めて、啞然と、金花畠の果てへと消えていくエウムの後姿を見送りました。

村の下から、一筋の煙が上がっています。煙は時々風に吹かれ形が乱れ、しかしあさまるとまた一本の茶色い道筋を空に作ります。村に近づくに連れて、段々と焦げ臭いにおいが鼻に沁み、少し痛みを感じます。

「待つて！」

エウムは入り口にたむろつていた見張り番を突き飛ばし、一直線にウジカの家へと向かいました。

煙が！ 赤い炎が！ 群がる皆が！ 全てを突き飛ばす思いで、エウムは、ゴウゴウ炎を上げるワラの中へと飛び込みました。そのまま真っ直ぐ突き抜けて、滑るように向こう側に飛び出ました。腕にはウジカの肩を掴んでいました。

「……ッ」

「……！」

「……ッ」

二人に、あらゆる罵声が浴びせられました。エウムは少し気を失つてしまつたのか、暫く全く身動きせず地面に突つ伏していました。が、すぐにハツと氣を取り戻し、ウジカを肩に担いで、叩叩叩と立ち上りました。

やがて暫くすると、長老様が部下を引き連れて戻つてきました。「長老さま」エウムの父親が側に来て言葉を掛けました。が、聞こえてないよう、そちらを見よつともしません。

「エウムよ」

長老は、不気味なほど静かな声で、田の前のエウムに話しかけました。

「今回のことには許し難し、お前は……」
「分かつてます！」

長老の言葉をかき消す勢いで、大声で次々に言葉をまくし立てていきました。
「あの……この村にいられないっていうなら、この村を出て行きます！」

「だから殺さないで！」

そしてエウムは、ウジカを背中に回して、両腕を肩に乗せ、グッと引つ張つて背負いました。エウムは長老達に背を向けました。
「待て」

長老の落ち着いた声色が、周りにいた人にも余計不気味に聞こえ

ました。

「出て行つたら、お前はもう一度とこの村へは戻つてはこれない。二度とこの地を踏めない。それを承知か。今なら、ウジカを焼き葬れば、許してやう。」

エウムの足は、真っ直ぐに進みました。一歩、また一歩、止まるのことなく、進んでいきました。

15：一人でお絵描き

次の日は、雨。

次の日は、風。

そして、今田。

「どうしよう……」

エウムはさつと振り返らず歩き続け、村を出た日の三日前にもう金花畠を抜けると、しばらくは草原が続いていました。そしてその先には……どこまでも続く土と石ばかりの砂漠が広がっていました。エウムは……エウムに限らず村の人間は、外交のために働く一部の人間を除いては、誰も金花畠より先の世界を知りませんでした。誰もが、きっと金花畠は永遠に地の果てまで続いていると想像していたのでした。しかし、そんなわけは無いのです。

エウムは初めて金花畠の、金色の世界の果てを見ました。まだ草原に出たまでは、少し不安になつたけれど、その日は雨が少し降つて、濡れてしまつとした草を裸足で踏みしめて、その冷たい心地良さに心を落ち着けられました。

しかしその草原は長くは続かず、すぐに田の前に、土と、石と、僅かの草の生えた、もう他に何も無い砂漠に出くわしました。その荒涼とした大地……それが永遠まで続くのではないかと思うほどの視界一面の荒れ果てた世界。何か自分が間違えたトコロへと来てしまつたのではないか……これは何かの夢なんじやないか。それくらい、エウムには目の前の世界が受け入れ難いものでした。

そして、途方に暮れ、まだ緑の有る草原から離れるわけにいかず、近くの小岩を見つけると、とにかく背負つていたウジカをそこに背中を当てて座らせ、自分も横に座り込みました。

「勢いで出てきちゃつたけど……」

エウムはもう、村を飛び出したことを後悔し始めっていました。しかし長老様のすることは絶対で、もしあの時に飛び出していなければ、きっと自分は重い罰を受けて、ウジカは……死んでいたでしょう。目の前でウジカが焼かれていて、それをなんとしても止めなければいけない……そう思つたら頭がカアッと熱くなつたのです。

エウムは、自分が音を立ててよく燃えている火の中に飛び込んだ時のこと、ほとんど覚えていません。そして、長老様に対しても、仰られていることを遮つてまで、むきになつて突つかつたのも、今にして思えば、どうしてあんなことをしたのだろうと、思い出すだけでもびっくりしてしまいます。エウムは別に長老様のことが嫌いなわけではありません。

隣に目を向ければ、ウジカは元気は無いですが（この二日間、食べるものは出て行く時に失敬した少しの金花の種と、食べれそうな青草ばかりでした）、側に転がっていた小石を拾うと、地面に何か絵を描いているようでした。

「フフ、何を描いてるの？」

そつと覗き込んでみると、それは沢山の花の絵のようでした。しかし、茎が右に左に乱れるように描かれ、それはまるで……ウジカの背中の金花のようにも見えました。

「あ、そうだ」

エウムはその絵を見て、暫くずっとウジカの背中の世話をしないことを思い出しました。ウジカは一生懸命、地面を睨むようにして一心不乱に手を動かしています。丸まつた背中に、横から手を伸ばして、枯れたり曲がつたりしている黒い金花を、丁寧に一つ一つ繕つてあげました。時間は幾らでもあります。

砂漠からは、乾いた埃っぽい風が、時折吹き付けてきて、目が痛みます。もう三日も、誰とも会わずに（背中にウジカはいましたが）、話もせずに一人でいます。エウムは、沈黙がこんなに辛いものだと、この時初めて知つたような気がしました。

ふと、田の前のウジカのことも思い出しました。ウジカも、自分が世話をしに行く時以外は、ずっと一人でいます。ウジカは寂しくないのかな？　ふとそんなことが思いつきました。

「ねえ、ウジカ。ウジカのお父さんや、お母さんはどんな人？」
ふと何気なく、エウムはウジカにそんなことをポツリと訊ねました。しかし、ウジカは何も聞こえないようで、なにやらウーウー小さく唸りながら、まだ絵を描き続けています。花の絵は、さらに不気味さを増して、時に乱暴に手を振るつて、上塗りにグシャグシャと絵を潰すように地面を削つたりしています。

「や、やめよ！」

エウムは急に、恐ろしい不安に駆られて、立ち上がり足でその絵に砂をかけて消していました。まるでウジカが自分自身を消そうとしているように思えたからです。

「もつと楽しい絵を描こうよ」

そしてエウムは、自分も近くから手のひらな小石を見つけて取ると、自分もしゃがみ込んで、なにやら絵を描き始めました。ウジカは、エウムのその姿をジッと眺めています。

「はは、あたし、下手だ」

どうやらそれは、ウジカの顔を描いていたようでした。田は一つの虹のように、口はとても大きく開いて、とびきりの笑顔を描いていました。しかしそれは、まるで子供の落書きのようです。田の端は歪んでいますし、口元も、あごも、変な形です。

「……ウジカ？」

がっくりして、ウジカの方を恥ずかしそうに見ると、ウジカはまた何か絵を描いています。

それはさつきの怖い花の絵とは違います。それは、間違いなくエウムの顔でした。田の下に小さなぼくろが描かれているので間違いません。

「うへん、ウジカの方が細かいところまで描けてよっぽどそれらしいね」

それから一人は、エウムはお互いの絵を見て笑いながら、暫くずっと地面に沢山絵を描き続けました。驚いたのは、ウジカの絵の上手さです。あの「事件」の長老様の家を描いた時と比べれば、ずっと上手くそれらしく……。いえ、今こうして描いているうちでも、段々と上手くなつていてるのが分かるほどです。

しかし、それと比べてエウムの絵は、どれだけ描いても最初と変わらず、酷いものです。

「凄いな、ウジカは……絵を描くために生まれてきたんだね、きっと

と」

今二人は、一緒になつて、一枚の大きな絵を描いています。金色の花はエウムが、空の雲はウジカが、足元の一枚の画布に体をのせて、思いつきり伸び伸びと腕を振るつて、大きな大きな村の絵を描いています。一体いつどっちからこの絵を描こうとしたのかは分からりません。ただウジカが凄く楽しそうに（顔は無表情ですけど、地面に寝転がつて力いっぱい描いています）しているのを見ると、自分もつられて勢いづいてしまいました。

やがてもうお日様が地平線に沈もうとする時に、何とか全て描き終えることが出来ました。

「凄い！」エウムは思わず叫びました。

大きな絵は、それだけでも何か力強い、開放的な印象を与え、清々しい金花畠の金の村が、目の前いっぱいに広がりました。

エウムは、急に村のことを思い出し始めました。それはずっと小さい頃からの記憶です。

Hウムの朝は、隣の両親の部屋に入ることから始まります。そつと静かに扉を開けると、中ではお母さんが、寝床の中から顔だけ横に曲げて、「おはよう」と言つてくるのです。いつもお母さんはエウムより、早いのです。音のしなこよつに慎重に扉を開けても、いつも起きていで。いつもHウムが言つより早く挨拶をしてくれます。

「おはよう」、そしてHウムは、トコトコとやつぱり静かに歩いて、お尻からベタツと、寝床のすぐ側に座り込みます。

「じめんね、もうちよつとしたら、朝ご飯作つてあげるよ」すまなそうに眉を曲げる母親に、Hウムは何も言わず黙つて……顔も決して悲しそうな風にはあえてしないで……ただ、朝なのにもう疲れたような顔した母親をジツと見つめています。

「ウウツ……」、いつもどおりに、母親はえずき出しました。病氣です。

「ウ、ウ……」お母さんは少し体を起こして、寝床の方に置いてあるくずかごを取り寄せる、顔を突っ込んで……戻しました。そして、いつもどおり、Hウムは母親の背中に寄つて、丸く小さな母の背をさすつてあげるのです。じつするとお母さんは……、

「フウ……ありがとう。少し楽になつたよ」

そして母は力の入らない様子で、両腕に力を込めて地面を押して、体を起こすと、

「じゃあ、じ飯、作るうか
そう言つて立ち上がるのです。

「あたしも手伝つ

エウムも言つてついていくのです。

それは、本当に幼い頃、かすかに残つてゐる記憶の中の母の姿。

思い出したことは、いつもは母苦しそうに戻していた、そしていつも私のことに気を使ってくれた。

お母さんが死んだのはそれから何年も経たない頃。不思議と、涙は出なかつたのです。ただ、いつものように……いつもとは違う安らかな顔をした母の死体を前にして、もしかしてと思って触つてみたら……冷たくて、そしてその後、母は木の板に乗つて、父と長老様がそれを担いで、家を出て、村の中央の広場に造られた祭壇へと運ばれていきました。あたしも後ろをついていきました。

祭壇は、金花畠から持つてきた土でこんもりと少しだけ高くしたところに、木枠の壇が設けられ、そしてその上に母はしめやかに置かれました。すると長老が木枠の側に準備してあつた、金花の束の一本を持つて、母の胸に置きました。次に、父が。次は、あたしが。あたしは、母がお腹の辺りで両手を重ねて組んでいるところに、花を持つてているようにとその上に載せました。

ブワリ……と、両手の下まぶたに、涙が一気に膨れるようにたまりました。あたしは一回だけ瞬きをして、その涙を下に振り落としました。もう母はいないけど、あたしはまだいる。だから、母の分まで生きなければいけないと。

あの時は幼くて自分の気持ちがよく分かりませんでしたが、今思い起こせば、きっとそう思つたのだと思います。だから、あたしはあの時泣きじゃくりはしなかつたのだと思います。
それからはずつと、父との一人での生活となりました。

父は、家に帰るのは食事と寝るためだけのような、いつもほとんど無口な人です。ウジカの世話をし出してからは、最初はそうとう気にしていたようなのか、少しあたしと離れて座つたり（でもあたしの方でも長老様から病氣のことによく聞かされましたから、自分としても最初は父に限らず村の男の人とは距離を置くように気を使つていました）、父があたしの行為を多少理解をするようになつて

からは、距離を置くようなことはなくなりましたが、かわりによくあたしの体調のことを訊ねるようになりました。それは時にウジカのことを厄介者だとあからさまに貶したりすることもありましたが、父なりの心配の仕方だったのだと思います。

父の仕事は金花畠の土地を広げる開墾でした。この村最大の産業は、金花を周りの諸国に賣ることで、幾日か毎に長老様と部下が、大きな荷馬車に金花を詰め込んで、諸国へと旅立つてきます。

そして得た金貨で食糧を買い、村に戻ってきて、その食料を村の皆で分け合うのです。その中の果物や野菜には、ツンと尖った刃みたいな形のものや、丸っこくてツヤツヤしている宝石のよう美しいものがあり、あたしはそれらを見て、村の外の遠くの諸国を夢見ていました。こんな美味しい食べ物があるなんて、きっととても素敵な国に違いない……。

17・女たちの幻想

さて、ある日、あたしはその日むよひ届けられた、丸い実が4つ5つ並んで連なつて変わった形の野菜をきさんでいたら、父が帰ってきて、こんなことを言いました。

「なあ、お前の誕生日、もうすぐだろ？」

「あ、ウン……」

そう、もうあと何日かすれば、エウムの誕生の日でした。しかし、ここ何年も別に何も祝い事などしてもらっていないし、唐突に父がそんなことを言つたので驚きました。

「今度は齢15だ、大切な」

「あ」、それで分かりました。15歳、というのはこの村の人間にとつてはとても大切な意味を持つ歳なのです。

「そうだ、もう15歳なんだ。もつとずっと遠くのことみたいに思つてたけど」

15歳になつた少年少女は、「男」と「女」になり、一人前の人として認められるための、ある儀式が行われるのです。それは、村の金花に宿つた金の実、それを煎じて飲むのです。こうすると口の魂に、祖先の靈魂が流れ込み、互いの意識は融合し、体には溢れるほどの力が、頭には鋭い英知が身に付き、子供は「神の民」として生まれ変わるのであります。しかし、儀式の意味はそれだけではありません。

「何か一つ、大切な願い事を考えておきなさい」

「ウン」

そう、金の実の栄養が溶け込んだ液を飲むと、その瞬間、意識は神の御許へと飛んでいき……神と対面するのです。そしてそこで神と言葉を交わし、たつた一つだけ、どんな願い事でも神が叶えてくれるのであります。エウムは村の年上のお姉さん達から、その時のこと色々々聞かされていましたが、大抵の皆のお願いは「この村を出た果

ての遠き幻想の世界」でした。

村の女達は、一生を村の中で暮らします。何故なら、女達はこの村から一生外に出ることが出来ないからです。長老様から聞かされたお話で、この村を出た女は、必ず体調を崩すか気が狂うかして、心身がボロボロになつて壊れてしまうというのです。長老様がまだ幼少だった頃は、女達も男らと一緒に、村の外に金花を売りに出ていたのですが、やがてある“事件”が起きてからは、女達は村外不出、そういう決まりが村に作られたというのです。その“事件”に関係した女は、行商に出かけた折に、一緒にいた仲間を「食い殺した」というのです。その中に若き頃の長老様もいましたが、当時の長老様（今の長老様の父上様）の御子息で大切にされていたので、他の村人が体を張つて守つたおかげで、かるうじて逃げ延びて、その事件の事実を村に伝えに必死になつて戻ったというのです。（それから長老様は“事件”で殺された父上から継いで長老になりましたということです）

「女達は、村から一步外に出ると、怨霊がとり憑いて狂氣が発現する」と、金花畠以上の遠くへの外出を、一切禁止にされました。

それで、村の女達は、いつでも村の外の様子が気になつてしまつがありません。行商から帰ってきた男たちから話をねだつたり、遙か頭上の空の青を見つめ、その空の繋がつたずつと先に幻想たる世界を夢想しました。エウムも勿論女の子として、そのことには強い興味がありました。そしてお姉さん達が、15歳の儀式で見た光景……それはキラキラと光り輝く眩いほどの光景で、そのあまりの美しさは言葉では表現出来ない、しかしそれを見たらもう涙が止まらなくてしようがなかつたと。皆ため息混じりに、そんなことを語りばかりでした。

「（ああ自分もついに15の歳を迎えた。やっぱり皆みたいに村の外、遠くの世界を見ようかな）」

そんなことを考えて、エウムは上の空で料理を続けていました。でもふと、自分の包丁を触っている姿を見て、ふとあることが思い

ついたのです。

「お父さん、あたし、おかあさんにお会いしたい」

「お母さん?」……?「

意外な答えに、父は驚き聞き返しました。

「ウン、お母さんは小さい頃に死んじやつたから。あの頃の私は幼かつたから何も分からなかつたけれど、いつもお母さんは体調が悪くても、必死に立ち上がってあたしに「飯や色々な世話をしてくれた。あの時のお母さん、どんな風なこと考えていたのかなって思つて」

「…………」

「せうか、どんなお願ひでもいいんだもんね。神様は叶えてくれるんだよね。お母さんに、会えるんだ……」

田の端に僅かに霧が滲んで、腕で「ゴシゴシ」と乱暴に擦りました……野菜の汁が飛んで田を拭いたように見せて。

そして、あつとこひに15歳の田はやつときました。

その日のエウムは、朝日がまだ光を見せる前、濃い藍色に少しづつ水が溶けていく薄くなつていくような空を見て、目を瞑り、一呼吸、

「（あの空の彼方へと、飛んでいけるのでしょうか？）」

.....

太陽が地平線から顔を出し、光がサッと金花の大地を走り、その黄金の輝きを背後に受け、長老様の影がこちらにやってきました。

「おはよう」

「おはようございます」

ありふれた挨拶が、その日は少し違つて厳かに響きました。

朝の時間が過ぎると、段々と太陽が熱を強めて、冷たかつた空気を温めていき、やがてもうすぐ正午の時間。儀式は、太陽が中天の時に執り行われます。何人もいれば皆同時にを行うのですが、この日はエウム一人だけでした。

お昼頃までエウムは家にこもっていました。いえ、儀式のための装束があり、それを着てからは外に出られなかつたのです。エウムは素肌の上に、一枚の白い柔かな布で全身を包み込みました。それ

は村で脈々行なわれているこの儀式のための神衣^{カライ}、勿論、エウムの母も袖を通したでしょう。母の使つた衣を着て、母の元へと行く……そこにエウムは何か特別な思いを感じてなりませんでした。

着替えが終ると、静かに寝床の上に膝を折つて座り、緊張した硬い面持ちで、膝の上に置いた手を見つめて時を待ちました。やがて長老様が、家の扉を穏やかに開けられ、姿を現しました。

「ではいこうか」と父が、座るエウムの顔の前に、大きな手を差し出しました。

「ウン」、その手に自分の手を重ね、固く握つて引っ張られ立ち上がりました。

長老様は何も言わず頷くだけして、クルリときびすを返し歩き出したので、エウムと父は後ろに続いて、家の扉を出ました。やがて、村の広場まで行く途中に、エウムは唐突に頓狂な大きな声で「アツ！」と上げました。長老様以上に父の方が驚いて、思わず繋げていた手を離してしまいました。

「な、何だ？」

「あの、長老様、ウジカは……今、家に？」

「ああ、多分な。お前は外に連れていないだろ？」「

「ウジカも儀式に見に来て欲しいんですけど……」

「それは駄目じゃ

長老様はキッパリと言いました。

「儀式には村人全員が参加している。そんな中にウジカを連れて行くことなど出来るわけ無いじゃろう？」

「でも、病は男の人にしかうつらないんですね。だったら女の人たちの席にいれば平気じゃないですか」

「菌が飛んでうつったらどうするんじゃ、何のためにワラの家に入れてあるのだと思つ」

「…………」

「……行くぞ」

「あ」

「なんじゃ、今度は」

「あの、あたし、お友達に髪飾りを貸してあげていました。それを着けて儀式に出たいです」

「フム」

「あれ、母の持っていた髪飾りなんんですけど、あたしが着けているのを見たらその子が着けたがって、まだ貸したままでしたから返してもらいます」

そして、少し遠回りをして、ノッポの子の家に向かいました。これから儀式を受けるエウムが来たものだから、ノッポの子は口に手を当てて驚きましたが、やがてエウムから“幾つか”話を聞いて納得したようで、「分かったわ、エウムがそこまで頼むなら」と、渋々といった表情で頷いて、部屋に戻つて髪飾りを取つてきてエウムに渡しました。

「よろしくお願ひツ」そう言って申し訳なさそうに手元を瞑つて合図しました。

エウムは素早く髪飾りを着けると、「さ、早く広場に行こう!」と、長老様や父親を急かして、先に行つてしましました。慌てて父親や長老様も追いかかけました。

広場にはもう村人全員が、地面に正座して座っていました。小さな村とはいえそれなりに多くの人がいるのですが、皆揃つて押し黙り、そこへやってきたエウムを見つけると、いっせいにそちらを向いて睨むように見つめできました。エウムは少し気後れをして、照れくさそうにうつむいてしまいましたが、長老様が肩に手を叩いたので気を取り直しすぐ顔を上げました。

「では、中央の“壺”へ、長老様が耳の側で囁いて、自分は先に村人達の後ろを通して、“壺”的側へと移動しました。

エウムの前には、村人達の群れが……その輪の中に、地面が窪んだ穴のようなものが造られています。穴といつても、中に入つてしまがんでも体の多くは外に出るほどの浅い穴ですが、その穴……壺

の周りには沢山の金花が、花びらのある頭の部分だけもぎ取つたものが、穴の一面に敷き詰められています。太陽の光を中で受け止めて、キラキラと光り輝く「光の壺」です。

静々と、エウムは少し白布の裾を持ち上げて、第一歩を踏み出しました。村人達はそれに合わせて、ザッと膝を擦つて動き、壺への道を開けました。その間へと入つていきました。壺の口の前で止まり、そこで腰を下ろしていつて、膝から金花の敷かれた穴の中に、ソッと座り込みました。頭を垂れて、花の上に重ねて置いた両手上に額をくつ付けて、長老様の前にひざまずきました。

全ての準備が整つたのを計つて、長老様が、脇に控えていた女中から、一本の金花を受け取り、それを胸の前で大切に、両手の指で摘むようにして持ち、エウムを見下ろして立ちました。そして金花を、エウムの頭上に掲げて……壺の真上に、太陽に金花を捧げるよう太陽に花びらを見せました。

紺碧の空の真ん中に鋭く光る一つの光点……やがて長老の手の金花から、かすかに白い煙がスルスルと上がり、天へと続く一本の煙の道を作ります。やがて辺りに、甘い香りが立ち込め始めました。

「エウム、顔を上げなさい」

エウムは目を瞑つたまま、熱い太陽の方へ顔を上げました。元々白い肌が、太陽からの直接の光や、下からの金色の輝きで、透き通るほど真っ白になっています。

長老様がおもむろに、手の金花の頭を傾けました。やがて花弁の真ん中辺りから……粘り気のある蜜の雫が……ネットリと糸を引いて……一滴落ちました。雫は真つ直ぐ、真下のエウムの堅く閉じられた分厚い唇の上にピツタリ落ちました。その雫の熱さに驚いたのでしよう、僅かに唇が震えた拍子に隙間が出来て、舌に落ち、やがて唾液と共に、喉の奥へと流れ込みました。

その瞬間、エウムの目がカツと見開かれ、両手を胸元に当てて、喉や胸を強く押さえ付けるように擦り上げました。

「ウ……ッ」

青空が、段々と真っ白く色褪せていました。白い光の粒が、分裂し、七色の輝きに分かれ、クルクルと回転して宙を舞っています。空が、段々とあたしに近付きました。冷たい風が吹き流れ、ビュウビュウと風を切り、骨から冷たくなつて体の芯が凍えていくよ……しかし空の大きな太陽の球が灼熱を発し、肌には玉の汗が浮き出てきて止まりません。

「ウ……ハア……」、息を少しでも吸うのが辛いです。体の芯が氷のように冷たい今、さらに冷たい空気を入れると、胸が凍り固まつてしまいそうです。

太陽が、十個、二十個、四十個……無限に増えています。大きな空を埋め尽くすほどに……そして全てが透明になりました。何も無い虚空を、飛んでいるように……。光の中に重なり、さらに強い光の影が、こちらの体を激しく打たんばかりに……近付いてくる。その光は、丸っこく、長細く、フワフワして、立派で、あたしの全てを包み込む。全てを肯定する。あたしの心臓は、血液の沸騰で、皮一枚の中のものを全て溶かす。やがて溶けた液体が、あたしの皮膚の隙間から滲み出て、その「あたし」と、「光」が混ざり合い、融和する。熱い。息が詰まるほどの熱さ。あたしは……母の中で目を見ると……誰もいません。

突然、あたしの手に、何か温かなものを感じました。それは小さくて、震えています。あたしはそつと目を開けてみました。

ウジカが、あたしの膝に頭を埋めていました。まるで眠っているようでしたが、よく見れば、きっとあたしのところに来ようとして、壺に転がり落ちたのでしょうか。気を取り直して、周りを覗つて左右を見ると……誰もいません。

「長老様？」

長老様も、父親も、村人の皆も、誰も彼もこの世から姿を消してしまったように、辺りは静まり返っています。太陽はもう中天を過ぎ去り、午後の生温い陽気な暖かさを感じさせています。

「ウジカ」、膝の上に眠る、小さな黒い背を、ザラリと撫でました。今のエウムには、手のひらの中のウジカが愛おしくてたまりません。勿論これまで嫌っていたわけありません。が、前とは少し、違うのです。

いつもより、ずっと、優しく撫でした。
いつもより、ずっと、優しく眺めました。

そして、彼の腰に手を回して、グッと包み込むように、ウジカを深く抱きしめました。

「ウジカ」

もう真っ暗闇で草原も砂漠も見えないのに、ウジカはうつぶせに、片腕に頭を乗せてベタッと転がって、完成した絵を眺めているようです。時々、もう片方の指で線をなぞったりしたりして遊んでいます。

エウムはウジカの体を起こしてあげて、背中から腕」と抱きしめました。人気の全くない夜の平原、こうしていると自分自身も多少安心するのです。ウジカが指を動かして、エウムの腕をつつきました。

「星……」エウムは村のことで、一つ、長老様がお話されたことを偶然思い出しました。

頭を上に向けて、空のいっぱいの星空を、あちこち眺めました。やがて、探し物の、大きな十字を形作っている星座を見つけました。

「あっち……かも」

それは、村を出られない女達に向てお話しされた、異境への旅のこと。

「我々はいつも十字の星を目指して歩く。十字の元には、必ず豊穰が与えられるからな。そこには必ず人がいる。道標だ」

「だから長老様の家の頭には十字が付けられているのですか？」

「フム、そうじや。お造りになったのは先代じやがな」

「長老様のお父様ですか」

「先代は、この村 자체をお創りになられたんじや。元々は遊牧の民じゃつたからな。安住の地を見つけ、金花を見つけ出し、そして今この村の基礎をお創りになった」

「凄い方ですね……尊敬致します」

「あの呪いが無ければ……もつと長生きをして、さらなる貢献をされていたじゃら」

「そうよ、十字の下には安息の地あり。あっちに行けば……うつた、行くしかないわ」

星を頼りに行くならば、夜のうちに出発しなければなりません。昼間もずっと歩いてきて相当疲れていますが、今休むと、丸一田を潰すことになります。無駄に時間を潰してはいられません。

「ウジカ、これからすぐ出発しようと思うんだけど、大丈夫?」

ウジカの肩を軽く揺すつて聞きました。が、特に動くような気配が無く、微かに背中が膨らんだり萎んだり……寝息が聞こえてきました。

「頑張るうね」、それだけ言って、ウジカを背中に回して、起しきれないように気をつけておぶりました。

田の前は、何も無い石ころの砂漠。グッと歯を食いしばり、口にたまつた唾をひと飲み。背中の重みは、むしろエウムにとっての勇気になりました。

幾らかの食べ物は野草を取つて集めたけれど、ウジカも背負つていくのであまり多くは持てず、何日も持つものではありません。が、心を決める以外、残された道はありません。

「行こう」、空の星に向けて、願いを伝えるように呟きました。目指すは空の一点。

地表はサラサラと乾いた砂が吹き流れ、生命の息を感じられない世界。エウムがこれまでに見たことも無い、死の臭いの漂つ世界。

最初の一歩、砂の冷たい足音。その音の怖さ。

少しだけ気持ちが怯む。

.....

風の中に飛び込んでいく。

.....

20・傷だらけの進行

一夜、暗黒の空の屋根の上で輝く星ばかりを頼りに、明かりのタイミングも何も持っていないエウムたちは、見えない足元を引きずるようにして歩いて探し探り。時々小石に引っかかつたくらいならよろめくだけで済みますが、不意に足元が消えて、小さな段差から落っこちれば、背中にいるウジカの分の勢いが増して、顔からまともに、小石の転がる地面に倒れます。エウムの顔は一夜で傷だらけ……とにかく起き上がり、顔の血を腕で簡単に拭くと、また歩き出す。

やがて空の黒色は、次第に青みを増していき、星は消えてしましました。エウムは一旦、立ち止まり、ゆっくりと膝を曲げて腰を下ろして、後ろのウジカのお尻をそっと地面にのせました。そして自分は、丂口リと体を前に倒して、打ち捨てるように転がりました。

「ハア……ハア……」呼吸することさえ辛いほど、顔など体中の傷のことは勿論のこと、足の膝は、ソコに何か別の生き物が中に入り込んだように踊り笑い、体中の肉が石となつたように硬く重いです。ウジカのことを確認する余裕もありません。そのままウジカは、もう何も考えることができず、深い眠りの中へ沈み込んでしまいました。

ふとまた意識が戻つて、目の前にある（顔が地面にペタリとつけていたので）巨大な小石の間を、何かヒモみたいな細長い虫が通り過ぎたのに少し驚いて起き上がつたら、空はもう夕日に赤く染まつていました。

「あ、一日中寝ちゃつた……」

といつても、昨日の夜ずっと歩き続けたので、昼と夜が反対になつただけです。

エウムは足をだらしなく左右に広げて、呆けた目で、地平に落ちてこじうとする大きな真っ赤な太陽を、眩しくて少し目に沁みるの

も特に厭わず見つめています。そうしていれば、さつきから体中アチコチより響いてくる鈍い痛みを、幾らか誤魔化していられるからでした。砂と石しかない荒れ果てた砂漠ですが、その大きく雄大な景色の中で見る大きな夕日は、とても美しく、とても力強い光景でした。……もしかしたらエウムは、この輝ける風景に、ふと故郷のことを思い出していたかもしません。

「ウジカ」、後ろを振り返ると、ウジカは……眠っていました。

「アハハ……」、その気楽そうな姿を見ると、もう呆れたり怒ったりする前に、ただ乾いた笑いがこみ上げてくるばかりでした。

「ハア……」、バツタリと手足投げ出して、大の字に倒れ込みました。

風が上空の方ではとても強く吹いているらしく、モウモウと砂煙が、狂ったように渦を巻いていて、空が白く霞んで見えます。

お腹がグウ……とひと鳴き、エウムは腰に付けていた布袋から、村から持ってきた木の実を取り出して、二粒食べました。それだけではとても足りませんが、沢山食べてはすぐ食料が無くなってしまいます。

「ウジカも食べる?」、頭の方を見て訊ねました。が、やはり何も返事はありません。

ふとエウムは急に不安になつてきました。まさか氣を失つているのでは……。エウムは体を起こし（少しでも動けば全身に痛みが走りますが我慢して）、ウジカと相対して向かい合い座りました。ウジカはあぐらをかいて、力無く頭を垂れています。彼の頬に手を当て、口元にも手のひらを伸ばしてみました。温かく、息もしていません。とりあえず、格好が格好だからと、ウジカの背中に手を回して、ゆっくりと後ろに下ろしていつて、横たわらせてあげました。

ふと思い出して、また腰の布袋に手を突っ込んで何かを探してみると、小さな小瓶を取り出しました。それは村で金花の世話をする時に、いつも携帯して持っている水の小瓶でした。ふたを開けると、ウジカの口に持つていって、そつと傾けて、数滴、中へと垂らしま

した。ウジカは疲れで気を失っているのかもしません。食べられないとしても、とにかく水だけはと思ったのです。

「（慌てて飛び出したからなあ……水なんてほとんど無いよ）」

砂漠に出る前に、昨日の草原で、朝露を幾らかでも集めて入れておくべきだったと後悔しました。エウムは、持ってきた草原の草を取つて、それをよく噉んで、染み出でくる微かな水分をしつかりと味わいました。

また、夜はやります。

エウムはまた暫くウジカと並んで横になつていて、太陽の赤が完全に消え、星が強く輝き始めた頃、起き上がり、またウジカの様子を見ました。ウジカの息は凄く弱く、依然としてピクリとも動く気配も無く、眠り続けています。のんびりとなんてしていられません。再び、気合を入れるために、硬く強張った両足を強く張ると、また背中に背負つて、ズルズルとおぼつかない足取りで、十字の星座を田指し歩き始めました。

21・爆発する狂氣

それから……2回の昼夜が過ぎ去りました。闇の中に、一人は折り重なつて倒れていきました。ついにエウムの足に限界がきました。膝がガクリと折れて、力尽きました。ろくに食べ物や飲み物が無い上、ウジカを背中に背負つて歩いているので、エウムの疲労は凄まじい勢いで溜まつていきました。

一夜歩き続けても、どこまで歩いても、岩と石と砂の砂漠ばかり。全く変わりの無い景色に、次第にエウムの気が狂い始めました。ふつふつと怒りがこみ上げてきて、時折地面を蹴つたり、岩を叩いたり。しかしそれでは、ただ自分の手足が痛くなるばかり。やがて、体力の消耗が、怒る力さえも奪つてしましました。ただ黙々と、星を睨むように見続けて、右足、左足、右足、左足、右足……と、人形遣いが人形を動かすような感じで、自分の体をとにかく前に進め続けました。

やがて意識がモウロウとぼやけ始め、目の前の景色がグルグルと回転し、真っ直ぐ歩くことさえもままならず。そしてついに、いつ倒れたのかも分からず、いつのまにか地面に突つ伏して倒れていました。

体中は傷付き、流れ出た血に砂埃が無茶苦茶に付き（汗は、水分が体からもう全て出切つてしまつたのか、かさついたままでした）、汚れに汚れて真っ黒。地面上に転がる一人の影は、遠くから見れば、生氣の無い小岩か何かのように見えることでしょう。

エウムの意識は、もうほとんど失っていました。薄く細く開いた目に、風が吹いて砂粒が入つても、全く気付かないように目は半開きのまま。長い時間、二人は黒い塊となつて、微動だにせず倒れていました。

やがて、時が過ぎると共に、次第に黒い空から星の姿が消え、青

みを増していきます。やがてまた、規則正しく、太陽の顔が、地平からヌツと顔を出してきました。黄金に輝く砂漠……その光が、エウムの僅かに開いた目にも射しました。

金色。 黄金色。 金。 金。 金。 金。 金。

そして、それは唐突に、起きました。

止まりかけていたエウムの心臓が、一度、とても力強い勢いで跳ねたのです。その胸のひと突きで、エウムの顔に赤みがザツと差しました。またひと突き、今度は閉じかけの目が、パツと丸く大きく開かれました。またひと突き、今度は彼女の肺をよみがえらせ、止まりかけていた息が、一度強く吸い込み、砂を飲んでしまい咳き込みました。またひと突き、エウムの混濁した意識が、一気に真っ白く冴え渡つていきました。

エウムはいきなり、何か突然どこから強い力を注ぎ込まれたようには、それまでの死に掛けた様子からは想像も出来ない勢いで、スクツと立ち上りました。背中に乗つっていたウジカは、ずり落ち、放られた人形のように力無く地面に落とされました。その衝撃で、ウジカの目が……ぼやけて視界の定まらない目が僅かに開きました。エウムは、両手で硬い拳を、あまりに強くて震えるほどに力を込めて握り、地平線の太陽の方を睨みつけています。その目の瞳は、眩しい太陽の方を見ているというのに、白目を埋め尽くすほどに大きくなり、エウムの意識は、段々とその太陽の黄金の光によって、塗り潰され、消えていきます。

ギラギラと、どぎついほどの金色。放射状の光線が、エウムの脳の“表面”を削り取り、核なる意識が浮かび上がってきます。本能の意識。能力の開放。

突然ガクリと、首が折れたように傾げました。そして足は……ゆっくりとウジカの元へと進み出しました。黒い瞳は相変わらず大きく開いたままどこを見ているのか分からぬ光の無い目をして、口

は薄く開いた中は歯を激しく強く噛み締めていて、そしてその表情は死人のように冷たくのつぺらぼうです。

硬く閉じられているように思えた口から、得体の知れない声……音が漏れていきました。それはまるで猛獸の唸りのような、あるいは大地が震え軋み崩れようとする音というべきか、とにかくおよそ人間の口から漏れるはずの無いきちがいじみた声です。

ウジカの視線の隅に、エウムの異変が映ると、閉じかけていた瞳を、パツチリと大きく見開きましたが、エウムが恐るべき足の速さで迫ってきて、なす術も無く、ウジカの首に彼女の両腕が巻きつき、締め始めました。

「ウー……ウー……」

洞を吹き抜ける風のよつな声を漏らし、ウジカは悶えました。エウムの指一本一本が、首筋の肉に突き立てられ、埋め込まれています。

「ア……ウ……アツ！」

そしてエウムは、ウジカを力任せに、地面へうつ伏せに押さえつけました。そしてエウムの片手が、ウジカの背中の、黒い金花へと伸びていきました。驚掴みにし、指の間に茎を絡め、思いつきり無理矢理に引っ張りあげました。ビリツ……といづ音と共に、茎の先の細い部分が、少し千切れ取れました。

「アアアツ！」

ウジカは、体と同化している金花の、引きちぎられた痛みに、あらん限りの絶叫を上げました。全身から脂汗を噴出し、突つ張ったように体が硬直しました。

エウムはその千切った肩を口に突っ込んで、食べると、またウジカの背中に手を伸ばし、絡めて、また力任せに引っ張りました。なかなか取れなくて、一度、二度、三度、四度、五度、勢いをつけて引っ張りました。その度に、ウジカの叫び声は段々と、泣き声の混じった悲痛なものへと変わっていきました。エウムの腕は、普段のいつも時ではありえないような、何か化け物の力を借りているかのよう

な恐ろしい力でもって、ウジカを攻め立てます。

やがてまた、今度はしつかり指に絡んでいたので、数本の長い茎が、骨が折れたような嫌な音を立てて、ソックリそのまま抜けました。

「…………ッ！」、もはやウジカの叫びは声になりません。

エウムは勢いが付いて、後ろにひっくり返り転がりました。そして転んだまま、あまりに強く握っていたので茎が食い込んでしまつていて、それを引っぺがしました。手や茎は血だらけに染まつていで、それはウジカのよりも、エウム自身の手を切った血のようでした。ペロリと血を舐めて、そして茎を一本、丸かじりで口に突っ込みました。茎はとても固く、回して歯で削るようにしてみますがそれでも切れなく、先の方に口を移して細い花びら（真っ黒く変色しドロドロに溶けていています）の部分を葉の先で千切りました。暫く柔らかな部分だけを、黙々と食べ続けました。

ウジカはうつ伏せに、引っこ抜かれた背中の痛みに悶え、耐えるようにお腹の辺りで拳を握つて、背中を丸めて縮こまっています。体を強張らせているせいで、茎の抜けた所に開いた穴から、黒い膿のような液体が流れ出きました。

エウムは固い残りの茎を乱暴に放り捨てる、ウジカの背中へと迫りました。彼の両肩を掴んで馬乗りに押さえつけると、舌をダラリと垂らして、染み出た黒い液体を舐めとりました。背中の上に付いた分では物足りず、穴から掘り出すように舌を突っ込みました。

「ア……ウウ……」

エウムは口を涎と黒い液でベドベドに汚しながら、しつこくウジカの黒い液を求めました。舌に、すくつては飲んで、すくつては飲んで。すると次第に、エウムの黒目が少しづつ小さく戻ってきて、獣のように唸つていた荒い息も落ち着いてきました。

そして、最後に一気に沢山すくい取つて、ひと口で飲み込むと、エウムは目をグルリと回して、体中の力が抜けたように勢いよく倒

れました。ウジカとエウム、重なり合って、死人のように全く動かなくなりました。

22：【第一節】通り魔事件発生

「ワア！」
「キヤア！」
「刺されたぞ！」
「大丈夫か！？」
「血が凄いぞ！」
「誰か医者を！」
「犯人は！？」
「あつちに行つたぞ！」
「犯人が逃げたぞ！」
「大丈夫か！？」
「誰か来てくれ！」

冷たい石畳の上に倒れた、女の体の下から、ジワジワと血が染み出で、黒い石を赤く染めていきます。

息を切らした一人の青年が近付いて、しゃがみ込んで彼女の肩を揺すぶりましたが、ピクリとも動く気配がありません。手を当てて、脈や息を確認してみました。女はもう息絶えたようでした。

「どうやら駄目のようですな」、後ろ立っていた初老の男が、見下ろしながら言いました。

青年は振り返り頷き、そして周りに集まってきた野次馬を見ると、皆に訊ねました。

「誰か、犯人の顔を見た人はいますか？」

事件の起きた場所は、ひつきりなしに人の通る大通り。しかし空は大分薄暗くなつていて、街灯があちこち付きはじめていました。交差する人波に紛れて、隠れるように刺せば、瞬間を見るのは難し

いものです。案の定、誰も青年の問い合わせに答えられる人はいないようでした。

暫くすると、集まつた通行人の山をかき分けて、保安隊の二人が現場へとやってきました。

「皆さん、道を開けて下さい。病院へ運ばなければなりません。現場から離れて下さい」

そう辺りの人たちに指示していると、ふと青年の顔を見て大きな声を上げました。

「ニースキー君じゃないか」

「どうも。ところで病院のことですが、残念ですが彼女はもう…」

「そうか……。君は現場に出くわしたのかね？」

「いえ、こっちから叫び声が聞こえて見に来たんです。この人ごみに紛れて刺したようですね。周りの人に簡単に聞きましたが、誰も見ていないようです」

「なるほど」

「どうもお金目当てだと思います、彼女の鞄が無い」
保安官は胸から取り出した手帳に素早く筆を走らせました。そして、倒れた女の様子を調べていたもう一人の保安官に、二言三言、耳元で指示を言い、そして手帳を胸元にしました。

「分かった。じゃあ一応後で詳しく事情聴取するから、少し付き合つてもらえるかな。時間は大丈夫かな？」

「時間は……親父に会わないで済むなら」、ニースキーは頭をかいて笑いました。

「何だ、『また』女の子といざいがあったのかい？」、保安官は親しげな柔らかい笑みを浮かべて言いました。ニースキーは誤魔化すように声を出して笑うだけでした。

「おいニースキー、お前、今度は何をしたんだ」「だからここにはなるべく来たくなかつたんですよ」

保安所に着いての父親の第一声に、ため息をついて苦笑しました。
「さつき大通りで刺殺事件があつたんですよ。現場を見たので軽く
事情聴取させてもらおうと思いましてね」、保安官がかばうように
説明してあげました。

「そうか。ちゃんと協力しろよ。じゃあ

と言つて、父親はさっさと奥の廊下へと、早足で行つてしまいま
した。

「お父さんは忙しいからね。じゃあ私たちも行こうか」

二人も別の横の廊下を通つて、取調室へと入りました。保安官に
手で指されて、部屋の真ん中に置かれた、二つ向かい同士にくつ付
けた机の、片方の椅子に座り、反対のもう片方の椅子に、保安官が
ドッカリと腰を下ろしました。

「周りの人も、君も全く犯人は見ていないと、間違いかね」「
ああ、いえ、現場に駆け寄つたんですが、その時、あそこから遠
くに走つて離れていく人影を見ました」

「それはどんな人だつた？　うろ覚えでも、どんな感じの人だつた
か大体でもいいから聞かせてくれないかな」

「暗かつたですし、背中で顔は見えなかつたんですが、華奢な感じ
がしたので、女かもしれません。髪も長いように見えました」

「iform、なるほど。それは非常に有益な情報だよ。ありがとうございます」「
すると突然、部屋の書類棚の横の壁に付けられた電話が鳴り出し、
保安官は受話器をサツと取つて電話に出ました。

「ハイ、ハイ、そうですか。分かりました。ハイ、失礼します」

受話器を置くと、ニースキーに電話のことを話しました。

「目撃者からの電話があつたそつだよ。あの場では言い出せなくて
電話してきたんだろうね。今回の事件は、おそらくあの通り魔事件
の犯人と同一みたいだね」

「あの通り魔事件つて？」、ニースキーは首を傾げました。

「エツ、知らないのかい？　ここ数ヶ月、今回の大通りや、人通り
の多いところで、通り魔事件が数件起きているんだ」

「ハア……知りませんでした」

「学校の勉強ばかりじゃなくて、少しは社会も知つておこうよ、危ないよ。まあその事件は女性ばかり狙われているんだけどね」

「今回と似ているんですか?」

「ああ、どの件でも、被害者の鞄が盗まれているしね。君の言つた『女性』というのもそうだ」

「犯人はお金に困つてるんでしょうかね。弱い女性ばかり狙つて一度、かなりはつきりした田撃情報ももらつたこともあるんだ。髪がボサボサで、浮浪者のような汚らしい格好をしていたらしい。もし見かけたら注意した方がいいよ」

「結構目立ちそうですね」

「それが、まあこの街にも浮浪者は沢山いるからね。断定して見つけるのに苦労しているんだよ。色々聞き込んだり、街中の彼らの溜まり場に、直接聞きに行つたりして調べているんだがね、まだ捕まつていない」

「凄い勢いで走つていきましたから、相当足は速いですよ」

「まあ迅速逮捕しなければな。じゃあ、とりあえず今日聞くのはこのくらいでいいよ。協力ありがと」

そして、保安官に丁寧に玄関の外まで案内されて、軽く頭を下げて会釈して、ニースキーは家路へとつきました。もう大分時間を過ごしたらしく、通りの人の数はめっきり減つていて、大きな街にも深夜の静けさが漂つっていました。

帰り道、途中の店先で酒瓶で買って、自宅のある住宅街の一角に入りました。辺りには街灯は一切無く、暗い道を静かに歩いていると、目の前に何やらぼんやりと明かりが見えました。その光は、道沿いの家の塀にくつ付くようにしていましたが、光る虫がフツと壁から離れたように、フラフラとニースキーの方に飛んできました。やがてその光の後ろに影を……余るほどの長い袖の外套をきた男の姿が見えました。彼は手元に持つた、輝く花に顔を薄暗く照らされて、ニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべてニースキーを見つめました。

「お兄さんよ、女より気持ちいいことがあるよ」、男は酷くしわがれた醜い声で話しかけてきました。そして、手に持っていた輝く花を前に突き出しました。

「コレ、だよ。コイツの種を潰して出た油を舐めるんだ。知つてるか？　みいんな、コイツに夢中だ」

「オイ、僕の顔をよく見ろよ」

ニースキーは親指を立てて自分を指しました。男はグイッ首を伸ばし、花の明かりを当てて、会得しました。

「何だ、お兄さんか。また夜遊びですか」

「丁度いいや、持ち合わせが少ないから、一本だけ買えるかな」

ニースキーは酒瓶を足元に立てて置いて、懐から金入れを取り出して、ありつけのお金を手の中にぶちまけました。

「ちょっと足りないけれど、まけときましょ。いつもお世話になつてるしね」

男はニースキーの手から奪うようにお金を取りると、それを隠しに放り込んで、手の金色の花を一本、ニースキーに手渡しました。

「じゃあごひいきにね、また来ますよ」

男は残りの金花を、外套の中へとしまい込むと、路上は真っ

暗になつてしましました。そしてクルリときびすを返して立ち去る
うとしたら、またこちらを振り向きました。

「やついやお兄さん、いつもお世話になつてますから御忠告してお
きますよ。最近、お客様の何人か、死んでいるんですよ。一応、
お気を付けなさつたほうがよさそうですね」

そして、男は足音を立てず、暗闇の中に溶け消えてしまいました。
ニースキーは瓶を取り上げて、駆け込む勢いで、家へと帰りました。

その翌日、昨夜の男が殺されたことが分かりました。

「売人が死んだって？」

朝食の時間、ニースキーは焼いたパンを取り出して、皿の上に重
ねて食卓に置きながら、父に驚きの声を上げました。

「ああ、さつき緊急に電話があつたんだ。売人の周辺から調べを進
めれば、奴らの組織を一網打尽に出来るな」

父は一枚取つて、満足げな笑みを浮かべながらパンをかじりまし
た。父は金花の売人組織を長い間追っていたのです。

「あの外套の男は、金花の生産者と面識があるという噂だからな。
これで金花を確実に根絶できる」

「ごちそうさま」

ニースキーは手に残ったパンを飲み込むように一気に食べ切ると、
さつさと鞄を取り上げました。

「行つてきます」

学校に着いて教室に入ると、もう既に一人の友達が、席に座つて
お互いの教科書やノートを見合つていました。

「おはようグッス」

「お~す」

ニースキーも隣に座つて加わりました。

「あの男、死んだって」

ニースキーがポツリと小声で、何氣ない風を装つて言いました。

「マジかよ」

「親父の話だから嘘は無いよ、死体で見つかったって」

「あのオッサンがいなくなるとすると、また一から売人探さないと
な」

「面倒臭えな」

「あ、そうだ」、ニースキーは鞄を開けて、その中を一人に見せま
した。

「おお、あるじゃん」

「昨日買つた分だよ。もうすぐ授業始まるから、終つたらな」

そして後は、黙々と週末に向けての試験の勉強を続けました。

24：売人探し

そしてこの日は午前授業のみだったので、全て終つて、三人は揃つて学校の門を出ました。

そのまま街の大通りの方へと向いました。持つていた金花を使う前に、今後手に入れるための売人を探すためでした。

「×通り行つてみるか？」

「いやあそこ最近手入れが入つたらしくてほとんど根絶状態みたいだよ」

「じゃあ××町辺りか」

「あの売人の死体が見つかったのが××町だよ、今は無理だつて」
ニースキーの父親からの情報を頼りに、あつちにこつちにフラフラと歩く続けました。いつの間にか、××町に足が向いて来ていました。通りの一角に人だかりを見つけ、近寄つてみると、人々の前にテープが張られて、その中では保安部のスーツ姿の連中が、色々と調べ物をしています。その中心の石置にはおびただしい血に濡れていきました。

「これがあの……売人のか」

友達の一人がニースキーにヒソヒソと耳打ちし、ニースキーは頷きました。

「犯人はどんな奴なんですか？」

ニースキーは、近くにいた保安官に尋ねてみました。保安官はジロリと目を向けて、

「犯人は女じやないかと睨んでいる」

「もつと詳しく教えてくれないかな、まだ犯人は捕まつてないんだろ？」「、側にいた中年の男が、鼻に掛かつた声で、少し保安官に言いがかるような調子で訊ねました。

「まだ調査中です。詳しく分かり次第、きちんと説明しますので」

「冗談じゃねえや」

男はふてくされたように、唾を現場に向けて吐き捨てました。保安官の足に掛かりそうになつて、彼は片足立ちで避けて、注意をしようと顔を上げたら、男はもう人ごみの中に消えてしまいました。しかしニースキーはその男の様子をつぶさに眺めていました。

「あのオッサンも客みたいだな」

友達の小さな声に、ニースキーは保安官のいる手前、はつきり頷くことはしませんでしたが、真剣な眼差しでそれを語りました。それは微かな違いでしたが、男の歩き方が、背中が上に引っ張られて引きつっているような、微妙な歩き方だつたからです。金花の力が切れた時によくある症状です。

ふと、ニースキーは二人の肩を突いて、人ごみの輪の外へと誘いました。そして現場から離れるように歩きながら、

「少し“切ってきた”みたいだ」

見ればニースキーもさつきの男と同様に、僅かに背中を引きつらせていました。

道の反対側に喫茶店を見つけると、通りを渡つて店に入りました。三人は奥の方へと向かい、角の隅のテーブルを見つけるとそこに座りました。丁度その席と店員のいるカウンター席の間に大きな観葉植物の鉢が置かれていたのです。大きな緑の葉が幾重にも重なり左右に開いていて、丁度壁のように隅の席を隠しています。

三人とも酒を頼み、運ばれてくれるとき、店員の姿が葉の奥に消えるのを見送つて、ニースキーは足元に立てかけた鞄に手を突っ込んで金花を探りました。そしてそのまま中で種を摘み取つていき、手の中に三粒握つて、拳をテーブルに置きました。一つ一つ、ソックとその白い種を一人の目の前に置き、お互い摘み取つて、そしてコップの酒の中に入れました。種は酒に触ると、勢いよく泡を吹き出して、あつという間に溶け消えてしまいました。

ニースキーの指は少し引きつっていました。コップを両手で持つ

て、グツとひと口、流し込みました。

「ウ……アアツ」

瞬時に全身に玉の汗が浮かび上りました。白いテーブルが、床との境界を無くして全てが真っ白に、白い空へと飛んでいきます。

「おい、一気に飲み過ぎだつて、大丈夫か？」

ニースキーは両肘を立てて首を垂れ、暫く荒い息を吐いていましたが、やがてユラリと体が揺れて、テーブルに突つ伏しました。

「おい、ニースキーのコップの二オイきついぞ。ひょっとして一粒はぶち込んだんじゃないか」

友人の一人が試しに飲んでみました。

「うわ、スゲ……」

舌に触ると、すぐに引つ込んでオシボリで舌を拭きました。

「コイツ、こんなに濃いの飲んでたのかよ」

「大丈夫か、ニースキー」

ニースキーの体が、不規則なリズムで、ビクリ、ビクリ、けいれんしています。それどころか、何か悪夢を見ているかのような、病的な重々しい唸り声が……。

「あの、お客様、大丈夫でしょつか？」

店員の女の子が、心苦しそうに心配そうな顔で、近寄っていました。

「ああ、コイツちょっと腹でも壊したみたいで……大丈夫ス」

「ひょっとして当店のもので当られたのでしょうか……」

「いやーそれはないよ、持病の腹痛なんです。スミマセン、病院連れて行きますんで、ご迷惑お掛けしました」

そして一人でニースキーの肩を抱えて、ペコペコ頭を下げて店を出ました。

すると外に出ると、二人は引っ張られるように……ニースキーが

どこかへ向おうと強引に歩き出しました。

「どこ行くんだよ、お前ん家はそっちじゃないぞ」

「…………ッ

彼は何か小声で呟いているのですが、寝ぼけたうわ言のよくなはつきりしない声です。そしてそのままおぼつかない足元で歩いつつするので、まるで夢遊病者みたいです。そのまま仕方なく、彼に向づかづかく、ついてこへしかありませんでした。

そこは中心街から少し離れた、いわゆる旧市街で、古い木やレンガの家の建ち並んだ風景が続いています。所々には、雨風で風化し、もう少しで崩れてしまいそうなほど汚らしい家もありました。

ニースキーの足取りは不安定なもの、どこか確信を持つて歩いているようにもみえます。この辺りは、仲間内ではほとんど来たことの無い場所でしたが、ズンズンと、家と家の間に開いた、隙間のような細い小道にも迷い無く入っていき、そしてやがて、ある一軒の木造の家の前で、その足が止まりました。

その家の壊れ方は相当なもので、屋根はおそらく地震のせいか、斜めに歪んで湾曲し、壁は亀裂が入り、その上にツタのよくな長い植物が、ビックシリと一面を覆いつくすように生えています。まるでツタの存在が、家全体を支えるように縛りをかけて、からうじて形を保っている……というような様相です。また地震があれば、全て粉々に崩れて、木屑の山になってしまいそうなほど、危なつかしい雰囲気です。

その家中へと、ニースキーは入つていこうとします。

「ちょっと待て！ 危ないんじゃないかこの家！ オイ！ 止まれ！」

しかし彼の瞳は呆然として、意思も無く勝手に足が動いていくようでした。二人はニースキーの肩から離れると、しかしそれでも彼は倒れず、扉の無い（とつぐに壊れて無くなつたのでしょう）、開け放された暗い入り口の中へ、姿を消してしまいました。

二人は暫く見合わせて、しうがないとため息をついて、恐る恐る家に近付いて、入り口の横から首を伸ばして中を覗きました。床は思ったとおり、アチコチ穴が開いていましたが、意外だったのは、その床には泥土などの足あとが無数に付いていたことでした。勿論その内の幾らかは、今入つていったニースキーのものでしょうが、

それとは違つ、もつとずつと前に付いたと思える乾いた土の足あとが、沢山あつたのです。

「とりあえず、行ってみるか」

「……ああ

二人はさつきとは少し気持ちが違つてきて、ドンドン気持ちが高揚してきて、もっと奥を覗いてみたくなつてきました。二人は音を立てないよう忍び足で、入り口をくぐりました。そして慎重に床を見て……下手して床の腐つた所を踏まないように……おつかなびつくり進みました。

隙間だらけの壁から、細かい光がパラパラとまばらに零れています。埃のような砂のような……塵が霧のように浮かんでいて、すえた臭いが立ち込めています。口と鼻を手で覆つて、軋む床を静かに歩きました。

やがて、馴染み深い香りが混じつて臭いました。これは……ついさっき飲んだ金花の香り……間違いありません。濃密な甘い匂いと、木の腐つた臭いが混じり、いやらしいほどにどぎつこ香りに頭がクラクラしてきます。

正面の扉の跡をくぐると、そこにニースキーの背中がありました。彼の前には、横倒しのタンスの上に座つた、お腹が林檎のように大きく膨らんだ醜い男と。側の床には、上半身裸の瘦せこけた女が、だらしなく床に寝そべっていました。

「ニースキー」

一人はとりあえず彼に声を掛けました。振り返りました……どうやらもう気が落ち着いて正気のようです。

「ああ、何とかなつたよ

「何が？」

「金花だよ、このオッサンがこの辺一体の売人を仕切つてる奴だつて

あらためて林檎腹の方を窺いました。男はだらしない笑みを浮か

べ、腹や腕をしきりに搔いています。背中に何か見えて、首を伸ばして見てみれば、そこにはあの金花が根元を埋めて生えています。

「な、なんだ、コイツ……」

「このオッサンが金花を栽培しているんだって」

「こ、こ、こ、うやつを飲んでたのか……」

「ウゥーッ！」突然の狂った喚き声にその場の皆がびっくりしました。

それは床の女の奇声でした。女は、苦しそうに己の胸を揉みしだき、真上を向いて歯を剥き出して、そして林檎腹を睨みつけました。ひと飛びで林檎腹の背中へ、押し倒すように、ガラガラと音を立て、二人は埃にまみれて転がりました。そして……女は牙を鋭く立たせ、背の花に噛み付きました。葉や花びらを削るように、歯に挟んでは引っ張ります。

「ウー……ウー……」

林檎腹は、顔中に脂汗を山ほど浮かせているのに、歯を食い縛つて、女の所業に耐えているように見えます。

やがて女は、口の中にある程度、千切れたものを含むと、林檎腹を乱暴に突き飛ばしました。ひざまずいて中腰に、クチャクチャクチャと、涎が垂れているのも気にせず、反すつし続けて、やがてひと飲みしました。そして、操りの糸が切れたかのように、力無く倒れました。倒れてなお、汚らしく涎を流し続けています。

「コイツ、花を丸ごと食つてやがる、そりや気が違うよ」

うめき声を上げて、林檎腹がヨロヨロと体を起こしました。乱れ折れ曲がった背中を適当に整え、そしてまたタンスに座りました。「オッサン、この女はアンタの女か？　もう遅いかもしれないけど、あんまり金花食わすなよ。死ぬぞ」

「へへ……へへ……」

「……オッサンも大丈夫か？」

「へへ……へへ……」

気が抜けて、二人は再びニースキーの方を向きました。田が合つと、彼はニヤリと意味ありげに笑みを浮かべました。

「なあ、ちょっと見てみろよ」

親指で指した後ろ……林檎腹のタンスの後ろの辺り……肩越しに覗きました。ボロボロに破けた布に包まれて、小さな赤ん坊が横たわっていました。

「なんだあこりや……『マイシラの子供か？』

「ああ、本当にびっくりなのがな……なあ、この子供、何歳くらいだと思ひ？」

「あー……どうだらう、一歳なるかなないくらいか」

「十歳くらいだつてぞ」

「十歳！？ そりや無いだる。だつて抱いたら、腕の中に入りそうなくらいだぜ」

「オッサンに直接聞いてみるよ」

林檎腹は、何故か照れているのか、しきりに頭を搔いてにやついていて、ハツと視線に気が付いて口を開きました。

「へへ……ワシがそだてるんだ。かわいいだらう？ だけどよう、コイツ、ドンドンちいさくなつていくんだ……ずっとねたきりなんだけど、ちょっとまえは、いまのふたづぶんは、おおきかつたんだけえ。はんぶんにちぢんじました。まあちいさくなつて、かわいいちやあかわいいけどな」

果たしてふざけているのか、そう言つて軽い笑い声を上げました。

「どこか悪いのか？」

「ねてばっかりなんだ。おきているところなんて、とんとみねえ」

再び赤ん坊を見つめました。背丈が小さいことは勿論、肌もツヤツヤと張り良くなっています。これはもうきっと、林檎腹の頭が完全にいかれていて、でたらめな嘘を言つてはいるに違ありません。何故、そんな嘘を言う意味があるのか分かりませんが……。

さらに首を伸ばしてよく見ようとしたら、はて、何やら嗅ぎ慣れただ香りが漂ってきます。それは、この部屋の中で感じた中で、もつ

とも濃密に沸き立っていました。

「オイ、この部屋の金花の匂い、この赤ん坊から一番匂いつで」

「そりや売人の元締めだぜ」、ニースキーが皮肉っぽく言いました。
「オッサン、こんな小さな赤ん坊に、こんなに匂うほど金花の種を
やつたら、治る病気も治らないぜ」

「なー、かわいいネガオだらう?」

「いや、そりや違うだろ。真っ白に夢見てるんだらうけど、きっと
頭はいつちやつてるぜ」

「くつちまいたいくらいだけどさ、こいつしてやるだけがせいぜいさ」
そして林檎腹は、赤ん坊を抱き上げると、舌を思いつ切り垂らし
て、べロベロと顔を舐め回しました。濡れた頬やまぶたや額に、埃
が付いて真っ白になりました。そんなことは、構わず気にせず、愉
快げに舐め続けます。

「まあいいや」呆れ調子に、ニースキーの方を向きました。

「それで、どうするんだ?」

「このオッサン、一つお願ひがあつて、それを聞いてくれたらタダ
で金花をくれるつて」

「タダで? よっぽどのことなんだろうな、お願いつて」

「売買の手伝いをしてくれつてさ」

「……つまり俺らが売人になれつて?」

「ソウソウソウ、てがたりねえんだ、たのもよツ」林檎腹は粒飛ば
して言いました。

詳しく述べば、こここのところ、この男に頼んでくる連中が多くな
つたといいます。最近、業者の人間が死んだり、金花自体が手に入
りにくくなったりと、不穏な状況を呈してきました。林檎腹は自家
栽培をしているので、ここに来れば必ず手に入ると、当てにする者
が増えたのです。

「どこにあるんだ、その畑は?」

「へへ……『ツチ』です」

指差した方には朽ちた木の扉があります。軋んだ音を立てて開きました。パツと真っ白な外の光に、思わず目を覆つて、たじろぎました。次第に目は慣れてきましたが、それにしても物凄く眩しいです。まるで目の前に、太陽が落ちているのではないかと思うほどです。ゆっくり目を開いていくと、白い景色の中に、かすかに花の輪郭を感じるばかりです。

「なんて眩しさだ……これは一体」

「このハナには、ヒカリがとても多いせつなんだよツ」林檎腹が、後ろに寄つて説明します。

「タツブリタツブリ、ヒカリをあびて、そのチカラをすいこませるんだ。ヒカリがないと、いいハナをさかさないツ」

よくみれば、そこは小さな中庭で、周りの壁の四方に、銀色の板が隙間無く立て掛けられています。それに反射して、まるで針のように、鋭い光が射られていたのでした。

「このせわは、あんたらにはできない。うりにいつてくれないか?」三人は集まって、ヒソヒソと話し合いました。

「どうする?」

「タダで譲ってくれるのは大きいぜ」

「けど大丈夫か?」

「お前の親父、金花の売人を追つているんだろ?」

「大丈夫だよ、むしろ近いところで保安隊の情報を得られるつてんだよ」

「そりゃそう……かもしれないけどわ」

「うまくやればこっちから色々情報を流すこともできる」

「ウーン」

「なんとかなるよ。考えがある、色々とね」

「本当がよ」

「ああ」

「…………」

「…………」

そしてようやく決が取れたところで、ニースキーが代表で林檎腹に相対しました。

「いいよ、仕事は手伝うよ。ただし金花の他に、儲けも分けちゃくれないか。危険を伴う仕事だから、当然だろ?」

「ああ、いいよ」

林檎腹はあっさりと了承しました。

「じゃあ夜にまた来るよ。今は一度、家に帰らなきゃダメだから」「たのもぜ。ああ、じゃあすこしだけハナもつてくれ?」

それは今後の仕事のための前渡しのようなものでしょう、林檎腹は光の庭へと入つていつて、三つの茎のとても太い金花を持って出てきました。

「これは……凄いな」

これまで手に入ってきた花より、軽く一倍はあるんじゃないかといつほどの立派な花です。きっと物凄い“効果”を持つているに違いありません。

「ありがとうな、仕事はちゃんとやるよ」

三人は上機嫌で、ボロ家を出て行きました。部屋を出る時、あの女のうめき声が微かに聞こえました。危険な仕事かもしれないけれど、その時のニースキーの心臓はドキドキと、不安な気持ちと共に、妙に愉快な気持ちも交錯していました。

三人は中心街の通りまで一緒に戻って、そこで解散しました。夜はあの家の前で待ち合わすことにして、別れました。

「ところで、お前、あの家どうやって見つけたんだ?」

別れ際にニースキーは聞かれました。

「ああ、そりゃ金花のおかげだよ。あれを濃くキメると、すげー感覚が研ぎ澄まされるだろ。感じたんだよ」

「……花の匂いが?」

「ああ」

「でも普通、分かんねえぞ

「五粒キメたからな」

「ゴッ……！」

「そりゃ飲み過ぎだ

「そりゃかな、でもいつも三粒は飲んでるからな

「お前飲み過ぎだつて……」

「ん~、効かないんだよね、最低でもそれくらい無いと

「死ぬぞ」

「ん~……」

「まあこ~や、また夜会おうぜ」

「ああ

「うむ

「一ースキーはヨロヨロと千鳥足で家へと帰り着きました。ガクリと足の力が抜けて、家の門に寄りかかって何とか持ちこたえました。

「（……ヤベエ……）」

これは……先ほど一気に金花を飲んだせいでどうか。さっきから少しづつ感じていた、頭眩や、手足の痛みが、時間が経つにつれて酷くなっていました。

「（クソ……やっぱ五粒は多過ぎたかな……）」

今言つても後の祭り……しかし段々と引き裂かれるような筋肉の痛みと、吹き出るような汗と、凍えるような寒さは、段々と加速度的に増してきます。もはやもたれて立っているのも辛く、ズルズルと背中を門柱に引きずつて、潰れるように地面に倒れ込みました。

「一ースキーは慌てて、震える指で鞄を開けました。チャックは何度も詰まって、ようやく半分開いたら、腕を突っ込んで金花を掴むと、半ば無理矢理に引き出しました。花びらがチャックに引っ掛けつて、数枚が散りました。数枚のノートを取り出して、その上に摘み取った種を一つ置くと、またノートを重ねて挟みました。そして上から、ペンケースで強く押しました。ガリツゴリツ……と種が、音を立てて潰れていきます。

上のノートを退けると、潰れた粉が少し舞い上がりました。そしてノート一枚を千切つて、それを丸めて筒にして、片方の穴に粉を、片方の穴に自分の鼻の穴を、近づけて……そつと吸い込みました。

「ウ……ア……」

たちまち体中に、快樂の波がドッと押し寄せきました。このやり方は、死んだ売人から聞かされた方法でした。普段やっている飲み物に溶かすやり方より、鼻から直接取り込んだほうが、早く効い

て、そして効果も強いのです。ニースキーは一瞬のうちに真っ白く飛んでしました。

「フウ……」

一息ついて、もう“いつもの”ニースキーに戻りました。ノート等をまた鞄にしまい、そして家へと入りました。

夕食を済ませ、しばらく自室で本を読んでいるうちに、頃合いの時刻になりました。窓の外を見ると、向かいの一階の一番左の部屋の明かりがついているだけで（この部屋の住民は徹夜で何かしているのか、いつも電気がつき放しながら）、周りの家はほとんど真っ暗です。ニースキーは玄関に向かいました。父親はまだ帰ってきていません。ここにのどこり、暗いうちに帰つてくれれば良い方で、たいていは日の出の見える朝方に戻ることばかりです。近年の治安の低下を見て、終日保安所に入り浸つてばかりなのです。なので、朝御飯で少し声を交わす程度の日常です。

ニースキーは忍ぶようにソッと扉を開きました。万が一、父親と出くわさないようにならうとしていたが、誰も……道にも人通りは無いようですが、誰にも見られぬうちにと、小走りで向かいました。

再びボロ家の前に戻ると、まだ一人は来ていないようでした。門前にしゃがみ込んでアゴを抱えて待ちましたが、なかなか来ません。あぐびしてもう先に行こうかと思った頃、よつやく一人が一緒に駆けてきました。

「悪い、行きつけの店が閉まつててさ、別の店に寄つてた」

「何が？」

「何がって、ナイフ」

「馬鹿、まだ要らないよ。説明とか何も聞いていないんだから」

「ああそつか」

「そのナイフ、使うなよ。今後もな。アシ付くから」

そして三人で中に入つていきました。

「まつてた、まつてたぞ」

林檎腹はさぞ嬉しそうにニコニコ笑つて出迎えました。

「じゃあ、ひとりこれだけずつもって、ふくろもあるよ」

埃だらけの棚から、泥で汚れたような茶色い布袋を引っ張り出して、そこに金花を詰め込みました。

「ああ、こりないよ。俺たちは自分たちで鞄を持ってきているから」
ースキーは手で制して、肩に下げていた綺麗な鞄を見せました。
「俺たちのやりかたでやるから、そんなボロ袋で売りさばいてたら、
すぐに保安隊に捕まるよ。むしろ普通の格好してたほうが誤魔化せ
る」

そう言つて、林檎腹から袋を取ると、中身を出して自分の鞄に移
し替え、ボロ袋は林檎腹の方に放り投げました。

「そうか……そうか……」

彼はどこか釈然としていないようなものの、頷いてボロ袋をまた
棚にしまいました。

「じゃあ行つてくるよ。儲けたお金のほうは、明日の夜に来て渡す
つてことでいいかな」

「あ、ああ……」

「じゃあな」

そして三人は、さつさと外へ出て行きました。

「な、あのジジイ、呆けてるぜ」

「これだつたら、『やらなくとも』上手く誤魔化せるんじゃない
か？」

「まあとにかく、もう少し信用を得てだ、何としても金花の栽培の
やり方を聞くんだよ」

「で、これから本当に売りに行くのか？」

「しないよ。とりあえず明日学校に持つていこうぜ。欲しがってる
奴いるしな。とりあえずこの金花は学校で捌こう」

三人はそのまま分かれて、各自の家へ帰りました。

「ニースキーが家に着くと、まだ父親は帰っていませんでした。今日も朝帰りなのかもしません。さつさと部屋に戻つて、鞄はベッドの奥に滑り込ませておいて、眠りにつきました。

翌朝、ニースキーはいつものようにパンにバターを塗つて食べていると、ドアが開いて父親が入つてきました。父のまぶたは、連日の徹夜の仕事で重だるく垂れていましたが、その真ん中の目が非常な陥しさを持つて、ニースキーを見つめています。

「どうしたの？」

「お前、夜中に何か物音とか、外から聞こえなかつたか？」

「……いや」

「そうか」

そして父も席に座つて、テーブルの皿の上に重ねて置いてあるパンを、一つ掴んで食べ始めました。

「何があつたの？」

不思議な不安の気持ちが、ニースキーの口を突き動かしました。

「いやな、家の前に、金花の花びらが落ちていたんだ」

「フウン……」

ニースキーはつとめて冷静に声を返しましたが、その実、胸の中では、ジワリジワリと不安が……それは例えるなら泥のよつた重々しい波が、胸の底から喉に向かつて湧き立つてくるような……そんな息の詰まる苦しさを感じました。父の見た花びらは勿論、昨日自分がせつぱつまつて“吸引”した時に、慌てて金花を取り出した時に落ちたものでしょう。あの時は、発作が落ち着いたことに安心して、周りのことに注意がいきませんでした。

「よつによつて、保安官の家の前で、堂々、金花を売るとは不敵な奴だ。ふざけやがつて」

父親はその怒りを表すように、荒っぽくパンを噛んで飲み込みました。

「お前も何か見たり知つたら、必ず私に教えなさい。金花は必ず根

絶させねばならん

「そういえば、お父さん」

「ん、なんだ。何か知つてているのか」

「いや、最近、金花のこの町への流入が減つていて話を、この間の事件の取り調べの時に、保安官の人から聞いたんだけど、もしかしてアジトが発見されたのかなと思って」

「ああ……アジトが見つかってわけじゃないが……何か組織に“事故”が起きたんじゃないかって話だ。実状としては、金花の流入は最近、激減している。ただ、まだ一部の隠れた連中が、ひそかに金花を栽培しているんじゃないかって噂だ。これまでには、ある一つの巨大組織が仕事を一手に、売り捌いていたと思っていたんだが、どうも個人でやっている輩もいるらしいと分かつてきた。その個人単位で探していくのは難しいんだ……」

「そう」

保安隊の調べは、思つた以上に早く進むかもしれません。ニースキーは黙々と食べ続けていますが、急速度に頭を回転させて考え耽りました。

「じつそつさん」

そして食べ終えると、さつさと立つて、家を出ました。

駆け足で学校まで行き、一番で教室に入ると、ジッとあとの人々が着くのを待ちました。二人は意外と早く、ニースキーの次と次に教室に入つてきました。教室には三人しかいません。ニースキーは口の前に一本指を立てて、近づいてヒソヒソと話し掛けました。しばらく問答して、そして決が出たようで、三人は足早に、また教室を出て行きました。

やがて着いた先は、あの林檎腹のいるボロ家です。三人は自身の鞄の中身を確認して、そして中に入つていきました。

「おじさん、いるかい？」

ニースキーは明るい声で、奥にいるだらう奴に向けて叫びました。すると何かガタゴトと物の落ちるような音がして、「アア～……」と間抜けなうめき声がします。

部屋に入ると、林檎腹が、あの女に組み伏せられて、上に乗つかり、背中の金花に噛み付いていました。相変わらず無理矢理、歯で引っ張られていて、傍から見れば痛そうなのに、何故か林檎腹は無抵抗に耐えるばかりで、それどころか今日は口の端にかすかに笑みがうががえます。

「なんだかな……喜んでるのかなコイツ」

「まあいいじゃん、なんでもさ」

「まあ、な」

今日の女は特に興奮しているようで、茎の根元に近い辺りに深く食いついて、ウーウー唸つては……涎をダラダラ、本当にまるで獣です。やがて一息に力をこめて引いたら、女の歯が欠けて、勢い余つて後ろに転がりました。壁にぶつかり、上から埃と共に布やら木の欠片やらよく分からぬものが降り注ぎ、女はゴミの中へ埋もれてしましました。そのまま氣絶してしまったのか、やがてゴミの落

下も落ち着いて、場はやっと静かになりました。

「さてと、オジサン」

改まって、ニースキーは林檎腹の前に立ちました。彼はまだうつ伏せに荒い息を吐いていましたが、顔だけ上げてこちらを見ました。

「昨日の分の儲けだよ」

ニースキーは懐からお金を取り出し、前に差し出しました。

「ああッ ああッ」

林檎腹が手を伸ばすと、その手のひらにお金が転がり落ちました。よく見て確かめて、やがて満足げな顔をニースキーに向きました。

「よくやったよ。ありがとう、ありがとう」

林檎腹は、腰に紐で結び付けてあつた皮袋に、お金をしまいました。

た。

「じいじでオジサン、一つお願ひとこいつか、聞きたいことがあるんだ

だ

「ん~なんだ?」

林檎腹はすっかり機嫌が良くなつたのか、満面に抑え切れないという風な溢れる笑みを浮かべています。それは無理もありませんでした。さきほどニースキーが渡したお金、それは昨夜に渡した金花の売り上げとしては、破格といつていいくほどの高額だったのです。

「もしよかつたら、金花の育て方とか教えて欲しいんだ。俺たちも金花自身に凄くお世話になつてるし、どんな風に出来ていくのか興味あるよ」

「ああ、うん、いいよ、たいしたことないけどね、うん、ついてきな」

もう背中の痛みは忘れたよつとスクッシュと立ち上がり、後ろの金花の庭へと歩き出しました。

「それにしても、おまえらすごいこな。どうやってあんなことかくうれたんだ?」

軋ませ、扉が開かれました。パッと白い光が目を打ちました。

林檎腹は手前の一つの花びらを撫でました。

「せわつていつても、たいしたことないよ。」「ズやつたり、へんなエダきつたり。エダをうまい」ときつていぐと、タネはどうも“いく”なるからな

そして、脇の方に小さく生えていた枝を千切りました。

「あとはタイヨウさまがあたえてくださる、たっくさんのヒカリ、コレがいちばんだいじだよ」

林檎腹は眩しくないのでしょうか、太陽に向かつて真つ直ぐに顔を上げて見つめました。

「なるほど。で、幾らか種を植えていけば、どんどん育つってわけだ

」「いや、そだたねえ」

「なんだって？」

「このタネはな、そのまま、まいてもネがはえねえ、メもでねえ。つちくれになつちまうんだ」

「じゃあどうやって増やすんだ？」

「……へへッ」「

何故か林檎腹は、顔を赤くして笑いました。

「なんだよ、その辺詳しく聞きたいんだけど

「ウーン、タネを……ツクルんだ」

そしてまた、顔を赤くします。ニースキーたちには何がなんだかさっぱりです。

横にいた二人が、ニースキーに耳打ちしました。

「おい、どうなってるんだ」

しかし不安そうな二人と比べ、ニースキーはあえてそうしているのか落ち着いた様子です。

「大丈夫だよ。多分。もともと『イツは頭がおかしいんだぜ。多分。さつきも女に噛み付かれたり、イカれてるんだよ』

あと二三の言葉を掛けて、一人を強引に言いぐるめました。

「まかせるよ」、何とか納得させたようです。

「ところでオジサン、金花の世話、大変だろ？俺たちが代わってあげようか」

「おまえらは、うりにでてくれよ。きょうだつてこんなに、もうけてきたんだし」

「いや、ソイツはある金持ちの馬鹿に買わせたんだよ。なあ、俺たちに花を譲ってくれよ」

「だめだ、おまえらにはムリだ、そだてられねえ。オレだつて、シツカリやれるんだ」

「なあ？」

「ダメだ、できねえ」

「しようがないな……」

「なにがだ？」

「こういうこと……だよ」

ニースキーはクルリと身を翻して、林檎腹の背後に回つて羽交い絞めしました。

「な、なんだあ！？」

「バイバイ」

その言葉が引き金になつて、突如、前の一人が突進してきました。

「あ？ あ？」

素早く、真っ直ぐ、一人の手が、林檎腹の胸元と腹に突き立てられました。それと共に、一人の手元の隙間から、赤い液体が漏れ出しました。

「あ……アッ……」

林檎腹は、思つたよりも大きな声を立てずに、生命の活動をゆっくりと止めていきました。やがてガクリと首が折れ曲がり、ニースキーの合図で一人は手元を離し、後ろへ下がりました。そして自然にくずおれるままに、ニースキーも力を抜いていつて、彼の体はドシリと重い音と埃を上げて、地面に突つ伏しました。

そして一同、カラッと乾いた笑い声を一杯に上げました。

「おーし、コレで完璧、だな」

「まあ、ね
「だけど……本当に大丈夫だらうな」
「オイ、今更俺を疑うのかよ」
「いや、まあ、万が一って不安が無い」とはなによ
「任せとけって、カンペキに処分しておくから」
「じゃあとりあえず……」
「ああ、祝いに一発やるか」
「凄いぞ、裏の金花、どれも滅茶苦茶、でかいからな
「パートとパーティやうづばい」

(「第一節」了、次回より「第二節」<)

「氣付いたかな？」
「…………」
「大変だつたね、峠は越したよ」
「…………」
「覚えてないかい？ 君たちは砂漠で倒れていたんだよ。あんな何も無いところで偶然にも出くわすなんて、何かの導きとしか言いようがない」
「…………」
「もうしばらく、ゆっくり寝ていなさい。ようやく直りかけてきたんだから」
「…………」
「君の連れも大丈夫だよ。ただ少し辛抱の要る治療を施しているから、君ももう少し回復して、落ち着いたら会わせてあげよう」

戻った光は、またすぐに闇に塗り潰されて、底の底へ……

エウムの意識が再び戻り、はっきり目を覚ましたのは、それから二日後の夕方でした。赤く、くすんだ夕日に眼を照らされ、眩しげに目を開けてみると……そこは粗末な木の小屋のような景色でした。四角く切り取られた窓枠の外に、山の巨大な黒い背中の後ろに落ちていく日が、空は赤黒く陰うつに染まり、その日の終わりを示しています。ふとウジカのことを思い出しました。

「ウジカ……ウジカッ」

辺りを見回して叫びました。部屋は、今、自分が横になっている寝床の他に、木で作られた手作りのような質素な机があるばかりで、あとは物自体がほとんど何も無く、閑散とした様子でした。机の上には火の付けられたタイムラップ、その手前に小さな古めかしい本が一冊あり、読みかけでどこかへ行ってしまったのか、中を開いたまま反対に伏せて置いてあります。エウムは寝台（これも手作りのようで下の木の細長い箱の上に敷布を置いてあるだけのものです）から降りて、机の前に向いました。本の表紙を見てみたのですが、この国の言語なのか、何と書いてあるのかさっぱり分かりませんでした。

「その本は私の一番の愛読書だよ」

男の人の声……顔を上げると、部屋の入り口に一人影が立っていました。部屋の薄暗さのためによく見えませんが、タイムツの光を頼りに見ると、白い髪と髭を顔中に沢山たくわえた、初老といつた感じの人でした。全身にダブダブした、大きな白いローブを羽織つていて、その姿は少し村の長老様のことを思い出させられました。

「もう大分、回復したようだね。目の光で分かる」

「……あの？」

「私はジーニズ・ホーチというんだがね、ジーニズと呼んでくれでいいよ」

「ジーニズさん、あたし、段々思い出しましてきました。砂漠を歩いていて、途中から……記憶が無くなってしましました」

「ウン、無理もないだろうけどね」

ジーニズは手に色々な野草を持つていました。机の上にそれを置くと、シワだらけの指で、葉を千切つたりして、何か始めました。「薬草だよ。まだしばらく飲んだ方がいいよ

「お医者様なんですか？」

「ン～、医者というか、仙人というか、魔法使いというか。……まあ色々な術を勉強しているジジイだよ」

ジーニズは冗談っぽく笑つて、笑みをエウムに見せました。それが少し彼女の心を安心させました。

「あたしは、エウムつてています」

「ウン。……唐突なことを聞くけどね、君は……君たちは、もしかして金花畠の村の子か？」

「は、ハイ……そうです」

「いや、君の連れの姿を見れば一目瞭然な話だけどね。君のような女の子が、村の外を歩いているってことは、ちょっとビックリな話だからね」

「あの、ウジカは？」

「あの子は別の小屋にいるよ。ただ少し治療に時間が掛かりそうだ

から

「無事ですか」

「ン～、正直に言えば『分からぬ』……かな。ただ今は病状は多少落ち着いているよ。後で見舞うかい、少しだけなら会つても大丈夫だから」

そしてジーニズは、選り分けた薬草を、手に持つていた小さな鉢の中に入れて、木の棒でゴリゴリとすり潰しました。草の青臭い濃いにおいが鼻を突きました。ジーニスは鉢を持って一旦扉の外に出て行き、またすぐに中に戻つてきました。

「水に溶かした。こうした方が多少飲みやすいと思うよ」

そして鉢をエウムに手渡しました。

「その薬草の汁を飲むと、また全身に汗や寒気が出るかもしれない。けどそれは体が治ろうとしようとしている兆候だからね、ジッと耐えて……ゆっくり休むことだね」

「あたしは、病気なんですか？」

「体中に染み付いている。けど、治らない程度じゃない。もう峠を越しているから、ここで完治させるべきだよ」

「はあ……でも病なんて……」

「金花の毒だよ」

「金花……毒？ 毒つて？」

「文字通りだよ」

「…………」

「君の体には、随分深くまで染み付いていた。あの村で生まれて育つていてるんだから当然だろうが。しかし村を出て、いきなり金花から離れてしまつたせいで……“枯渴”したんだ。ただ、君は症状としては軽い方だよ。回復も早い」

「よく、分かりません」

「君が彼を襲つたのは、勿論、彼の背の金花を求めて、だ。元々の体の疲労と重なつて、すぐにでも“花”を欲したんだ。だが彼の背中の花は、彼の病によつて死にかけていた。黒い膿まで飲んだが、

それは無茶過ぎた。私が通り過ぎたのは偶然にしても良かつたよ。すぐに吐かせたから、君の口に無理矢理、手を突っ込んでね。まあ、とにかく薬草を飲みなさい」

エウムは、ジーニーズの話すこと一つ一つが、あまりに唐突なことばかりで、しばらく鉢を掴んだまま、恐る恐る、中の緑色の不思議な液体を覗き込んでいました。しかし、彼の顔の優しげな笑みを、何度も確認するように見て、そして慎重に少しだけ……一口、二口、三口……いつの間にか不思議と、まるで体がそれを求めているようになってしまった。ドンドン口の中に流し込んでいくと、そして一気に全て飲み干してしまいました。言われたとおり、彼女の肌に粒の汗が吹き出て、凍てつくような寒気が体の中を、手足の指の先まで駆け巡りはじめました。

「さあ、もう日が暮れてしまった。横になつて……おやすみ

意識が切れる寸前に、ふと突然、浮かんできた人の顔は、エウムの父親でした。

29・小屋で三人、閑談

ぼやけた視界の先に……長老様が……

「…………ツ」

「起きたかね」

「…………」

「どうした？ そんなにジッと見つめて」

「いえ……ジー・ニーズさん、おはよ(＼)さ(＼)います」

「おはよう」

エウムは体をゆっくり起(＼)しました。部屋にはタイマツ(＼)がついていますが、外は幾らか空に明るみを感じます。鳥の声が爽やかに響く、濃紺の早朝です。

「もうじき太陽が昇るよ。半日足らずで目を覚ますとは大した回復力だな。いや、症状がずっと軽かつたせいだな」

「あの、ウジカは？」

「ウン、そのことなんだが……」

ジー・ニーズは何やら言い難そうに言い淀んで、机に近寄つて本を取り、おもむろに何枚か繰りました。

「昨夜から診ているんだが、どうもあまりよくない兆候だ。一つ、決断の必要があるかもしねれない」

「会わせて頂けませんか？」

「ああ、いいよ。じゃあとりあえず朝食を……」

「後でいいです」

「分かったよ」

エウムは一人で立とうとしましたが、寝台から腰を上げた瞬間、足に力が入らなくて倒れかけました。すぐにジー・ニーズが肩を押されてあげました。

「さあ、ゆっくり行(＼)」

「はい」

二人は扉の外へと出ました。一面の砂漠が目の前に広がりました。よく見ると、ジーニーズの家は丘の上に建つていて、そこから見下ろした砂漠が広大に広がっていました。家は小屋と言つていいほどのもので、少し離れた所にも別の小屋が建つていました。どちらも年代による風化の傷跡が窺えるものの、柱はガツシリと大地に立つていて、何年もそこに建ち続けていた雰囲気を感じさせます。

「もう何十年も住んでいるが、この家はもつと前、おそらく建てられて百年は建っているんじゃないかな。実は、誰も住んでいる人がいなかつたので、私が勝手に入つて住み始めたんだ。中は砂だらけでとても汚れていたから、必死で掃除をしたよ」

あっけらかんと笑うジーニーズに引きつられてエウムも笑いました。
「あっちの小屋だよ彼は。あちらは……まあ病室みたいなもので、エウムの寝台より良い物で寝ているよ。すまないね、寝台は二つしかないし、彼の方が重症だつたから優先させたよ」

「いえ、むしろその方が良かつたです。ありがとうございます」

扉を入ると、すぐ目の前に、大きな白い一枚布が天井から垂れ下げてありました。下をめくつてくぐると、真ん中にベッドが……ウジカがうつ伏せに寝ていました。

背中の黒い花は、一本一本、腐つた花びらや葉はむしり取られていていました。子房だけが残されていて、それらが一まとめに紐で緩く縛られて、頭を横の窓の方向に向けられています。

「とにかく、金花にとつては、太陽の光が大切だ。物が無いから応急にしかなつてないが」

ジーニーズはウジカの腕や額を触つて様子を見ています。目を開いて、そして最後に金花の茎を撫で回して……エウムを見ました。

「どうやら完全に峠は越したんだな」

「え？」

「君がウジカを見て、また激しい発作でも起こすかと思つたんだが、

完全に毒氣は抜けたようだな

「…………」

「君は、あまり金花の種を食べたりはしなかったのかね」

「あたしはあまり……友達や皆は隠れてよく食べていたみたいですが、長老様から食べては駄目だつて言わされましたし」

「眞面目に言うことを守っていたのが良かつたつてわけだな」

「はあ……」

「金花の種はね、幻を映す幻覚剤だよ。どんな『夢』でも見ることが出来る。故人や桃源郷に出会える。しかも『飛んでいる』間は最高の快感を覚える……。頭を痺れさせて、体中の器官が過敏になり、あらゆる刺激が全て快楽になる。覚えはないかい？」

「…………」

「君たちの村の人間は、皆、種や実を食べているはずだ。村を飛び出した理由は……まあおおよそ想像つぐが、それで生きていて、なおかつほぼ回復もした。これは奇跡だよ」

「ジーニーズさんは、村のことをよく御存知なんですね」

エウムは俯いて小さく呟きました。ジーニーズは窓際へ行き、窓枠に浅く腰掛けました。

「私は色々な国に旅をしているからね、あの村へも一二度行つたよ」「あたしはよく分からないんですが、金花つて……一体“何”なんでしょうか」

「君の村の特産、だね」

「ジーニーズさんの言う感じでは、あまり良い印象を受けません。何か危険なもののような言い方に聞こえます」

ジーニーズは窓枠から腰を上げて、そのまま真下の床に、直に座り込みました。

「少し長くなるかもしれないが、私の話を聞くかね」

そう言つて、左腕の袖のだぶつきに右手を入れて、小さな布袋を出しました。口を開き、中から小さな巻き煙草を取り出し、口にくわえ、一緒に取り出した付木で火を点しました。ひと口吸い込むと、

顔を真上に上げて、息を細くゆるべつつ吐き出していく、煙を窓の外へと流しました。

「実は金花の村のことは、噂や話は昔から聞いていたが、實際に行つたのはごく最近なんだよ。七年か八年前か……もつと前だつたかな、はつきりしないが。まあ君くらいの若い子からすれば『昔』といえる頃かな。

村のことについては、偶然だが、私の知り合いで、あの村の長老と懇意にしている女性がいてね、その女性から少し話を聞いたんだ。長老が彼女に、愚痴のように零していたみたいだが、大変な事が起きたと。ああ、ちなみにその話を聞いたのは、もつとずつと前の話だよ。村の人たち皆が、酷い疫病に掛かつたという。見ての通り、私は多少、医術というには偉そつたが、病に関しての知識は多少あるから、その人は私にその話をしてくれたんだらう。花の病だとうことだが、一つ興味が湧いてきた。

村中の金花に、突然、黒いまだらの模様が浮かび上がつたと。それが、村の男たちの背中の金花にもうつったという話だ。その女性は、直接、長老様の背中も見たらしく、一見した印象では、輝く金色の中に真つ黒な点がボツボツと浮かび、毒毒しい色彩ながらとも綺麗に見えたそうだ。

女性は長老から、その病に置かされた背中の花の、花びらを一枚受け取つたんだ。その時の長老は、その病を何とかして治そうと、世界中を旅して、優れた医者を探していた。当然だらう、村の特産であり貴重な資源の金花が、毒されて全く売れなくなつた。自分自身の命のこともあつただろうが、村の人たちのことも相当心配していたそうだ。

私はその花びらを見せてもらつた。斑点の黒色が周りに滲み広がつて、全体が濁つた茶色になつていた。彼女は持つていてもしょうがないといって、私はそれを受け取つた。まだ持つてゐるよ

ジー二ズは白布をめくつて出ると、部屋の角の物入れ棚から、折りたたまれた布を持ってきました。それをエウムの前でゆっくりと開きました。

はたして花びらは、まだ枯れ朽ちず、その形をしつかり残していました。色は、コハクをもつと泥で濁したような感じです。ジーニズが軽く手を振つてみると、硬化しているようで、カタカタと石のように揺れました。

「こうして改めて見ると、やつぱり綺麗だな。濁つてはいるが」「これを、お調べになつたんですか？」

「私がか？ この頃はあまり興味が無かつたから、実はずっとほつたらかしていたよ。むしろ、金花の村の人間に強い興味を持つたな。何しろ、背中に花を咲かせているんだからね。」

そして……それから何年も経つて、私は急に、金花の村へと行くきっかけを得た。先の金花のマダラの件とは別に、村の人から一通の手紙を受け取つた。子供が酷い病におかされていて助けて欲しいと。手紙はこの小屋に送られていたが、丁度私はその時、ある大国へ、高官の治療に旅立つていた。手紙が届いて、何ヶ月も後になってようやく中を見た。もう手遅れかもしれないと思った。しかし、村自体にも惹かれていたし、行つてみようと決めた。

広い荒涼とした砂漠を越えての旅で、これまでで一番大変な旅だった。何より、太陽の光が凄まじかった。あの砂漠は、村の方へ行くに連れて、段々と太陽が低く近くなつていく。熱波が暑いというより『熱い』、頭上より射し込む光線が『痛い』と感じるほどだった。金花に太陽の光は大切だと聞いていたが、なるほどこんな目も潰れるほどの、強く光り輝く土地なのだろうかと。期待半分、不安半分で旅を続けた

「私は……間違いでなければ……その手紙を送つたと思う人を知っています」

「ほう」

「小さい頃の話ですが、村の井戸イドモリ守の女性が、子供の病のために罪

を犯したと。しかしそれは女性の嘘だつたと聞きました

「嘘……嘘ではないと思うよ。あくまで手紙を読んだ印象だが、熱心に丁寧な文章で、心配していることを書いてあった」

「その女性は、村の宝玉を盗むためにやつた狂言だということでした。魔法使いが宝玉と交換に、治療してやると言われたと」

「ちょっと待つて。それは、きっと違う話じゃないかな。宝玉を交換条件に……なんて知らないし、第一、私は彼女とは会えなかつたんだ」

「そう……ですか」

「私はほとんど死に掛けになつて歩き続けた。そして、ついに倒れた。うつ伏せになつて、ジリジリと背中が焼けて、正直このまま自分は炭になつてしまふのではないかと妄想したよ。しかし……」

ジーニーズはニヤリと笑みを浮かべ、エウムを指しました。

「君みたいに……私も助けられた」

「目が覚めると、そこは洞穴のようなどころだった。しばらくモウロウとした意識で、頭上を見回していた。天井はかなり低い、立てば頭が着きそうなくらいだった。

そして私を助けてくれた人は、私の意識が戻ったことに気付いたらしく、横からノソッと身を乗り出して、上から彼さるのように覗いてきた。はじめは暗闇の影だったが、目が慣れてきて、彼の姿に少し驚いた。お腹が、まるで林檎のように膨れていたんだ。あれはおそらく何らかの病氣だろう。

彼は静かな低い声でこう言った。

『ミズをのめ、ただしゅっくりだ』

彼の手から入れ物を受け取って、少しづつ飲んだ。生温い少し臭う水だつたが、渴き切っていた私の喉にスッと染み渡った。

彼は別の水の入れ物を持って、それを自身の口に含んで、霧吹きのようになに私の体にかけた。よく見たら私は上着をまくられていて、肌に直についた水滴が、適度に冷たくて心地良かつた。

そうして何十分か、一時間以上か、彼に介抱されてゆっくり休んだ。段々と気がしつかりしていくにつれて、彼の姿がはつきり見えてきた。彼の背中に、花が咲いていた。それで村の人助けられたと分かったよ。かなり村の近くまで来ていたのかもしない。とにかく私はお礼が言いたくて、まだ目眩は治まってなかつたようだが、上半身だけ立てて、彼と向き合つた。

『助けてくれて、ありがとう。私は金花の咲く村まで旅をしているんだ。君は、ひょつとして村の者なのかな?』

彼は妙に二タニタと、皮膚の緩んだ笑みを浮かべてばかりいた。

彼は頭にも何か障害があるのかもしれないと思つた。

彼が話出した。

『ムラへこくのは、やめたほうがこよ。三ツモノは、じゅうせれる
から』

『どうこうじだ』

『三ツモノは、ムラへは、はいれない。たくさんみはつてゐし、だ
れもいれないんだよ』

『そつは言つても……呼ばれてるんだよ。子供が病に倒されている
つて』

『やつぱり、アンタだな』

『……何がだ?』

『へへッ、テガミおくつたの、オレ』

『お前が?』

『いや、ほんと元にかいたのはオンナのほう。オレがテガミをだし
た』

『曰那かい?』

『へへッ……まあそり』

『なるほど、偶然とはいいや、じこで出合えたのは嬉しいな。はじめ
まして、私は医者……と書つのは憚れるな、医術の研究をしている、
ジーニーズという者だ』

『オレはナマエないから、なんでもいいよ。はらがおおきいから“
リンゴツバラ”とかいわれてるな。べつにたまたまじやねえよ。く
るだらうとおもつて、まつてた。もうムラはちかいよ。オレがこう
してまちぶせてなけりや、アンタはムラにまいる、てまえでじるさ
れてるよ』

『ああ、ありがとう。どうも閉鎖的な村らしいな。といひで、その
子供の容態はどうなんだ? 手紙では相当悪いように書かれていた
し、正直、来るのがとても遅れた。相当悪化してなければいいんだ
が』

『じづかに、じづかに、ねむつてゐる。けど、ピクリとも、つづか
い。しんでいるみたいに』

『どういった経緯なのか、詳しく話してくれないか?』

『アンタは、ムクのことを、どれだけしつてるんだ？ イロイロきいたりしてゐるのか？』

『いや、正直なところ、ほとんど知らない』

『さうか。じゃあムクのギシキのこととも、しらないんだな』

『儀式？』

『ハナのミツをのむ、15のトシのギシキ。ほんとうは15のトシではじめてソレをのむ。けど、あのオンナは、まだあの口がちこさいときのませたから、それからドンドンおかしくなった』

『何故？』

『あの口はカラダがよわい、よくベヨウキになつてた。だから、あるひ、ネツがひどくで、セキがとまらなくなつた。あのオンナ、かなりあわてたんだ』

『それで、そのミツを飲ませた、と？』

林檎腹は静かに頷いた。

『それから……すぐセキは止まつた。けど、ずっとねむつたまま『村に医者ぐらいい、いるだろ？ どう言われた？』

林檎腹は静かに首を横に振つた。

『あの口のことは、だれにも、だまつていた』

『…………』

『とにかく、それから、ずっと……』

『分かつたよ。大体の事情は分かつた。だが、症状を実際に見てみなければ、どうしようもない。やはり、村に行かなければ』

『だから、シヌつて、いつてるだり』

『その口を連れ出せないのか、ここに。ビニの洞穴だか知らないが、決して清潔とはいえないが、背に腹はかえられないだり』

『…………わからない』

『何故だ？ お前は事実、この洞穴にいるだろ。一緒に連れ出せないのか？ ひょっとして、村の撻とかそんな事情か？』

『ちがう、そういうことぢやない。ただ……』

彼はそれから床じりく押し黙ってしまった。何らか、言づて言われ

ぬ事情というやつだらうか。苦渋の表情で、首をクイクイと曲げたりして、悩んでいたようだ。しかし、しばらく経つて、決意を込めた眼差しを持つて、顔を上げて、彼は言った。

『わかつた、なんとしてもつれてくるよ。どんなメにあっても』
『……氣をつけてくれよ』

そして彼は、私のために水と木の実を置いて、洞穴を出て村へと戻った。私としては、何とか上手くいくように祈つて、彼の背中を見送るしかなかつた。彼の介抱でいくらか気分は落ち着いたが、まだ目眩が少し残つていた。

それから……一日、二日、三日経った。待てども待てども、彼は姿を表す気配が無かつた。私の体調は次第に回復していつて、すっかり普通に歩けるように回復した。

そして、五日経った日の夜、彼がようやく洞穴に戻ってきた。砂利を踏みしめる足音が、私には別の意味でも嬉しかった。渡された水などがもう無くなりかけていて、私自身も危なかつたからだ。もうあと一日も経つて来なかつたら、私は強引でも村へ行く決心を固めていたところだった。

彼は……その口を連れてはいなかつた。

『どうしたんだ』、そう聞かずにはいられなかつた。

『アンタ、カラダはもう、だいじょうぶか？』

『ン、ああ、もう回復したよ、ありがとう』

『ムラのはずれに、おおきなキがたつてるんだ。タイジュだ。ソコにコドモをつれていくことにした。そこまできてほしいんだ』

林檎腹が言うには、やはりこの洞穴に連れてくることは出来なかつた。しかし女と相談し、私を……マホウツカイということらしい私は……大樹の下で待ち合わせすることを取り付けたという。

『けど、タイジュも、ムラにちかいからアブナイ』

『ああ、気をつけるよ。大丈夫、行くから。私はお前に、死にかけたところを助けてもらつたんだからな。その恩は必ず返すよ』

私は林檎腹に固く約束した印の意味で、手を出して握手を求めた。しかし、彼は意味が分からず、しばらくマゴマゴ、手と私の顔を見回した。どうも彼らの文化に、『握手』というものが無いらしい。

『信頼の証だよ』と説明して、彼の手を取つた。

そして夜、二人で洞穴を出た。外に出ると、辺りには沢山、巨大な岩がゴロゴロと転がっていた。私は、大きな一枚岩の下の、地面

の土が掘られた奥の所にいたらし。岩石の右手の先は、荒涼とした砂漠だ。空には月が高く小さく昇っていた。改めて見て、この広大な砂漠で倒れて、よく助かつたものだと思った。

左手の先は、遠くまで草原が続いている。林檎腹は、その草原を踏みしめて先に歩いていった。私も、林檎腹の後ろについて、その大樹の下へと向つた。葉には夜露がついていたので、たまにそれを千切つて、しゃぶるよに表面の水滴を飲みながら、目的地を目指した。

彼は、右に左に、危なつかしく体を揺らしながら、時折転げそうになるから、私は慌てて支えてやつたりした。彼はお礼代わりのようになに頭を搔いて笑うと、懷から木の実か何かを取り出して、それを口に放り込んだ……まあ多分、金花の種か何かだろう。するとたちまち足元がしつかりしたようで、真っ直ぐ歩き出した。

そしてついに近くまで来た。月はこちらの背中から明かりを差していたが、かなり遠くに止まつたからよく見えない。

『さきに、みてくる。ちょっとまつてろ』

そう言い残して、林檎腹は抜き足差し足、キヨロキヨロと頭を回して、あからさまに怪しげに、樹へと近付いていった。

遠くの根本から、彼の影の手が上で振られた。『来い』といふことだらう。私も、辺りを十分に警戒しながら、腰を低く屈めて、彼の元へ急いで向つた。

“少年”は木のかたわらに寝かせられていた。茶色い埃まみれの地味な布に包まれて、寝息を立てているのか分からぬくらい、静かに彼は眠つていた。口元に手を当てれば、かすかに弱弱しくはあるが息を感じた。体温は、これが異常に低く、まるで死体を触つているかのように冷たかった。子供がこのように弱まり死に掛けているというのは、酷く頼りなく切ないものだ。私は彼の頭の上から足の先まで、くまなく症状を確かめた。間違ひなく、金花による何らかの中毐……最悪の症状が出ているのだと思つた。症状は重く、そ

の時の私の手持ちの道具などでは、とても治せそうに無いと思つた。だから、私は林檎腹にこう言つた。

『これは今すぐに治すというのは難しい。出来れば、私の家の病室に入院せらるれば一番なのだが……村を出て』

『…………』

『ところで、お前の奥さんはいないのか?』

『…………おいてきた』

『彼女とも相談がしたいな。どの道、このままじゃあ最悪の場合がありえる。お前さんが主だとしても、奥さんの同意も必要だひつ』

『…………もうかえることにする。すこしかんがえるよ』

林檎腹は意氣消沈して肩を落とし、“少年”を背負つて帰つていつた。

私は、彼から幾らかの水と食べ物をもらつて、またあの洞穴へ戻つた。食べ物は、随分懐かしい果物をもらつた。全体に無数の刺の突き出た丸い果物だ。私が昔、遠く東の方の国へ旅した時に食べた物と同じだった。私はそれは好物だったし、食べ慣れた食べ物でもあつたから、帰り道、随分嬉しくそれを食べたのをよく覚えているよ。

洞穴で夜を過ごし、昼間は……ずっと奥の陰の中にひもついていては心身に良くないとつたから、出来るだけ外にと、出口の一枚岩の天井のすぐ下の陰で、ソッと身を横たわせて、外の景色を眺めていたよ。

33・乗り込む決意

すると真昼の暑い中に、彼が……林檎腹が、フラフラと危ない足取りでこっちへ歩いてきた。よく見たら、彼は全身に酷い怪我をしていた。殴られたか……蹴られたか……デコボコに歪んだ顔に血糊を付けて、ここまでからがら歩いてきたって様子だ。私は慌てて飛び出して、彼を抱いて洞穴へと運んだ。

『酷く殴られたみたいだな、どうしたんだ』

『ダメ……だつた……』

『奥さんの説得がか？　しかし……それが理由で殴られたのか、何て女だ』

『いや……ダイジョウブ……ダイジョウブ……』

『嘘を言つな、幾つか骨折してるぞ……ヒビくらいだが』

それで、とにかく手当てをしてやつた。しかし……驚いたよ、彼の回復力に。彼の傷口に薬品を付けて、数秒も経つたらもう傷跡が綺麗さっぱり無くなっているんだ。骨折の方も、こつちはもう少し時間が掛かったが、最初は少し動かしただけで顔をクシャクシャにしかめていたのに、しばらく横にさせてているだけで、すぐに多少の動きでは痛みを感じなくなっていた。多分、背中の金花が影響しているんだろうな。どういう作用か、鎮痛の物質が背の花から流れ込んだか……。確かに金花の種は鎮痛の効果を持つてゐるからな。

よく体を調べたら、彼は全身傷だらけだ。あと彼の脳の障害の様子といい、憶測で失礼かもしれないが、おそらく相当、村では酷い目に遭つているのだろうなと想像された。しかし、それでもこうして生きながらえているのは、尋常じやない彼の回復力によるところかもしけれないなども。

『ちつとも、しんじてくれなくて……』

『……無理もないな』

『かならず、かならず、つれてくるよ。センセイ、もうすこし、ま

つてくれよ』

『いや、もう待てない。行こう。私が直接、彼女に話をしてみるよ』

『ダメだよ……それはダメだよ』

『どうしてだ？　一日でも延びると、それだけあの子はドンドン悪くなつていいくぞ』

『ダメだよ……』

彼は俯いてしまい、そんなか細い声を漏らした。しかし、私はもう我慢の限界だった。一度あの子の症状を見た以上、放つておくわけにはいかない。私は彼の言つことを聞かず、洞穴を出て、草原の先を指差した。

『村へ案内してくれ』

林檎腹は、しかしまだ泣つて、五本指を胸に立てて搔きむしるようになに、落ち着かない様子だ。

『大丈夫、私から長老様に説明をするよ。お前には迷惑をかけない。だから……早くしないと本当に危険なんだよ』

『…………』

彼は無言で、私の目を真っ直ぐに覗いた。彼の瞳は濁ったガラスのようだった、硬い半透明の白い光が中に映り、少しでも力を加えれば簡単に砕け散りそうな危うさを持つていた。彼の目はずつと私を見ていたが、その目の中に込められた彼の意識が、私の目と彼の頭の中を行き来して、どうするべきか逡巡しているのがよく分かった。

やがて、彼は無言で歩き出した。私の横を過ぎる時、スッと横目で私を見て……その瞬間彼はかすかに縦に頷いたように見えた……そして先頭に立つて進んでいった。私はホッとして彼の背中を追つた。

先日の大樹の方向とは少しずれて歩いていったが、右手に大きくそびえ立つその姿が見えた。何分か歩いたが、私はすぐにもう多少の眩目を感じ始めた。昼間の天の真っ白い光は、それ自体が何かの

凶器のようで、熱と共に鋭い光の刃が、肌に突き刺さるようだつた。それは正直“痛み”として感じるほどだ。私はとにかく、頭に白い布を被り、少しでも熱と光を避けられるように対処した。が、あまり効果も無いようだつた。苦痛は段々と、確実に私の心身を痛めつけていった。

そんな中でも、林檎腹は全く気にならないように歩いていく。足取りは……先のやりとりのせいで重々しい様子だつたが、空からの太陽熱の放射はまったく気にならないようだつた。この村の人間なんだから当然といえばそうかもしけないが、改めて彼の体力の凄さを理解した感じだ。

そしてしばらく、私はモウロウとした意識で歩き続けた。この辺りの細かい記憶はほとんど残っていない。ただ真っ白く色の飛んだ草原の上を、フラフラと林檎腹の背を追つた。

やがて遠くに黄金の花畠が見えてきた。真っ白く輝いている花畠が。まるで夢を見ているような心地だつた。天国という所があるなら、きっと今私の歩いている所と同じような情景じゃないかと思つた。足を踏みしめて、まるで雲の上を歩いているような、フワフワと足元がおぼつかなくて、空を歩いているような感じを覚えた。

実際は、私は熱中症か脱水症状か起していたのだと思う。足元がしつかりしないのは、急激な体調の崩れだ。ただ、あまりに幻想的な光景を前にして、そんなことを考える思考も飛んでしまつていたんだと思う。文字通り「夢心地」な気分で、彼の後をついていった。金の花を背につけた彼は、さながら天使のように見えた。

ふと気付いたら、林檎腹が立ち止まつていた。私は彼の見ている先を窺つた。そこには、一人の女性が立つていた。きっと林檎腹の奥さんだろうと思った。私の頭はもう半分いかれていたので、目もおかしく、相手の姿をしつかりと見ることは出来なかつたが、髪が長く、体付きも細身で華奢だから、多分女性だろうと分かつた。

その人の口が、動いた。動いたのだが、何を言つてはいるのか分からぬ。どうやら耳もいかれてしまつたらしい。彼女に答えるように、林檎腹も口を動かしたが、すぐ近くにいる彼の声も全く聞こえない。果然と彼らの無音の会話を見ていくしかなかつた。時折、女は私を指差したりした。

そして、女は突然、林檎腹に……口づけをした。そのまま、林檎腹を押すように、地面に倒した。草むらの上で絡み合い、林檎腹は背を上に向けた。まるで金花がそこに咲いたみたいになつた。女が、その枝を掴んで、花びらを丸呑みするように、花の頭を口に含んだ。丸ごと、種も何もかも一緒に食べたんだ。その姿は、鹿か何かが野花を食べているようだ。自然の美しい光景を眺めているような気持ちを覚えた。林檎腹の背に乗つかつて、女は愛しそうに金花を食べ続けた。しかし女は果たして、彼を愛して？ 花を愛して？ ふとそんな疑問が浮かんだりした。女の湿潤した瞳には、不思議な色が浮かんでいて、一途に彼の背中を見つめ続けていた。偏執狂じみた、一直線の目をして。彼を？ 花を？

やがて女は彼の背から離れ、真っ直ぐ立ち上がり、私を見た。彼女の長い髪が……そのウェーブ掛かつた癖毛が横に大きく広がつて、私の前に立ちはだかつた。その表情は……やはりよく分からぬ。睨んでいる？ それとも微笑んでいる？ どちらとも違う、ジツと私を見つめて、私の心の内を見透かそうとしている……見定めている、そんな疑惑交じりの視線。ただ決してその中には、敵意のような攻撃的な意識は、彼女の視線からは感じなかつた。

彼女が足を踏み出した。私の目の前に立つた。それでも、私は彼女の顔がよく見えない、露掛かつて真っ白だ。きっと空の太陽の光のせ이다。彼女の肌が病的に白く、それに反射して、目鼻立ち、輪郭さえも不鮮明だ。

彼女の両の手のひらが、私の両頬を、包み込んだ。そして彼女は顔を近づけ……口付けした、この私に。その唇はまるで人形のように、冷たく、肌触りはボロボロだった。そして私の口の中、鼻腔にはい上がつてくる、金花の毒々しい甘い香り。否が応でもその香りを吸わされ、酔った。もつと、もつと、もつと！ 気付かぬうちに、私は彼女の口の香りを多く飲もうと、しばしの間夢中になつて、むさぼつていた。蜜より甘い香りが、その時の私の灼熱の苦しみを和らげてくれた。熱さも、痛さも、全てを忘れ去つた。彼女の唇を求めた。彼女を愛しいからとか、欲情したからとか、そんなことじゃない。ただ、彼女の唇が欲しかつただだけだ！

ジー二ズは興奮のあまり、激しく呼吸を、吸つて吐いてを繰り返しました。煙草の煙は拡散され、薄モヤを作つて顔を隠しました。

「すまない、話しているついで、あの時のことを見出してくださいた。

彼女の後ろに、林檎腹の背の花が見えた。彼は氣を失っているのか、俯いて地面に伏せたまま、全く動く気配を見せない。背の花が、吹き流れる風によそいでいる。私は彼女の口付けを受け続けたまま、彼が目を覚ました時のことを想像した。彼は嫉妬に怒り、私を突き飛ばす？ ……そんな気はしない。不思議だが、彼は私と彼女との濃密な口付けを目の当たりにしても、その光景を大人しく見つめ続けるだけ……そんな気がした。彼は彼女を愛している。しかし、その愛には何も憎しみは含まれない。自己のための愛じやない。打算の含んだ愛じやない。同じ生きとし生けるもの同士に対して偽り無く注ぐ愛……慈愛。そう、私の思ったとおりだつた。彼は、地面にしゃがんだまま、私たちの抱擁を遠くから見つめていた。時が経ち、全てが終るのを待つて。

やがて、頭の後ろに回つっていた、彼女の腕の力が緩められ、それと共にソックと唇は離れていく、私は彼女から解放されると、そのまま

ま地面にへたり込んでしまつた。尻に小石を挟んだが、痛みなど何も無く、ベタベタに濡れた口元をだらしなく開いたまま、背中がゆっくりと後ろに倒れていき、天を仰ぐように転がつた。勿論空には、サンサンと輝く太陽があつた。私はその太陽の真ん中を、ずっと見つめた。白い光が、七色に分裂している。間違い無く、それは金花の症状からだろう。けどその時にそんなことをいちいち考えてはいけない。ただ『綺麗だ』と眺め続けた。

心が、破裂しそうだつた風船に穴が開いたように、胸の張り裂けそうな辛さが無くなり、そこに清浄な空気が流れ込んできたように、清々しさ心地良さに……私は涙した。頬に熱い雲が、とめどなく流れていつた。涙の当たつた部分の皮膚が、にわかに活性し出したようを感じた。体中の細胞が、喜びに沸き立つたような感じだつた。

ふと、過去の記憶がその時に、走馬灯のように私の頭の中を駆け巡つた。これまで私が憎んだ、男、女、子供、そして妻。彼らの姿が、眼の裏側に張り付くように、映つた。そして、彼らに対する私の感情が……憎しみの情が“溶け消えていつた”。私を裏切つたあの“女”的”ことが、とても愛おしく思えた。彼女の、笑顔、悲しみの顔、怒りの顔、彼女が私の顔に向つて手を張つた時のあの凄まじい形相！

全てが……こんなに彼女の顔は切なげだつたのか、こんなに彼女は悲しげだつたのか、こんなに彼女は辛そうだつたのか。私は、過去の私を憎んだ、恥じた、悲しんだ。そして、今生きている私を感謝した。喜びが、悲しみ全てを噛み碎いた。私の心は“形”を崩し、分子さえさらに砕けて、原子となつた。原始の姿となり、空を……あの高く広い大空を自由に飛べるよになつた！

ジーニーズは、どこか薄く照れた表情で、エウムを見ました。

「あの口付けをした彼女は、女神だったのだろうか?」

エウムは返事に困つて、俯いてモジモジとしました。もとよりジ一二ズは答えを期待してはいませんでした。

「フフ……少なくとも私には、あの女には何か特別な意味があつて私に近寄られた、神様だったと信じている。夫の目の前で、他の男に口付けをした女だがな」

「あの、その林檎腹の人ですが、奥さんはいなはずです

「ん?」

「あの人は……村八分の扱いをされていましたから……」

「分かつていいよ。あの男は……あの男の愛は、神の愛だ。単なる男女の恋愛というものではない、もっと普遍的で温かな、聖なる愛を持つていた。聖なるゆえに、俗なる者には疎まれる。神は生命全てを愛すが、人が神を愛すのは……」ここには様々な齟齬や間違いが生じる。人には“欲”があるから、目を濁す。人は決して神にはなれないし、神と相対することも出来ない。しかし、神の言葉は聞ける。きっと、あの林檎腹は、その声を聞けるのではないだろうか

「……」「……」

「話がそれたね、戾そう。

といつても、あの時あの瞬間の記憶は、ほとんど無い。というより、周りに意識を持つていく余裕が無かつたというのが正しい。私はただ、七色の太陽の輝きを眺めているだけだった。光の分裂の影に、懐かしい人の姿を見つけるのに夢中だった。

最後に見たのは、母の姿だった。母は私を生むとともに亡くなつたから、当然会ったことは無い。しかし、しつかりと私の目の前に母の顔が現れた。私と、とてもよく似た線のような細目で、母は優

しく私を見つめてくれた。それに勝る温かさは無かった。私の心はすっかり幼少へとかえり、母の元へと駆けようとした。が、それを母は、手を立てて静止させた。私は心の声でその理由を聞いた、『どうして?』

母は真剣な眼差しで、私を見据えて言つた、『あなたには、まだするべきことが沢山ある、そんな暇は無いのよ』

また私は聞き返した、『僕のするべきことって?』

母はまた答えた、今度は優しげな笑みを浮かべて、『あなたは、父として、世に居る病める人々を助けるの』

『僕が、父?』

『あなたには力がある。だから、私の最後の、最後の力添えをしてあげる。頑張つて』

すると母が、フッと姿を消した。いや、私は感じた、私の体内に、母が入り込んできたことを。私の腕、指先一つ一つに、母の腕と指一つ一つがピッタリと重なつた。足も同じようだ。私の動く心臓に、母の鼓動が重なつた、共に動いていった。そして、母の顔が私のそれに重なつた時……その時の体験は、たつた一度の瞬間のことながら、それは……とても素敵な体験だつた。母の脳が私のと重なつた瞬間、私の腹部に痛みが走つた。間欠的に続く苦しみ、その痛みは、これまで掛かつてきた腹部の病気などとは、どこか違つていた。その痛みは段々と強まり、ついに我慢の限界まで迫つてきて、気が狂いそうになるほどの辛さだつた。が、途端にその後に、サツと痛みが引いて、さつきまでの苦しみがまるで嘘だつたように……私の心には嬉しさ、何ともいえない充足感で一杯になつた。そして、氣付いた。さつきまでの苦しみは、決して悲しみといいうものには包まれていなかつたと、そのことに気が付いた。不思議な、不思議な痛み、そして喜びだつた。痛みの傷口を、喜びの潮ワシオが温かく包み込んで、癒してくれる……そんな感覚。それは男の私には、全く未知の経験だった。

やがて、目の前の夢のような極彩色は、急激な勢いで一点へと…

輝く白い光へと集束していき……刺すような光線……真っ青な空
ハツと気付くと、太陽を背に一人の影が、上から覆うように立
つていた。

黒い“彼女”は、上から威圧的に見下ろして、私に言った。

『今すぐに、この村から出ていけ。一度と近付くな』

『それは、できません。あの林檎腹と約束したのです。あの男の妻を助けると。あなたが、そうですか?』

『いや、違う』

『では、行かなければなりません、金花の村へ。あの男との、かたい約束です』

『あいつはもう、村へと戻した。もう一度と、お前はあの者と関わることは無い』

『やうはこきません!』

私の叫びに、彼女がこさこか怯んだ様子を見せたのが見えた。

『はつきりと警告する。このまま村へ行けば、お前は“必ず”殺される。無理に向つたところで、貴様は長老の命令によつて、消される』

る

その彼女の言葉には、気のせいじゃない、何か黒く濁つた感情の混じつているのを感じた。

『あなたは誰なんですか?』

『……全てを、断罪する者だ』

彼女は、村の裁判長、といふことか。

『村の外は、法治圏外。今、引き返せば、間に合つ。早々に立ち去れ』

彼女の顔には、極めて真剣に、こちらの身を案じてくれていることが、しつかり伝わってきた。私は、彼女の親切を素直に受け取るべきだと思った。

『分かった。今日のところは引き上げる。だが、一つ、私のお願いを聞いては頂けませんか?』

彼女は無言でジッと立つてゐる、話を聞いてくれる。

『あの男に、伝えてくれませんか。私の名は、ジーニーズ・ホーチ。私は、あなた方がいづれ、こちらを訪れてくれることを待っている。私は世界中を旅している。私の名を使って探してくれ、私はいつも、いつまでも待っている、と』

静かな風が二人の間を流れていた。言葉はもう無く、彼女は後ろを向いた。ただ、振り向く寸前に、かすかに縦に頷いてくれた……気のせいだつたかもしれない、それくらい僅かな頷きだつた。

そして彼女は、無言で、村の方へと帰つていった。今、私がそこにいたことを知らない風に装つて、

「——ジズはそこで言葉を結んで、床に置いてあつた布袋から、また新たに一本巻き煙草を取つて、火を付けて吸い始め、のろしのような白い煙の柱を吐き出しました。

「それで、林檎腹さんとは、出会えたんですか？」

エウムが訊ねました。

ジーニーズは煙草を、音楽の指揮棒のように振つて、バツを作りました。

「いや、残念だが、まだ出会えていない」

そして、まだほとんど吸つていないので、長い煙草を床に擦り付けてしまいました。

「もう五年以上の月日が経つているし、もうあの子は……亡くなっている可能性が高い」

「私はあの村にいましたが、行方不明になつて、それから分からなくなっています。林檎腹さんも、奥さんも……」

「本当かい？」

「色々ありました、奥さんがいた家に火をつけられたのですが、死体が出なかつたと……」

「焼け死んでしまつたんじゃないのかい」

「その時は、そう長老様が締め括られました。けど、同時に林檎腹さんもいなくなつて……そのことは誰も気にしていられなかつたん

ですが……」

「フム。もしそうなら……村を出て、私を探しているのだろうか」
彼は腰を上げて、窓枠に肘をのせて、顎を掛けて外を眺めました。
今日は少し曇り空のようで、薄い灰色の雲が天一面に蜘蛛の巣のように張っています。まるでこの雲が、林檎腹との隔たりの壁のように思えてきました。

「そういえば肝心の話からそれでいたね」

ジーニズはあえてエウムの方は見ずに、また一本煙草をつけて、話し始めました。

「それで女に言われて、村から離れてからが、大冒険だつた。灼熱の荒野、それもあつたが、“別の苦しみ”が私を襲つた。金花だよ。あの女との口付けの時、口渡しで流れ込んできた、花の原液。金花など持つていらない私は、断続的に、禁斷症状が襲つてきた。その度に私は、広い広い荒野で一人、のた打ち回つて叫んだ。岩があればそこに頭や手足を打ちつけ、一通り苦しみが治まるまで、血塗れになつて転がり回つた。まるで体中の神経の一本一本に、金花の根がそつくり入り込んで、内から痛みを刺激してくるような感じだ。それこそ、自分の体をコナゴナにして砕いてしまいたいほどの辛さだった。私は身をもつて、金花の効力の全てを知つた。ただでさえ、体力が無くなりかけていた時だ、しまいには、暴れる氣力さえなくなつてきて、体を投げ出して、かすかに残つていた意識の端で……死を覚悟した。

空を仰ぎ、青、赤、黒、空の色というより、一枚の板の色が三色に変化していくようにしか見えなかつた。曇ることも雨が降ることもなく、ただひたすら広い一枚絵……色の変わっていく壁のようないものを、何も考えることなく見続けた。それが何度も何度も……私は、死なかつた。

すると……いつからかというハツキリした境は分からぬ……空が黒く染まって、それから空の色が変わらなくなつた。どれだけ経

つても、真っ黒い空。終らない夜。この時には、ついに自分は地獄へとたどりついたのかと思った。が、どうも違う気がする。

僅かに残った力を振り絞って、首を横に傾けた。陽炎で揺れる地面、大地も、真っ黒だった。その奇妙さに驚いて、私は反射的に上半身を起した。大地が、空が、全て目の前の景色が“真っ黒”。物の形は、色の濃淡で認識できた。ゴシゴシとした黒い岩の隆起が、無気味だった。

ハッと氣付いて、私は自身の手を上げて見た、……その手も黒い。シワの一つ一つが、引っ搔き傷かのように、無数に線が入っている。やがて悟った、『私の目がおかしくなったんだ』と

ジーニズはエウムの方に顔を向け、右手を目の辺りへと持つていき、親指と人差し指で、両目のシワの重なった下まぶたを、ソッと下に伸ばしました。広く開かれた両目は……ほとんど真っ白くなっています。

「私の瞳は、色を感じる能力を失った。しかし、物の形は判別が出来た。そして……そしてさらに一つ強い能力が……私は暗闇でもハツキリと、遠くを見渡せるようになつたんだ。どんな闇夜でも、こうして窓の外を見れば、岩の間をチョロチョロと駆ける、小動物たちの影が見えるんだ。

そのかわり、昼間でも色が無く薄暗い景色を見ることになるが、不思議な力を手に入れたものだ。

そしてその日一日、私はその辺の石ころと同じように、昼夜転がつて過ごした。体力の回復のために。そして次の日の夜、私は満天の星空の中に、十字星を見つけた。古代の開拓時代、祖先は空の十字を手指して旅をしたという伝記は、世界中に残っている有名なものだ。私は、その十字の星星の神々しい輝きに導かれて、再び体を起こして、また歩き始めた。幸いに夜目に利く目となつたことだし、体力も昼夜の休憩が効いたのか、不思議と軽い足取りで進んでいった。夜に歩くとすれば、真昼の陽の暑さを避けられたしな。

やがて、私はこの小屋の前へと辿りついた。意識はモウロウとして、昼も夜も分からぬ目で、この……今いるこちらの小屋の扉にしがみついた。倒れ込む勢いで、扉が開いて、中に転がり込んだ。そして、何日もの間、私は死んだように眠り続けた。

次に意識が戻ったのは、喉の激しい渴きに起されたからだった。必死に体を引きずって水を求め、カピカピの筋肉は少し動く毎に軋む音を立て（それは体の内から、直接筋肉とくつ付いている骨を伝つて、“体中に”うるさいほどに鳴り響いた）……家の中には何も無い……外へと這つて出ると、田の前に舞う砂埃の先に、石で出来た古井戸を見つけた。後で外に出たらエウムも見てみると、それは実に頑強な石組みで作られた井戸で、中を覗いてみても、底が全く見えない、上から見れば、星のど真ん中まで続いているんじゃないかというくらいの穴だ。

私は、手持ちの水入れの容器を、服の端を千切つて取つた紐で結んで、中へと放り込んだ。かなりの深さで、一度目は届かなくて、また引き上げると、さらに服を千切つて紐を取つて、繋げて……三度ほど繰り返して、ようやく水面についた。途中で『井戸』が枯れてしまつている』ということは考えなかつた、そんなことは、生きるか死ぬかの今、考へても仕方が無かつた。

容器は手のひら位の小さな物だから、すぐえた量は僅かだつた。私はその水を、じぶれないように慎重に喉に流し込んだ。喉まで届くより先に、ほとんどが舌にしみ込んだ。舌もその時は乾き過ぎていて、まるでカサカサの綿のような状態だつたから、ようやく水分を取り込んで、口の中が多少回るくらいになつた。そしてようやく、『フウ……』とため息をつくことが出来た。

もう一杯、二杯飲んで、落ち着いて、またその場で倒れ込んだ。今度は、安心して、だつた。黒い空を眺め、今は、夜なのか、昼なのか、時間はどうなつてゐるのかを、漠然と考え出した。

37：若かりし頃のあの街へと

しかし、安心していられる時間は、短かった。金の花……あの症状が、またぶり返してきたんだ。だが今度は、体に多少の耐性が出来たのか、それとも体内に残った金花の量が減ってきたのか、一番最初に襲ってきた時よりは、その苦しさは多少耐えられる程度になつていた。しかし、全身がバラバラになるような痛み……特に今度は指先に強い痺れを感じ、そのまま細胞がケイレンを強めていつて、コナゴナに碎けるのではないかと思った。私は手を、井戸の石の側面に叩きつけた。まだその痛みで誤魔化した方が我慢が出来た。やがて、その地獄の苦しみに耐えて、よつやく治ると、立ち上がった。この小屋へと戻った。

それから、この小屋での生活が始まった。勝手に入つたこの小屋だが、つい最近まで先住の人がいたしかつた。小屋の奥に、幾つか木の実などの食料が置いてあつたからだ。どれも日持ちのする物ばかりで、おそらくここを使つていた人は、不定期に訪れては何日かここで過ごし、またすぐ旅に出る……という感じだつたんじゃないかな。置いてある物が少なく、生活感をあまり感じなかつた。今ある道具とかは、私が旅をして手に入れたものを集めたんだよ。

そしてある程度、落ち着いてきたら、私は再び旅に出た。あの金花の症状は、全く治まつていなかつた。たび重なるぶり返しで、段々とその発作に慣れてきたところがあつたが、今回の旅は、この症状がきつかけだつた。なんとかして、自分で治したいと思つた。

どこへ向うかといふことで、本来なら発祥の地である、あの村へ行くべきだつたが、勿論、行くことは出来ない。そこで私は、この症状をもつと科学的な目で見るべきだと思い、昔、……若い頃に医術の勉強をして暮らしていた国へと、久しぶりに行こうと決めた。ある意味、思い出の故郷へ帰るような気分かな。若い時分、私は

医学博士になろうと、熱心に机に向って勉強していた時期があった。が、その頃の私は心の幼い若造で、学べば学ぶほど分からなくなる医学の世界の迷路に、段々と嫌気が差して、ついに全てを放棄して、その国を飛び出た。……その話は別の事になるから端折るが、とにかく、またあの国へ行こうと決めた。世界的にも、医術が最も発展している国として知られている所で、常に最先端の研究がなされているところ。早速、身支度を整えて、この小屋を後にした。

久々の故郷を訪れるというのは、氣恥ずかしいものだつた。もう何十年も前の記憶……街はすっかり様変わりしていて、行きつけだつたバーなどはとつぐに潰れていて、しかたなく、別のターミナルの前の店に入つた。そこには沢山の……学生がいた。話している内容から、医学学生なのはすぐ分かつた。私は、すぐ隣に座つていた男三人組の一人に声を掛けた。

『君、ユ・ゾークという教授を知らないかね?』

三人はいっせいにギョッという奇妙な驚きの顔を浮かべた。

『ゾーク教授って……あの薬学科のゾーク教授のことですか?』

『ああ。実は私は久しぶりにこの国に来たんだ。ゾークとは古馴染みの知り合いで、彼と会いたいんだ』

『だったら街探さないで、保安所に行けばいいよ』

『どうして?』

『どうしてつて……捕まつてるから』

『捕まつてる? 何かやらかしたのか?』

『生体実験ですよ。十人の被験者を殺して、無期懲役をくらつているんですよ。知らなかつたんですか? 結構世界的なニュースになつていたと思うんですが』

『そうか……そうだつたのか』

『知り合いみたいですが、会うのは不可能だと思いますよ。外部との連絡は一切遮断、厳しい刑務所に入っているんですから。実は僕らの学校の教授だつたんですが、捕まつて、いい迷惑です』

『奴は天才的な頭の持ち主なんだがな……確かに時に暴走する様子も見せていたが……』

『なんでしたら、一度、学校の方に行かれたらどうですか?』

そして、私は彼らに学校の場所を教えてもらい、店を出た。

ユ・ゾークは私の同期生だ。彼は本当に頭の切れる男で、飛び級という制度で普通の学生より六年も早く大学に入学した。だから同期生といつても、歳は六つ離れている。が、彼は物怖じしない性格で、歳の差、先輩、先生などが相手でも、堂々とした意見や主張をする男だった。時に彼は……その強引過ぎる発言などで、幾らか人に煙たがられてもいたが、しかし才能が周りの者を黙らせたんだね。彼は学生時代から、幾つも新開発の薬剤を作り出しては、公表していた。

奴の自宅には何度か行ったことがあるが、家全体が研究室となつていて、入り口の一重扉をくぐると、強烈な薬品の臭いと、機械の作動音がウンウン唸つていた。奴は大学に姿を見せる以外は、ずっと家にこもつて研究していた。

奴なら……金花のことを、実際に見せれば何か分かるかもしだい。この国へ向かう時にすぐ浮かんだのが彼の顔だ。というより、もう既に金花については色々調べがついているかもしれない。彼は学生の頃から、ただの薬学知識だけにどまらず、呪術、魔術などの類の、神秘学にまで手を伸ばしていたからな。勿論、方向性は薬学からで。

空は夕方頃、大学前に着いた。まだ多くの学生達は、勉強や研究に勤しんでいるようで、門の前にたむろしていた学生に薬学科の校舎を聞いて、そちらへ向つた。

建物に入り、廊下を歩いていると、染みで汚れた白衣を着た若い男とすれ違つた。彼に訊ねてみた。

『すみません、大変お聞きし辛いことをお訊ねしますが、ユ・ゾー

ク教授と親しい方と面会をしたいのですが、誰ぞ紹介願えませんでしょうか？』

その男はあからさまに嫌そうな表情を浮かべて、冷たい目で私を見た。

『あなたは誰ですか？ この学校の関係者じゃない？』

『すみません、唐突に訊ねまして……。私はゾーク氏と古い友人でして、最近彼が逮捕されたという話を聞いたんですよ。彼とは学生時代からの古い仲間で……』

男は私の話を遮るように手を振った。

『ここでそのようなことを言わないほうがいいですよ。……とりあえず、ついてきて下さい。それで、私が今から会う教授に、お訊ね下さい』

私は彼についていって、階段を上つていった。

『ゾーク氏のことは、我々教授の間では禁忌となっていますから、うかつなことを言つとあなたも怪しまれますよ』

『私は……流れの医者のような者で、ゾーク氏の事件のことはほとんど知らないんですが、どういった経緯で……』

彼は振り返り、上から圧迫するように睨んだ。

『だから、そのことの詳しいことは、これから会う先生に詳しく聞いて下さい』

『す、すみません』

彼はまた前を向いて歩き出し、背中越しにボソリと呟いた。

『ゾーク教授は学生時代の私の恩師なんです。先生は奇人だから……よく誤解を受けるのは間違いないです。しかし、あの事件に関しては、私には少し納得し難い部分があるんです。……でも、もう服役をしているわけですし、意味の無いことです』

彼の気持ちに、複雑なところがあるのだろう。もうこれ以上は何も聞かずに、ただ黙つて彼についていった。

『ラビスティ教授、私です』

『どうぞ』

扉を開けようとした彼は、続いて入ろうとした私を、手で制した。話をつけてくるから待ってる、ということだ。彼が扉の奥に消えたあと、私は息をひそめ、静かに中の会話を聞こうとしたが、うまく様子をつかめない。と、すると、またすぐに扉が開いて、彼が中に入れと合図した。彼の横をすり抜けて、私も扉をくぐった。

38・ゾーク逮捕の様相

『これはこれは、初めまして』

中で豪奢な肘掛け椅子に座り、待っていたラビスティ教授という男……髪を剃つているようで頭は丸坊主、顔は潰れているのではないかというほどの深いシワが幾重も重なっていた。かなり歳を召された人だと思った。しかし、その見た目に反して、声は非常に艶があり、まるで若者のような綺麗な声をしていた。その差があまりに大きくて、しばらく違和感を消せなかつた。

『初めまして、私はジーニズ・ホーチという者です。逮捕されたと、いう、ユ・ゾーク教授のことについて、是非お話をお聴かせ頂ければと思い、ご無礼ながら御大学を訪ねた次第です』

『ええ、彼から聞きましたよ。それじゃあ……』

ラビスティ教授は、目を、後ろに控えていた彼に送つた。

『失礼します』

彼は一礼して、部屋を出て行つた。

『では、ジーニズさん、詳しくお話を聞きましょつか』

『早速ですが、单刀直入にお話します。私は、とある研究に関して、ユ・ゾーク教授の知恵を借りたく、この国へと参りました。しかし肝心の氏が、現在は逮捕されて連絡が取れない。仕方なく、とりあえずゾーク氏が勤めていたこの大学へと参り、何らか手段は講じれないかと思いまして、唐突ながらお訪ねした次第です』

『なるほど、その研究は、薬学の知識が重要なのかね?』

『ラビスティ教授は、金花……という物をご存知でしょうか』

『ええ、よく知っていますよ。ゾークが熱心に研究していましたからね』

『やはり! 私は、その金花というものが一体どんな物なのかを知りたくて、ここへ來たのです。何らか、研究資料などを見せて頂く

』とは出来ないでしようか?』

『ゾークの作った資料は、全て没収されてしまつたよ、逮捕された時にね』

『…………』

『彼は、自身の体を実験体にして、様々なことを調べ上げた。栽培、効力、その他色々なことを。彼が狂つたのは……金花のせいだ』

『実は……』

私は、彼に近付き、田を大きく開けた。白い眼を見せた。

『それは……』

『私も、このような状態でして……』

『飲んでいるのか?』

『いえ、私の場合、強制的に飲まされたもので、それからは金花を飲みたくとも、手元に金花が無い所にいたんですよ。相当もがき苦しめましたが、苦闘の末、次第に体から抜けていきました。ただ、目はおかしくなつてしましましたが』

『なるほど、その手の甲の傷はそういうことか』

『ええ』

私は袖をめくつて腕を見せた。そこには大きな傷跡が縦横に走っていた。

『よく生きていたもんですね。狂い死んでもおかしくないといふのに』

『もしかしたら、母に会えたことが、何か私に力を貸してくれたのかもしちれません』

『母親?』

『ええ、……七色に分裂した太陽の光の影に、母の姿を見ました。

あんな温かな心地良さは、しばらく忘れていました』

『それが、金の花の力だとしてもかな?』

私は動きが止まって、真顔になつてラビスティ教授を見た。

『そう……ですね。あれが、本当に幻なのか。……でも、あの時の

私の心の底より感じた慶びは、幻のようには思えません』

『……それをはつきりと調べるため、だつたな。そういえば、彼もゾークも体中に傷を作っていたからな。“衝動”がどれくらい、どのようにして起ころうか調べるために』

『何か、何か少しでも資料はないでしょうか？……一番は、彼と会うことですが。そもそも、ゾークは何故逮捕されたのでしょうか？』

『彼は……その金花の成分が、いつたいどのような影響が人体に及ぶのかを、つぶさに観察したかった。そのための金花の被験者に、この学校の生徒、十名が彼に呼び出された。皆、ゾーク教授の授業やゼミ参加者の生徒だ。もちろんそのことは内密に行われた。彼がどのような実験を生徒に試したのかは知らない。が、ある日、その実験のことをどこかで聞きつけたのか、保安隊が突然、ゾークの研究室へと乗り込んできた。ゾークの実験のことが公に知れたのはこの時だ。ゾークは表向き、学校側には単に“新薬の開発”という研究テーマだとしらせていたが、裏側で誰にも知られないように金花の研究をしていた。だから、この学校の学長も、教授も誰も、彼が金花に手を出していたとは全く知らなかつた。勿論私もだ。』

保安隊は、ゾークを即逮捕、生徒たち十人も、保安隊の管理する医療施設へと連れられていつた。彼らはまだ保安隊の管理下で治療を受けているはずだよ。そして保安隊の公表で、事件の真相が告げられた。ゾーク教授は、人体実験で生徒たちの体を利用し、生徒たちは恐ろしいほどの多量の金花の種を与えられ、脳に甚大な障害を残した。保安隊病院で治療を受けているが、完全な回復の見込みは無いと。そして、何週間か経つて、生徒十人の死亡が確認された、ということらしい』

何か、ゾーク教授の喋る様子に、違和感というか、気になつた。

『あなたのその言い回し……ちょっと気になるんですが、ひょっとして、その公表を信じていないんじゃないですか？』

『私、というよりは、さつきの彼が、ですね。あなたをこの部屋まで案内した彼。彼はゾークの一番弟子みたいなもので、学校での研

究は勿論、ゾークの自宅の研究所まで行つて、一緒に研究さえしていたんですよ。その彼が、ゾーク教授の逮捕はおかしいと、最初から疑っていたんです。私は、彼の言つことにどことなく信憑性を感じました。何しろ彼は、ゾークが金花の研究をしていましたということを、全く知らなかつたというんですからね。一番弟子である彼に、実験をするということを全く知らせていなかつたというのは、どう考へてもおかしい

『保安隊ぐるみで、ゾーク教授が何らかの意図を持つて秘密裏に研究をしていた……と考えられなくもないですね。ちなみに、ご存知でしたらお伺いしたいのですが、その生徒たちが収容された病院というのは、どこでしようか。もし“正規に”彼らの治療がなされたとするなら、そちらへ出向くのが一番のようだと思いまして』
『それだったら、イーア君に聞くといい。さつきの一番弟子の彼のことだよ』

そして内線電話で、彼……イーア君が再び部屋に呼び出された。ゾーク教授より説明を聞き、あまり納得していない様子に思えたが、手を差し出してきて、握手をした。

『しかし、病院に行つても、意味ありませんよ。私だつてもう行つたんですから。結局はぐらかされて追い出されました』

『だつたら、その入院した生徒たちの両親に会えないかな?』

『それも無理ですね、実は生徒たちは皆、それぞれ色々複雑な家庭事情を持った生徒ばかりで、身元なんてものがもう無い連中ばかりですから』

『なるほど、だから保安隊の方も、事件をある程度はぐらかすことが出来たのかもしれないな。だつたら、その連中の知り合い……友達とか、その線での繋がりはどうだ?』

『ありませんよ。というかその事件を境に、退学者が増えましてね。被験者の生徒たちと知り合いと思われる奴らは、皆いなくなつてしましました。連絡も取れません。……何らか、圧力が掛かっている

ように思えてしょうがないんですけどね』

『そうか……八方ふさがりということか』

『いや、それでもないかもしないよ』

何かを思い出したように、ラビスティ教授が手を叩いた。

『うちの生徒に、一人、保安隊に関係する子がいたと思つよ。たしか……父親が保安隊に勤めているとか』

『ああ、ニースキー君ですか』

『そうそう、父親の仕事のことに関する話では一切言いませんとか言つていたそうだが、何とか上手く話を聞き出せれば……』

『駄目ですよ』

イーア君がはつきりと、首を横に振った。

『ニースキー君ですがね、もう何日も行方不明なんです。友達の人とともに、どこかへ失踪してしまつたようです』

『本当かいそれは?』

『ええ、父親の方も、学校に事情聴取に来ていたんですよ。けど、何も得ることが無かつたと。完全な雲隠れみたいです』

『その、ニースキー君という子の父親に会つてみたいたいな』

『家は知つてますから、一応ご案内はできますけど……』

そして私はイーア君にまた案内されて、そのニースキーという子の家へと向つた。

39：ニースキーの父・保安官ナタール

私は彼の家に行く前に、服屋へ寄った。私のボロボロの身なりを見直して、もう少ししまともな格好で会うべきだと思ったからだ。布が厚手の丈夫な旅衣は、風雨にさらされているうちに、破れたり泥に汚れたり、酷い有様だつた。これから会いにいく相手が相手だし、キツチリとパリッとしたスーツにでも着がえようと思つた。安いスーツを買うと、さつさと手洗い場で着がえて、ついでにボサボサに縮れていた髪を、水に濡らして適当に整えて、とりあえず多少は様になる格好になつて、ようやく向つた。

その考えはどうやら間違つてなかつたようで、ニースキーという青年の家は、なかなか立派な邸宅だつた。彼の家の周り一帯は、広く高級な住宅街になつていて、敷き詰められるように建てられた家々の一角に、彼の家があつたんだが、立派な門構えの中を覗いてみれば、大きく立派な木の扉がデンツと立つていた。大人三人は並んでぐれそうな大きな扉だ。木の表面は美しいツヤを持つていて、さぞ良い建材を使って造られた代物だろう。いや、今私たちのいるこの小屋も、私が自分で修繕をしたりしたもので、その時に色々、建築について勉強したものでね。とにかく、その家を見ただけで、この家に住む人間の品格みたいなものが、強烈に伝わってきたよ。浮浪者のような格好のままだつたら、きっとつまみ出され……いや保安隊に逮捕されていたかもしねないな。

まあともかく、今一度、襟元や袖を真っ直ぐ綺麗に整えて、イーア君の方を見て頷いて、彼を先頭に、入り口へと入つていつた。時刻は夕方頃、もしかしたら家には誰もいないかと思つたが、幸運なことに、扉を叩くと、すぐにパッと開かれた。

細く整えられた立派な口ひげをたくわえた壯年の男、……ニースキーの父親だ。一瞬間、お互いがお互いの姿、様子を舐めるように見

合って、イーア君が先に口を開いた。

『ここにちは、お久しぶりです。イーアです』

『……なんだ、どうしたんですか?』

父親はあからさまに不快そうに、一歩右足を後ろに退いて、体を斜めに傾けてこちらを見た。

『ごめんなさい、今日は私の方ではなくて、あなたに紹介する人をお連れしていまして……』

イーア君は横に退いて、私を招き入れた。私は一步前に出て、丁寧にお辞儀をした。

『はじめまして、突然、お訪ねしまして申し訳ありません。私は、ジーニーズ・ホーチといいます』

『……ナタールといいます』

父親……ナタールは硬い口調で返事した。

『私は……医者として、今は金花についての研究をしているのです。この言葉を喋った瞬間、ナタールの表情がハツとなり、私を見る眼差しがとても真剣なものに変わった。思つたとおりだつた。この国に来て、街中を歩いていて気付いたんだが、どうも金花がこの国に蔓延しているらしい……ということを薄々感じていた。私の変な癖で、街にいる人間の様子に、意識をよく配つて観察してしまうのに蔓延しているらしい……』といふことを薄々感じていた。彼らの何人かに見られた体の異常な震え、それはおそらく金花によるものだろうということが想像出来た。いや、浮浪者だけではない、街を歩く、無氣力そうな若者たち、彼らもまた私と同じく、瞳が白くなつていった。これは相當に根深く、金花の存在が街に棲み付いてしまつてゐることを表していた。だから、保安隊である彼に、『金花』という言葉を掛ければ、何らか反応を得られると思つた。

案の定、彼はすぐに態度を変えてきて、『中でお話を伺いましょう』と言つてきた。

願つてもないこと、遠慮無くお邪魔をした。イーア君は、『私はこれで退出します』と言つて、帰つていった。

通された廊下、滑りそうな綺麗な廊下を通つて、応接間へと案内された。ナタールは一人台所へ行つてしまつたので、先に中に入つて、豪奢な皮椅子に座らせてもらつた。やや経つて、ナタールが盆にのせたお茶を持って入つてきた。

『わざわざお茶をありがとうございます』

とりあえず一口だけお愛想で飲んだが、早く話を聞きたかったので、すぐにお茶を置いて、さっそく本題を話し始めた。

『……それで、金花について詳しいことをどうしても知りたいのです。そのために少しでも情報を得られると想い、突然ながらお訪ねした次第です。ご無礼をどうかお許し下さい』

ナタールは、とても真剣に話を聞いてくれた。彼はとても真面目な性格のようで、椅子に座りながら上半身を前に傾けて、こちらの顔を真面目な顔で見つめ、話す一言毎に頷いたりして、静かに黙つて最後まで聞いてくれた。

そして、私の話が終ると、『「」事情はよく分かりました』と、そして彼は色々と話をしてくれた。

『ご存知のように、私は保安隊にて仕事をしていますが、特に金花の取り締まりに関して深く関わっています。丁度、一年ほど前でしょうか、金花が、元々は裏で極少量出回る程度だつたのが、急に大量に街に流入してきたのです。ことに若者の間で大流行するようになりまして、今ではただの学生であつても、手に入れるのは難しくない状況です。昔と違つて、非常に安く簡単に入手しやすくなつたのです。かつては一部の富裕層が……金持ちの道楽の一つとして、主に貴族などが使用されていたのですが、随分と変わつてしまつたものです。これはきっと、何か巨大な組織が関わっていて、このような事態になつたのだと、我々は確信しました。

金花は、原産の国では合法の秘薬として重宝されていますが、我が国では完全なる違法です。一時の快楽のために、後に迫つてくる激烈な苦しみのことを忘れてはなりません。そして、究極の悦楽の

味を知つてしまつたものは、やがて精神が崩壊し、墮落した人間へと墮ちてしまいます。その心地良さを知つたら、もつ他のことに目もくれることなく、ただひたすらに金花の悦楽ばかりを追い求めていくことになります。』

ナタールは、できるだけ冷静を保とうとするように、極めて静かな声で話していたが、しかし言葉の響きの硬さから、内心の興奮を抑えきることが出来ないでいた。唇が絶えず細かく震えていた。

『私の息子の行方不明も、何らか金花に関しての事件に巻き込まれたものとみています。いつの日だったか、この家の門の前に、金花の花びらが何枚か落ちていたのです。信じたくは無いが、あいつは多分……金花を手に入れていた。そして、服用もしていた。あいつの部屋の机の引き出しにも、金花の花びらや種が入っていた。全く馬鹿なことをしてくれたものです……』

取り締まる側の者の子供が、金花を味わっていたというのだから、皮肉な話だった。

『ニースキー君の御学友にも、何も手がかりは無し……ですか？』

『ええ、というよりは、その友達も同じく、姿を消しているんです。おそらく三人は、一緒に巻き込まれたのだと思います。とても仲が良かつたですからね、どこに行くのもいつも三人はつるんでいたんだそうです』

『もしよろしければ、ニースキー君の写真などありましたら、見て頂けませんか？ もし私も街で見かけたら、御連絡致しますので

……』

『分かりました、少々お待ちを……』

ナタールは席を立ち、部屋を出ていって、やがて一つ薄い紙製のアルバムを持ってきた。

『息子が自分で作つたアルバムみたいですね。ここに息子自身も、その友達も写つていたので……』

私はそれを受け取つて、パラパラと軽くめくつていった。ナタールに指差されて、ニースキー君、あと一人の友達の顔も拝見した。

その写真……ニースキー君の瞳がかすかに白く薄くなっているのが、微妙ながら分かつた。

『失踪の原因がそれと直接関わっているのかは分かりませんが、確かにニースキー君は金花を服用していたようですね』

『分かりますか』

『ええ、ほんの微かですが、瞳が白く薄くなっているでしょう？』

それが一つの副作用なのです』

『……そういえば、あなたも』

『ええ、私も、金花を飲んだので、よく分かるのです。ただ、私の場合は無理矢理に飲ませたのですが』

『今気付きましたが……体中にも傷を……お辛かつたでしょ』

『……ええ』

私は、曖昧な返事を返してしまった。

『あと、これは非常にいき過ぎたお願いかと思いますが、もしよろしければ、保安隊に押収されたゾーク教授の研究資料を見せて頂くことは出来ないでしょうか？』

『それは……出来ないですよ。あの事件の一切の資料は、隊内でも極秘資料として扱われていて、普通の保安隊でも自由に見られません。全ては上層部に送られて、極秘に研究がなされているのですから。一般のあなたに見せられるわけがありません。ちなみに、私がさえその資料の中身を見ていません』

『そうですか……分かりました。あの、ではこの[写真のアルバムの方を、お借り出来ませんか？』

『ありがとうございます』

とりあえず手がかりの一つとして、小さなアルバムを借りて、服の懷にしました。

それからナタールから、この街における金花に関しての現状を教えてくれた。実はつい先日まで一時期は、金花の流入が減っていた

のだが、また最近になつてぶりかえすよつて、沢山流れてきた。しかも今度は使用者の低年齢化が進み、年端もいかない小さな子までが、面白半分に、自由に手に入るよつになつてしまつてていること。依然、犯人の手がかりが全く無いこと。とにかく状況としては最悪であることを、熱く語っていた。そして、一つ興味深い話が出た。

『現在、保安所に十一歳の男の子を預かっています、その子は保安隊・療養所で治療を受けているところなんですが、とにかく見ていて痛々しいほどに暴れよう……。よほど体中に金花の毒素が染み付いているのでしよう、もう一切金花を断つてから、数ヶ月経つのですが、まだまだ峠を越えるきさしが見られないのです。寝床に縛り付けておいても、太い丈夫な紐を引き千切らんばかりに悶えるのです。あれが……あの狂気に満ちた姿が、わずか十歳程度の子供なんかと信じられないほどです』

『その様子は、分かりますよ。私自身で経験したことですね』

『ママに会わせて……と、言つんですね』

『……ママに?』

『ええ、何か幻でも見ているのでしょうか。私たちが話しかけても、そればっかり言います。あの金の花の種を飲ませてつて。でもですね、それが少し不思議にも思えまして』

『……』

『あの子は幼い頃から、母親から酷い虐待を受けていたんですよ。あの子を保護した理由も、実はそれが理由でして、丁度あの子の頭を鍋で叩かれそうなところを、ギリギリで家に踏み込んで母親を取り押せたんです。母親の方はそのまま収容所の方へ送られまして、子供の方は体中の怪我のために療養所に送られたのですが、調べてみたら、傷よりも金花の中毒の方が酷い状態と分かりまして……。だから、あの子にとって母親というのは、恐怖の存在でしかないはずなんです。実際に、このことを聞くのは酷でしたが、母親のことにについてどう思つているかなど、幾つか問うたのですが、一切口を閉じたまま、全身がガタガタと震え出して止まらないんです。ほ

となんど何も聞き出すことが出来ないのです……。

金花の中毒による症状が出てきて、特に発作が最高潮に達すると……ママに会わせて……金花を飲ませて……と、必死の形相でせがむのです』

『それは、きっと……その子は、七色の光の向こうへ、温かい母親の姿を見ているんですよ』

『七色の光?』

『ナタールさん、もし出来れば、その子に私を会わせて頂けませんか?』

私も多少は医術を学んでいるので、その子に向らか力添え出来るかもしれないですし、直接患者を見てみたいのです』

『分かりました、それなら……大丈夫です。療養所なら私の顔も利きますし。ジーニーズさん、何とかその子を……助けてあげて下さい』

『……分かりました』

療養所は、中心街から少し離れた、背の高い無機質なビルばかりが乱立したオフィス街の、保安庁の建物のすぐ裏手にあつた。四階建ての立派な療養所だったが、周りに何十階もある大きなビルが沢山そびえているので、背の低いあそこは、周りに押し潰されそうな雰囲気だった。

『こんなビル街の一角に、療養所があるんですね』

『元々はこの療養所が、この辺で一番最初に建てられたものだったんです。時の流れで、段々と官庁や会社のビルが建てられてきましたね。それで、周りのビルのせいだ、療養所へ光が届かなくなってしまいまして、こここのところ両者でトラブルが起きているんですよ。でもですね、お互い、いがみきれない部分もあります……。この療養所の入院患者の半分以上は、この辺りの官僚や会社員なんですよ』

『なるほど』

その辺りの関係の……黒い部分に関しては、とりあえずそれ以上聞く気は起きなかつたので、口をつぐんだ。

『では、ついてきてください』

と、彼が向つていく先は……保安庁の方の入り口だった。

『何故こちらに入るんですか？』

『患者は特別措置を受けていますので……ついてくれば分かります』入り口のドアの両脇には、それぞれ警備員が立つていて、私の姿を一べつしたが、その後ナタールの顔を今一度確認するように見ると、何事も無かつたようにまたビルの正面を監視し続けた。

中は、天井がとても高く高い大きなホールで、受付に一人の女性と男性が立っているだけ。耳が痛くなるほど静かで、まるで美術館か何かのようだった。

『今日も、例の金花の調査で、多くの人間が出張っているんですよ。私もそうですがね。しかしへー二ズさんを療養所にご案内するのは、金花に関してのことととても大切なことですから、どうぞお気になさらず……』

突き当たりのエレベーターに乗つて、ナタールは何かパネルに特殊な操作をした。体の陰になつて見えなかつたが、何か複雑にボタンを押しているらしく、やがてエレベーターが動き出した……下に。

『地下ですか』

『保安庁と療養所は、地下で繋がつているんです。そこから行くと、例の患者の療養室へと行けます』

『しかし、今さらですが、私をそこに案内しても大丈夫なのでしょうか？　何やら随分と厳重な所へお連れ頂けるようですが、色々機密上、重要な部分があるでしょう』

『機密といつても、療養所内の他の患者に対する措置ですか？』

それと、実はあなたのこと少し調べさせて頂きました。こちらの保安庁にあなたに関するデータを送りまして。ジーニズ・ホーチさん、あなたは昔、この国の大学で医術の勉強をなされていましたね』

『……ええ』

『今、逮捕されているユ・ゾーク教授と特に親しく、共に学内で研究されていましたので、お互い薬学に関しては、学生の中でもずば抜けていたということです……』

『何を、仰いたいのでしょうか？』

『もう何十年も前になりますが、ある薬害事件が起きまして、私の父が……父も保安隊の一員だつたのですが……その事件を担当していました、某大学の研究室が怪しいと踏んでいました』

暗い地下へのエレベーター、取り付けられた室内灯の明かりの中で、私ら二人は見つめ合つた。沈黙の中、お互いの目の中の色を探り合つた。やがてエレベーターは、目的の階に到着して、扉の開く音が、室内に張り詰めていた緊張を解き開いた。

ナタールはすぐに外に出て、背中越しに咳いた。

『しかしあま、もう時効の過ぎた話でもあります。父は随分とその件を気にしていたもので、子供ながらまるで自分のことのように色々考えたりしていましたんですよ。

まあ、とにかく、こちらへどうぞ』

彼はこちらを振り向こうとしない、私は……後についていくしかない。

随分と暗い廊下……明かりは点けられていたが、極力弱めに設定されているらしい。暗い沼のような、反射の無い灰色の床を、コツコツと硬い音を立てて、進んでいった。

やがて正面に、廊下を遮断するように鉄格子がはめられていて、その奥で見張りをしていた者に声を掛けると、鍵が開けられ、そこをくぐつた。その先の廊下は、右手と左手にそれぞれ一つの部屋の入り口、そして正面突き当たりにも、もう一つ入り口。

左右の部屋四つは、上方に小窓の付いた扉で、そこには黒いカーテンが掛けられて、中は見えなかつた。

正面の入り口は、押し戸になつていて、開き放しになつていたが、すぐに右へと曲がる部屋の構造になつていて、こちらの中の様子は何も見えなかつた。

『ここで待つていて下さい。鍵を借りてきます』

そう言つてナタールは、正面の入り口の方へと入つていった。私はその隙に、他の四部屋の前に近付いて眺めてみた。取っ手の横辺りには、頑丈そうな南京錠が取り付けられていた。扉も鋼鉄製らしく、所々、表面の塗装がはがれていたが、モノは古そうでも、いかにも堅固で分厚い扉という印象だつた。私は手のひらをその表面に当ててみた。

『入りましょうか、ジーニーズさん』

ハツと気付いて、慌てて振り返つた。少し動搖してしまい、不恰好な動きになつてしまつた。ナタールと、その後ろに別の男……肩

幅がとても大きく筋肉質で立派な体格の、背の高い大男が控えていた。

『彼は隣の部屋ですよ、行きましょう。あ、後ろの彼ですか。彼は鍵の開閉係ですよ。あと、もしもの時のために、患者を抑えるための者です。患者の精神状態は不安定ですから……』

その男は、どう見ても“こちらのこと”も警戒しているように見えたが……特に何も言わず、私は頷いた。

『じゃあ、開けてくれ』

ナタールの合図に、男は黙つたまま、その部屋の前……ちょうど正面の部屋の扉を出てすぐ右手の……南京錠に、手に持っていた、輪っかに束ねられた鍵束の鍵の一つを、差し込んで回した。ガツンツという重い音が、静かな廊下に深く響き渡った。南京錠を取り外すと、今度はまた鍵束から別の鍵を選んで、取っ手のすぐ下にあつた鍵穴に差し込んで、もう一つ鍵を開けた。そして取っ手を回すと、ようやく全て開けられた。

男がゆっくり押すと、ギリギリと金属の擦れる音を立てて、鉄の扉は開けられた。男は扉一杯まで押し切って、九十度まで広げて、扉の下につつかえ棒を挟んで固定させた。

『では、お入り下さい』

男に続いて、ナタールもそう言ひて、中に入つていった。私も続いた。

どうやら部屋は一重扉になつていて、二つ目の中の扉は鍵は無いようだ、そのまま押し戸を押して、ようやく部屋の……ベッドの角が見えた。

『今は、眠つているようですね。……氣絶している状態、と言つた方が正しいですか』

私は部屋の奥に入つていき、次第に見えてくるベッドの様子……そのあまりに残酷な光景に、息を飲んだ。

ベッドの上に、横たわる少年。上には何も掛けあるものは無い

のだが、ベッドの上下左右から丈夫そうな拘束ロープが伸びていて、彼の手足や体に絡みつくように、固定されていた。その姿は、まるで蜘蛛の糸に掛かった獲物のようで、緊縛された小さな少年の、あまりに残酷な姿だった。

私は衝撃を抑え切れなくて、渴いた喉に唾を流して落ち着こうとしたが、ほとんど何の甲斐も無く、ただゴクリと大きな音を立てただけだった。

するとその時……その音に反応したのか分からぬが、少年の右腕がピクリ……と動いたような気がした。はじめは、それは単に自分の動搖による震えからの見間違いだと思った。が、そうではない、段々と腕の動きが、はつきりと分かるくらい大きくなってきた。右腕だけじゃなく、左腕も。右足も。左足も。胴体も。全身が……。

『いかん……これは……発作です！』

フト気が付いて、少年の顔を見た。目や口が目一杯大きく開かれ、顔中に幾重もシワが出来るほど歪めて、狂気に満ちた物凄い恐ろしい形相をしていた。真ん丸く見開かれた二つの目は、真っ白、だつた。瞳孔が、無い。金花の作用……おそらく彼は、目が全く見えていない。

『……ツア……アツ……アアアアアアツ……！』

やがて少年の……人間の声と思えないような、凄まじい叫び声をあげた。全身に襲い掛かる苦痛。ジッと我慢など出来ない痛み。しかし、彼の体はがんじがらめに固定されている。ガシャガシャと、拘束ロープとベッドの柱が擦れて音を立てる。絶叫と騒音が交差し、耳を覆いたくなるような冷たいノイズが、地下の無音の療養室に口ダマした。少年の顔が、吐き散らした唾や鼻水で、ドロドロに汚れていた。

『間欠的な症状ですから、暫くすれば治まります』

ナタールがそう耳元で呟いたが、……だから、何だというのだろう、としか思えなかつた。この少年の症状は、明らかに自分が味わつた経験とは、比べ物にならないほどの重度だつた。既にこの少年

の意識は、壊れてしまつてゐるだらう。目の前にいる彼が、まるで一匹の脳の狂つた獣か何かのようにしか見えなかつた。それが、まだ背丈の小さい少年なんだという事実が、逆に信じられなかつた。

『ほら、段々と治まつてきました。注意して下さい、何か話しかけるなら今です。症状が治まつてきた後、数分の間が、わずかに会話出来るチャンスです。その後は、死んだように眠つてしまひます』
私は正直、気圧されていた。だが、下がるわけにはいかない。私はゆっくりと、彼のベッドの横へと向つた。

確かに症状は和らいできていた。まだ全身を、ビクンビクンとケイレンさせてゐるが、叫び声は静まつてゐた。目を見開き、顔を横に傾けて、筋肉が弛緩してて、口から細い涎の筋が続いていた。顔面は蒼白で、紙のように生氣が無い。幾度もの発作による原因だらう、わずか十歳かそこらとは思えないような、顔には細いシワやシミが幾つもついていて、まるで老人の顔のように見えた。真っ白い目は、一体どこを見ているのか、角度からして、私のいる方角だらうということだけしか分からぬ。

『君、聞こえるかい?』

『.....』

『ン? 何だつて?』

確かに、微かに唇が動いたのは分かつた。

『もう一度言つてみて?』

『.....マ.....マ.....』

『.....』

少年が、笑つた。この時、初めて私が見た、少年の、子供らしいといえるような、屈託の無い笑顔だつた。

私は戦慄を覚え、目眩さえ感じた。全身から血が抜けていくような、虚脱感を感じた。何なんだろう、この笑顔は。何か信じ切つてゐるモノに向けられた、一心で一途な笑顔。それが、全身ボロボロの、老人じみた少年の顔に浮かび上がつた。

再び、少年の顔が震えた。今度はゆづくつと、言葉を紡いだ。

『マーマードル』
ママなど?

『ママは、まだ何事にならない?』

私は思わずそつ返事をした。

『マードル、マタノ?』

どこに行つたの?

『ママは、別の場所にいるんだよ。この部屋にはこなによ

『ワソダサヰマデ』
『』

『この子は、母親と一緒にいる夢を見ているんだ。夢と現実が「コチヤ」「コチヤ」になつていてるんですよ』、ナタールが説明するよつと語つた。

『マーマードル』

『ママは、まだ何事にならないんだ。けど、君の体が治れば、会こに行ける』

『無責任で、私の口は、勝手にそう言つてしまつた。治る? 会える?』

『ハナキンノハアウツ』
『』

やがて彼の意識は、ブツリと切れてしまった。

発作が終わり、汗や涎などの体液まみれになつた少年を綺麗にしてあげようと、ナタールに頼んでタオルを持ってきてもらつた。顔から丁寧に拭いながら、彼の体の検査を始めていった。

全身を拘束していたおかげか、ぶつけたりなどの大好きな傷などは無かつたが、皮膚の荒れようが凄まじかつた。体中に出来物や炎症が表れていた。ほとんど全身が真っ赤にただれ、デコボコになつていた。幾つか手持ちの軟膏があつたが、原因がはつきりしないので、とりあえず塗るのは止めておいた。

それから彼の血液を採取し、療養所の医療器具を借りて、一通りの精密検査を行つた。血を抜き取つた時には驚いた、薄く白っぽくなつていたのだ。すぐに成分の異常を疑つて、血液検査を行つた。

そして分かつたのが、まず白い色は、色素成分の異常。それ以上に驚いたのは、血液中の数パーセントに、常識的に入りえない、まるで見たことの無い謎の成分が含まれていたことだ。私はナタールに頼んだ。

『金花のサンプルは無いでしょうか。その成分を調べてみたい』
『一応ですね……ありますよ、既に調べられています』

『あるんですか、資料が』

『ただ、これは我々の機関で調べたもので、ゾーク教授のものとは違いますよ。成分分析をしましたが、幾つもこれまでに見たことの無い謎の成分が見つかっているんです。これに關しては研究が滞つている状態です。ゾーク教授を除くと、氏ほどの卓越した薬学知識に優れた研究者がいないのです。でも、あなたなら、何か分かるのでしょうかね。……研究室に、行きましょうか』

そしてとりあえず少年の部屋をして、先ほどの廊下正面の部屋へ案内してくれた。入り口を入れてすぐ右手に曲がると、すぐ正

面と左手に部屋の扉があつた。正面の扉には“関係者以外立入禁止”の札が掛かっており、私たちは左手の扉へと入つていった。その扉の中に確かにに入るまで、背後にいた見張りの男が、鋭い眼でこちらを見ているのが、背中越しながらはつきり伝わつた。

部屋は非常に狭く、ど真ん中に置かれた大きな研究用の机が、部屋の大半の空間を占めていた。ナタールはその机と壁とのわずかの隙間を、横向きに歩いて奥へと向つた。そして壁に格子縞に並んだ引き出しの一つを、横から手を伸ばしてソッと開けて、シャーレを一つ取り出して、机の上に置いた。彼はそのまま慎重に、真つ直ぐ下に腰をおろしていつて、机の下から椅子を引き出して座つた。ギリギリ座る程度の隙間はあるらしい。

『どうぞジーニズさんも、机の下に椅子が入り込んでいますので、上手く出して座つて下さい。狭くて申し訳無いです』

『では、失礼して』

私も真似をして横向きに隙間を通り、彼の横の角の辺りまで行って、椅子を出して座つた。見張りの男は、さすがにその立派な嚴つい体は部屋に入らないので、入り口の前でこちらを睨んで立つていた。

改めて机に置かれたシャーレ眺めた。中には金色の粉が少量入つていた。種を碎いたものだろう。

『えつと、それで……これが……』

ナタールは体を後ろに向けて反らして、また引き出しの一つを開けて、角を黒いヒモで束ねた厚い資料を取り出した。

『これが、この金花を調べた時の資料です。見て下さい、全く未知の成分だらけなので、名称を仮にA、B、C、Dと付けてあります』資料を受け取つて、パラパラとめくつて見た。成分Aが十パーセント、成分Bが二十五パーセント、成分Cが四十パーセント、成分Dが十パーセント、……そして十五パーセントの油脂分。
『ナタールさん、アルコールを用意して頂けませんか。そう、麦芽で作られたビールがいい』

『あ……はい、オイ、持つてくれ。大丈夫だ』

見張りの男が少し迷う気配を見せながら、しかしすぐ駆け足でビールを取りに行つた。勿論私自身は何も変なことをするつもりは最初から無いが、それ以上に目の前の資料に目が釘付けとなってしまった。並べられた数値……それは私にとって何て……何て魅惑的な値を示していることだろう。

やがて、缶のビールを、すぐにその辺の販売機で買つてくれて、机に置かれた。私はもう一つ、新たにシャーレを借りた。それは専用の蓋で閉めると、中を完全に密閉出来る、完全気密性の特殊なシャーレだつた。そこに粉を一摘要み、取つて置いた。

そして、中へ静かにビールを注いでいった。途端に濃密な甘い香りを漂わせて、混ざり合つた中から白い煙が上がりってきた。

『蓋を!』

私は素早く、横に準備しておいた蓋を取つて被せた。透明のシャーレの中で、絶えず煙が湧いてきて、中は真っ白になつて何も見えなくなつた。

『だ、大丈夫ですか?』

『ええ、この煙は予想通りです。それより、この煙の検査をさせて下さい。機材を貸して頂けませんか』

『それは出来ない!』

真つ先に返事をしたのは、見張りの男だつた。

『機材のある部屋は完全な機密箇所だ』

『いや』

その荒げた声を制したのは、ナタールだつた。

『今いるこの部屋でしたら、構いませんよ。この部屋に機材を持ち込みましょ!』

『ありがとうございます』

そして指図されて、渋々ながら見張りの男が、立ち入り禁止の部屋から機材を運んできた。

さて久しぶりに学生の頃に戻つた気分だつた。一緒に借りた、白

衣にマスクに手袋を身につけて、シャーレを手に取った。そつと、機械中央の、透明のケースの中に置いて、ケースの蓋を閉じた。ケースの両脇に開けられた丸い穴と、抗薬品仕様になっている手袋の腕の輪の部分とが、ソックリ沿って繋げられていて、ケースの内側の壁にくつ付くようにして手袋が入っている。中に手を差し込めば、ケースの蓋を開けずに、中の物に触れられる仕組みとなっている、検査用の特殊なケースだ。私は手を突っ込んで、ソッと中のシャーレの蓋を開けて、煙をケース内に開放した。そして、装置のスイッチを押すと、ケース下に開いている穴から煙が吸い取られ、機械内の管を通つて、試験用の缶の中へと送られていく。この缶の中で実際の成分分析が行われていく……。

三時間後、外はすっかり暗くなつていたようだつた。私は調べた結果をまとめて書いた資料を掴んで、ジッと見つめていた。

『クツ……』

ため息じゃない、しかし何とも苦々しい空気が、かすかな笑い声と混じつて、変な声を上げた。

『ハハハッ……なるほど、なるほど、これは、驚きだ。……ゾーグ
め』

『ジーニーズさん、どうしたんですか。教えて下さい…』

私は段々と頭痛を感じ始めていた。その痛みを抑えるように資料で頭を隠すように、腕を上から覆つた。

『恐ろしい、恐ろしい、私は何て愚かで、幼かつたのだろう。これは神よりの私への天罰なのか。何という偶然だ』

『ジーニーズさん！』

私は手を退けて勢い良く顔を上げて、ナタールを見た。ナタールは驚きたじろいだが、すぐ背中は壁があるわけで、動くに動けない。私はソツと彼の顔に、自分の顔をくつ付くほどに近づけた。

『ナタールさん、これは間違ひ無く、夢の植物です。ほぼ限り無く完全に近い、しかしその代償も残しているが、しかしこれこそ……

これこそ……アアまるで幻を見ているような気持ちだが、しかしこれは幻ではない!』

そして、無音。凍つたような部屋の空氣。そして、それ以上に冷たく鋭い目つきのナタールの顔。

『ジーニーズさん』

厳しい目つきで、私を見下すように……彼は立ち上がって言った。

『血らなじみのことが、分かっていますか。あなたは、あの少年をボロボロにしたこの花のことを、肯定するおつもりなのでしょうか』

『肯定……そりじゃありません、すみません、熱くなり過ぎました』私は両手を重ねて指を絡め、それを見つめながら落ち着いて語つた。

『すみません、ナタールさん。説明します、ちゃんと説明します』ナタールは唇を硬くしめて、腕を組んで、真っ直ぐ私を睨み付けていた。

『ナタールさん、このお話は、私の幼少の頃のことから順に説明しないといけません。が、重要な点だけを重点に、出来るだけ簡潔にお話します。はつきり仰つておきたいのは、私はこの金花の存在を、消してしまうことを考えています。その私の思いを『ご理解頂いた上で、これからのお話を聞いて頂けませんか』

ナタールは黙つて頷いた。私はフウ……と、覚悟を決める意味も含めて、落ち着いて息を吐いた。

『私は、幼少の頃から先天性の肺の病を患っていました。呼吸困難になることはしばしばで、物心付いた時から、一度も体を起こしたことがない……毎日が寝床の上でした。

そんな私が、今はこうして世界を旅出来るようになったのは、あるお医者様のおかげなんです。彼女は……非常に若い医者でしたが、その深い医学に関する知識と技術には……今、多少の医術を知った自分にはよく分かります。本当に素晴らしい方でした。

実は私の病気は、当時はまだ治療法が確立されていない、いわゆる“不治の病”でした。先天性で患つた子は、一年も持たない病気を、生まれたばかりの私にあの方が手を差し伸べて下さいまして、一年、また一年と長く生き残らせさせて頂き、そしてついに五歳の時に、完全に完治させて下さったのです。彼女の治療法は、辛抱強い、薬物による方法でした。彼女は世界中を旅して回つて、ありとあらゆる薬や薬草やらを見つけてきては、それを配合することによつて新たな薬を作り出し、私に飲ませていきました。これは大きな国であれば、いわゆる人体実験として違法行為に当たるものですが、私の生まれた国はとても貧しい何も無い田舎……そんな法律などありませんでした。ただ私のために懸命に治療を施して下さり、不治の病と奮闘して下さるのです。そして彼女のおかげで、実際にこう

して完全に回復したのです！

……そして私の完治後、彼女はまた新たな患者のために、旅立つていきました。幼かつた私は、ただ別れの際に、ありがとうございますと、お礼の言葉を言つだけ……。彼女は今の私のように、世界中を放浪しながら患者のもとへと旅立つていく方でしたから、それからの消息は全く分からなくなりました。しかし、その小さな頃の気持ちは、成長して大きくなつても忘れることなく、やがていつしか彼女のような医者になりたいと思つたのです。

そしてやがて青年となつた歳に、私は一人田舎を旅立つて、この国、この街へとやつてきました。医術を学ぶなら、この国しかないと思っていました。しかし、先に言つたように、私の田舎はとても貧しく、医学を学びに学校に入ろうにも、お金が全くありません。そこで、まずこの街で仕事を始めて、お金を貯めはじめました。住み込みで、無駄な物は一切買わず、食事も出来る限り慎んで、切り詰めて貯め続けました。数年頑張つて、やがて貯金もある程度貯まつたので、仕事を続けながらですが、ついに学校に入学することが出来ました。

それから一年間は、生活も安定して、仕事も学業も順調にいっていました。しかし、ある日、その私の生活を一変する出来事が起きたのです。幼い頃に大変お世話になつたあのお医者様が、変わり果てた姿で、再び出会うことになったのです。

はじめは小さな噂話で聞き、私の通つていた学校の付属病院に、一人の重症の患者が入院されたということでした。当時の医術で治療不能の難病で、あらゆる病院を回されていくうちに、この国でも有数の設備や医者、研究者の揃つココに送られたと。不治の病による苦しみは、私自身骨身に沁みるほど分かりますし、気になつて付属病院の方へと寄つてみたのです。

そしてそこで見た彼女は、私の古いおぼろげな記憶と比べても、あまりにボロボロで変わり果てていました。病氣の影響で、顔の頬

や体が痩せ細り、まるで枯れ木のような手足でした。私の幼いかすかな記憶では、あの人は女人の人といえど、体つきは大きく物凄くたくましい人で、立派な腕を自慢げに上げて、力こぶを作つて私に見せたりしてくれていました。しかし、目の前の彼女は、その記憶の影とはまるで違う……別人かと思つたほどだったのです。詳しい病気のことは……彼女のことを考え、伏せさせて下さい。とにかくようやく再会出来たというのに、そんな彼女の姿を見て、がく然としました。彼女ほどの優れた医者が、病に臥して、治せないでいる。それは何か夢か間違いじゃないかと思いましたが、決して覚めることは無いのです。彼女と面会して、彼女は私のことを覚えていて下さいました。元気そうで良かつたと。私は、何も喋れず、ただ抑え切れぬ涙を流すばかりでした。

しかし、心の中では段々と、ある決意が湧き上がってきたのです。その思いは確固たるものへとなりました。彼女を治したい。私が、彼女を治すと。

といつても当時の私はただの医学生です。正式な医者にさえなっていない身、知識も技術も未熟以下で、何が出来るだらうと悩みました。しかし、彼女の寿命は、もつて数年と言われていました。時間が無かつたのです。

私は学校に入学する前から、独学で多少医学を勉強していました。そして同級の友に、ユ・ゾークという天才がいました。私は彼にこのことを相談しました。彼はこの話に深く興味を持つてくれたらしく、まず一緒に彼女の病室へまた出向きました。その時の彼女は、昏睡状態で、とりあえず彼女の血液のサンプルを頂き、そして病院の彼女の担当医に頭を下げて、彼女に関する資料のコピーを譲つて頂きました。普通は貰えないのですが、私の幼い頃の話を話して、無理矢理口説き落としました。また、当時学校で教授らにも一日を置かれていたゾークが一緒にいたのも、多少意味があつたのかもしれません。とにかく資料を持ち帰り、入念に調べました。そしてゾー

ークと二人になつて、二人の薬学の知識を精一杯出し合つて、あらゆる薬物治療の方法を考えました。そして、コレはと思う薬を開発するのに、一年をかけて作り出したのです。

あの時の病院の治療方針は、もうほんぢサジを投げているような状態で、ひたすら延命治療を施していくというのは分かつていました。しかし、そのような治療をジッと眺めているのは私には我慢出来なかつた。私はゾークと共同開発した薬を持って、担当医に談判しました。本当に若い、青い話です。私は興奮し過ぎて、こう告げたのです。彼女の治療を、自分たちが引き継ぎたい、ゾークと共に開発した薬を試したいと。担当医の方は烈火の如く怒りまして、私たちを責め立てました。医学生の、医術の何も分かつていらない分際で、出過ぎた真似をするなど。不幸になるのは、わけの分からない薬を試されて苦しむ患者の方だと。

しかし、私はその言葉に納得いかなかつた。医学というのは、何百年という人の歴史の積み重ねによる、いわば人知の結晶といえる技術。そして、新たな病が発見される毎に、新たな治療法、手段が研究されて、それが試されてきた。彼女が現時点での医学の限界を超えた病であり、それを治すためには、更なる挑戦が必要だつた。それは、かつて彼女が私に対して施して下さつたことだ。それに、その頃の彼女の状態は悪化を辿るばかりで、もはや一刻の猶予も無い状態だつた。放つておけば、彼女は必ず死んでしまう。

だから、私はある夜に病院に忍び込んで、彼女の病室へと向いました。そして幸運に彼女の意識があつたので、少しお話することが出来ました。自分を治して下さつた時のこと、今の自分の現状、そして今からしようとする事。彼女の体の負担になるので、かいつまんで、一方的に私が話し掛けたが、彼女は静かに頷いて賛同して下さつた。一緒に戦うことを誓い合つたのです。そして、彼女を連れて、病院を脱出しました。

三人は、あらかじめ用意しておいた、安アパートの一室に向いま

した。部屋を清潔に掃除して、この日のために購入したベッドに彼女を寝かして、そしてゾークと私一人で、彼女の病気との奮闘が始まりました。

慎重に薬の投与を続け、ひと月ばかりは順調に経過していました。彼女の体に巣くつた病魔は少しづつ力を弱めていきました。この時ほど嬉しいことはありませんでした。私の力が……いえゾークというたくましい味方がいたからですね、幼く未熟な頭を一杯に回転させて生み出した薬が、目の前で確かな効果をあらわしているこの嬉しさは！

救える、この人を絶対に救えると思いました。

しかし、それから一週間後……とんでもないことが分かつたのです。彼女の病魔が、首から下の体だけだと思っていたのですが、彼女の脳にも侵入していたことが分かつたのです。やがてその症状が表にあらわれてきて、彼女の体がケイレンはじめました。慌てて私たちは、彼女が怪我をしないようにと体を押さえつけました。

私たちは混乱し、暫くお互に言葉をぶつけるように激しく言い合いました。やはり無謀なことだったのか、恥も外聞も捨てて病院に帰るべきだ。いや、ここまで来て逃げられない、新たな治療法を考えて何としても救うんだ。……そうしている内にも、彼女の病状は刻々と悪くなっていくのに、愚かで、幼過ぎた、あの頃の自分の姿を思い出すのが、とても辛い。

不毛な言い争いが続き、どれだけ時間が経ったか、ゾークの強い言葉に圧倒されて、ふと視線が泳いだ時に見た、死神に魅入られた彼女の姿……時間が、無い。私は、無理矢理話し合いを中断させて、ゾークに、一度落ち着いてコーヒーを飲もうとすすめました。コーヒーには、睡眠薬を仕込みました。ゾークは数口飲み、そして気を失わせた後、私は彼の家へと運びました。強引でしたが、盛った量は数日間眠り続けるほどです。すぐにまた戻つて、私は一人で彼女の治療を続けました。

が、止まらない、治まらない。やがて彼女の体は、体重が普通の

半分を切り、……ハツキリ感じたのです。……彼女の死期が……もう、駄目だと。私は絶望し、ベッドの脇にもたれて頭を抱えました。彼女の姿を見ていられなかつたのです。

その時、目の端に映つたもの……突然彼女の手が微かに震え、ゆっくりと、ゆっくりと持ち上がりつていきました。人差し指を伸ばして、示した先、それは彼女の唯一の荷物である、馬の皮で出来た大きな肩さげ鞄でした。私は反射的に駆け寄つて、それを掴んで、彼女の目の前に持つていきました。中を開けて、彼女によく見えるようになりました。大きく開いた鞄の口に、彼女の手がゆっくりと飲み込まれていきました。そして再び抜き出された手には、埃にまみれた、一冊の痛んだ手帳でした。

私が両手で受けるように組んで差し出すと、ポトリと手帳が落とされました。小さな手帳でしたが、私にはその時不思議にとても重たく感じました。

彼女は何かを言おうと口を蠢かすのですが、既に喋る力も残されていません。私は、頷きました、何度も、何度も、彼女の音に成らない声を聞いて、頷きました。

それから数分後、彼女は新たな朝日を迎えず、息を引き取りました。

私は床にベタリと座り込んで、両足を前に放り出し、彼女のベッドに背中を預けて、放心で、目の前の窓を眺めていました。静か……あまりに静かで、私は、怖くなりました。怖ろしくて、落ち着かなく、暗い闇、暫くその暗闇の中を、さまようように視線を泳がせて……滑り落ち、手元の、彼女の手帳へと導かれました。

それは彼女が旅の間、ずっと肌身離さず持つていたもので、もう何十年も前の古いもののがでした。表紙にデザインされた、顔の大半を覆う大きな鼻を持った豚の印……それは十数年前に倒産した有名な文具会社の品でしたから。ただ表紙は半分以上破れていて、泥水にも浸かつたのでしょうか、茶色く変色していて酷いものでし

た。下手に力を加えたら、簡単にバラバラになってしまいそうな状態でした。

ソッと指先を立てて、慎重に、一枚一枚、めくつていきました。そこには彼女の足跡が、ノートの紙一枚一枚の隅々まで、ビッシリと綴られていました。ある少年の闘病の記録。彼女の長い旅は、この少年と共にあつたんです。彼女は、各地に伝えられる秘薬や治療法を学ぶために、私財を投げ打つて、世界中を旅していました。その手帳の一部には、私のあの幼い頃の病気のことも一緒に書かれていました。もしかしたら、私の治療のことも、その少年の治療をするための勉強材料だったのかもしれません。

そして記録の最後には、こう書かれていました……あの子は真っ白い世界をさまよっている……本当に抱きしめられる温かさを知らずに……同じ夢の中をさまよい続けていた……と。結局、治すことが出来なかつたのでしきう。最後のページは、彼女自身、何度も見返したせいでしきう、手垢や汗で黒く汚れています。

いつたい、誰なんだろうと、私は思いました。

私は最後の文章を何度も見つめ、ふと時計の針を、窓の外の闇を見つめ、そして私は立ち上がりました。手帳を自分の上着の隠しにしまい、彼女の鞄を腕に掛けて、そして彼女の遺体を背中に担ぎました。夜の明けない真っ暗のうちにアパートを出て、街から飛び出したのです。

そしてこの街を流れる一番の大きな川へ行き、彼女の体を焼きました。灰になつた彼女を、半分は川へ流し、半分は風に乗せて飛ばしました。彼女は生涯をかけて旅をしてきたので、死してもこのよう、川の流れ、そして風に乗つて自由に飛ばしてあげることが望みだと思いました。唯一、四角いサイコロのような骨だけが焼け残つたので、それは大切な宝物として、勝手ながら受け取りました。

そして私は、彼女の遺志を受け継いで、世界を旅しながら、各地

にいる病に苦しむ人たちを救っていく道を進んでいく決意をしたのです。彼女の、あの手帳の……少年のことを探しながら……。

旅は長く、どこにいるとも分からぬ少年を探す年月。
しかし、今、気付いたのです。この少年のことが……この少年は……

「…………」

ジーニーズは、静かに黙りました。そして、エウムの方をジッと見つめました。その目は本当に真摯な……何かを訴えるような、かな悲しみと、それとは反する希望の光とが交じり合った、複雑な色を持つていました。

エウムは、訊ねました。

「少年は……何ですか？」

「少年は、」

ジーニーズは畠々眠る、ウジカの髪を撫でました。

「この子……」

優しく、優しく、背中の金花を撫でました。

「なあ、エウム、この子は、何歳だと思つ?」

「エ?」

思わず質問で、目をまん丸開けて、ウジカを眺めました。

「あたしより少し下くらい……十何歳くらいでしょ?」

「この子はね、もう何百年も生きているんだよ。畠々と眠り続けて、意識の無いまま」

「意識つて……どうこうことですか。だって、私が色々話しかけると、ちゃんと返事をしてくれます。それはしっかりした言葉になつていないです……應えてくれます。それに、何百年も生きているつて……」

「この子はね……生きている子にこうこう言ふ方をするのは申し訳無いが許してくれ……一種の、金花の栽培のための媒介なんだよ。何故、あの金花の村で、この子が殺されたりもせず生かされていたと思う?　あの長老の、規律の厳しい世界で、どうして彼は病といふことで酷く疎まれていたが、それでも最終的な手段を取らなかつたと思つ?」

「…………」

ウジカが混乱して眉をひそめ、落ち着かなく体を揺らしている姿を見て、ジーニズは、話を続けることに辛さを感じていました。しかし、このことはどうしても彼女に伝えなければなりません。話を続けなければ、事は先に進まないのでした。

「ウジカははるか昔の数百年前に、ある方術を掛けられて、特殊な体へと変えられているんだ。かつてのあの金花の村というのは、あの花は単に観賞のためのものとして栽培され、各国に売られていた。それが、ある代の村の長老が、金花を変質させる術を発見した。それによつて、種や実に幻覚作用を持たせるようになつた。

それは、血と、熱と、光だ。エウムは氣付いていたかい？

ウジカの背中には、縦横に刃物で無数の傷が付けられている。丁度、格子状のように規則正しく刻まれた傷だよ。いや、見えないだろう。その傷の上は、金花が植えられているんだからね。彼は、背中を切り刻まれた。その時、噴き出た血は集められた。

そして、彼の背中に、金花の種を植えた。普通に野に咲いている金花だ。あの村の男たちは、他の国の男たちと同様、元々は背中に花など生えてやしなかった。その方術のために、ウジカの背中に種を植えたのが起りだつたんだ。種は無気味にも、彼の背中に根を生やし、可憐な花を咲かした。

そして、先ほど集めた血液を、太陽の光にさらす。難しいことは出来るだけ省くが、血液は通常、熱を加えると凝固するのだが、太陽光に含まれる紫外線が、ある一定量以上を超えて血液に浴びると、特殊な化学反応を起し、再び液状化する。血の色は赤色から、真っ白に変化する。丁度、乳のような真っ白い液体に。そしてそれを、ウジカに飲ませたんだ。

すると、ウジカの背中に植えた金花から生成されたエキスと、その真っ白い血とが混じり合い、反応、そしてウジカは大量の汗を搔き出す。汗といっても、それは霧のような目に見えない細かい水滴で、それが空気中に放散され、野に咲く金花の胚珠ハイシユに付き、金花の種が、幻覚作用を持つ種を作るようになる。胚珠は、成長して種子

になる部分だからね。変種が出来るわけだ。

薄々気付いているかもしないが、君の村の男たち……金花を背に持つた男たちは、皆、ウジカの子孫なんだ。ウジカを神の子と崇め、忠誠を誓った女に、ウジカの子をはらませた。彼の子供たちは皆、背に初めから金花を生やして誕生した」

エウムが、強い鋭い視線でジーニズを見ました。

「ウジカは、村の皆に疎まれていたんです」

「エウム、国や村の歴史というのはね、長い年月が経つにつれて、そこに住む人々の記憶や伝承が次第に薄れていって、自國のことであっても分からなくなっていく謎というのが出来てしまうんだよ。あの村の人間でも、金花のこと……どうして発祥したかということを真実を知っている人が、一人一人、亡くなってしまったんだよ。唯一、最後までそのことを知っていたのが、現長老の父上様、つまり先代の長老様だったんだよ。しかし、エウムも知るように、先代の長老様は、村外への行商の折に、同村の女によつて“食い殺され”てしまつたから、まだ幼くして今の長老が任に就いた。先代は誰にもその事實を知らせずに亡くなつてしまつたから、もうあの村にそのことを知る人は誰もいなくなつてしまつた。ウジカのことはただ、『邪魔な存在』としか思われず、疎まれるようになつた」

ジーニズは、眠るウジカの顔を見下ろしました。
「おそらくは今、君の故郷の村では、相当な混乱が起きているに違いない」

「どういうことですか？」

「このウジカは、金花の媒介なんだ。彼の発する“汗”が、金花に付着し、胚珠を変質させる。……つまり、ウジカがいなければ、育つ金花は、ただの美しい花。

私が金花のことを調べに、故郷に帰つた時には、既に金花の流入がおかしくなつていたといつう。君がウジカを連れて村を脱出したから、金花がただの花となり、売り物としての価値が無くなつた。幻覚を持つ金花の産出が、あの村の大切な生命線であつて、それが無

くなれば、今頃てんやわんやの大騒動だらつ

ジーニーズは口をつぐみ、暫く沈黙が訪れました。

「あたし……村に戻りたい」

「エウムが、寂しそうにポツリと呟きました。

「お父さん、どうしてるかな。それに、長老様……」

ジーニーズはバツが悪そうに、自身の髪を搔きました。

「すまないね……エウム、君の、故郷の悪口を言つてしまつた」

「……ジーニーズさんは、あたしたちの村を憎んでいるんですか？」

悲痛な、今にも崩れそうな切ない顔で、エウムは真っ直ぐ、そう訊ねました。

「……色々話が飛ぶが、私の幼少の頃の病を治してくれた、お医者様、彼女が必死になつて治そうとしていたのは、ウジカなんだ。彼女の手帳に書かれていること……そこには金花のこと……輝ける花のこと、そして少年の病状の様子や、あらゆる治療法の研究が克明に記されていた。どういうきっかけで彼女がウジカのことを知ったかは分からぬけど、彼女が望んだこと……ウジカの目を覚ませ、そして金花をこの世から消すことを望んでいた。私は、彼女の意志を受け継ぎたい。それは……彼女を死に至らしめた病を、私が治せなかつた罪滅ぼしの意味もある。もし私が彼女を治せていたら……彼女はその後も研究し続け、いづれはウジカを治してしまつていたかもしれない。私は、彼女の遺志を繼がねばならないんだ」

「ウジカは、」

エウムはベッドに近付き、彼の髪を撫でてあげました。

「ウジカは、村で、ずっと独りぼっちでした。あたしも、独りでいることが多くて、この子の辛さが分かる気がするんです。だって、この子は、自分の力で喋つたり、動いたり出来ない。それは、私よりずっと辛いだろうつて……。だから、」

エウムは、ジーニーズの方に、切実な、真剣な顔を向けました。

「ジーニーズさん、ウジカ、治りますか？ 元気に、自由に、動ける

ようになりますか？」

ジーニーズは、内心、戸惑つてしましました。勿論、はつきりと「治せる」と言いたい……けど、そう断言することに抵抗を感じました。かつて、必ず治すと心に誓つて、死なせてしまったお医者様……あの記憶を思い出してしまったのです。が、しかし、それでも、「ああ、治すよ。彼はまた、夢から覚めて、真っ直ぐな目で、エウムを見つめ返す。そのために私は、お医者様の手帳を……遺志を受け継ぎ、そして長く旅をして世界を見てきたんだ。こうして、私と君たち一人と出会えたことは、けつして奇遇でも偶然じゃない」そして、二人は眠るウジカを見つめました。エウムは希望を、ジーニーズは勇気を、それぞれの手の中に握つて。

「ところで、お話にあった、保安所の療養所の子は、どうなったんですか？」

エウムがふと気になっていたことを、ジーニーズに訊ねました。

「ああ、生きている……はずだよ。というのは実は、久しくあの街に行つてない。あの後、ナタールに話をした後、私はさらなる金花の研究のために、再び旅を始めた。ナタールに『この子を救つてみせる』と約束をしてね。ナタールは、私を信頼してくれた。『次に会う時までには、必ずゾーク氏と面会出来るように、こちらとしても手を打つておく』と約束してくれた。彼との“約束”も、守らなければいけない」

「あの……それで……私を、その国へ、その子に会わせて頂けませんか？」

エウムは両手をお腹の前辺りで重ねて、祈るような格好でジーンズを見上げました。

「私は幼過ぎて、何も知りませんでした。金花とは一体何なのか。そして、世界とは何なのか。私に、教えて下さい」

「ああ、そうか。教えて下さいなんて大げさだよ……私だって、何も分からぬ。だからこそ、旅をしてきた。

それに……ウン、そうだね。またあの街に行く頃合いかも知れない。本当は、出来たら、君の生まれ故郷に行きたいと思っているんだ

だ

「え？」

「私からもお願ひしたい。君に、力を貸して欲しい。やはり、金花の起こうり……輝くあの村に、私は行くべきだと思うんだ。そして、真実を知つて……金花というものが存在する本当の意味を知つて、そしてより良い方向へと物事が動いていくように、私たちは働き掛けなければならない」

そして、ジーニーズは手を差し出しました。

「信頼の証だよ」

エウムも、お互に一コリと微笑み合い、優しく、力強く、握手を交わしました。

「まずは、少年のいる街へ行こう。実は、彼らを治療する……そのヒントを手に入れたんだ。それで、少年を回復させる。そして、金色の村へ。今度は、恐れない、逃げない。真っ直ぐに、真実を全て見よう」

「ハイ」

ジーニーズはスクッと立ち上がり、服の裾をはためかせて動き出しました。

「さあ、そうと決まれば、早速準備をしよう。無駄に時間を過ごしている余裕はないね」

「あの、ジーニーズさん」

エウムが慌てた様子で呼び止めました。

「ン?」

「先ほどの話で……金花から出た白い煙の成分を調べていた時に……ゾークめ……と。あれは、一体どういつ……意味なんでしょうか」振り向いたジーニーズの表情がそのまま止まり、彼は半歩後ろに下がりました。丁度、彼の顔の上に、横のタンスの影が重なり合いました。

「ゾークさんが逮捕されたのは、金花の研究に関してでしたが、やはり……。あ、あと“夢の植物”というのは一体……」

「ゾークはね、昔から……学校に入学する前からしていた“研究”があつたんだ。ホラ……彼は眞の天才だつたからね、自宅の研究室で、若い頃から独りで研究をしていて……」

ジーニーズはまた、半歩前に出て、影から顔を出しました。無表情な、平面な顔付きです。

「その研究資料を、一度見せてもらつたことがあるんだが……まあ

「うう覚えでね……数値などほとんど正確に覚えていないんだけど……ね……その……金花の資料を見せてもらつて……あまりに値が似ていたから……ちょっと、ちょっとビックリしたんだよ」

ジーニーズは右手で頭の後ろを搔きつつ、コラリと、右手を挿むよう、タンスにもたれかかりました。

「ゾークは、夢幻の旅人だった。よく言つていた、『時の流れにより、肉体は朽ちても、魂は風となり、いつまでも、どこまでも世界を旅している。彼らは皆、それぞれが一つであり、そこには個は無く、意識は溶け込み、混じり合つて』と、ね。彼は、自身の研究の力によつて、魂を肉体から離脱させ、風の中に存在するという魂たちと交信する……というようなことを、よく言つていた。私は、それは彼の口癖だと思って、いつも軽く聞き流していた……。まるで、その彼の研究資料の値と似ていたから、ふと言葉が漏れたんだよ」

ジーニーズはいたつて真面目な表情で、エウムにそつと言つました。対する聞いていたエウムも、真面目で真剣な表情で、言葉を返しました。

「あたしは、村の儀式を受けた時に、夢のよつな世界で、母と会いました。母は、私が小さい頃に死んでしまつたので……また会えたのがとても嬉しかつたです」

「私も、夢か現か、死んだ母親に会つたことがあるんだ。私に『やるべきことがある』と言つて励ましてくれて……」

「……」

「……まあ、そのことはともかく……」

ジーニーズは窓の外の、吹く風に舞う砂を眺めました。

「……あの街に行けば、分かることだね。ゾークのこと、少年のこと、金花のこと、全部……」

「……ハイ」

(〔第二節〕」)、次回よつ〔第四節〕(<)

45：【第四節】甘い香り

列車はゆっくりと速度を落としていつてホームに滑り込み、ガタリと大きなひと揺れを起して停車しました。そして、ジーニーズとエウム、そしてエウムに押されて出てきた、車椅子に座っている、目を閉じたウジカ。

「ジーニーズさん」

「大丈夫。必ず、目を覚まさせてあげる。そのためにも、ここに来ただからね」

ウジカは相変わらず眠り続けていました。上半身を裸にして、格好は窮屈ですが、背中を背もたれにはくつ付けないように、前屈みにして座らせていました。少しでも背中の花に太陽の光を当てておくるためです。

ジーニーズには、彼を救う手段として、ある考えが思い付いていました。しかし、それは“あること”を調べてからじやなければ、断言することが出来ませんでした。まだ……机上の空論となってしまふので、エウムには黙っていました。

「大丈夫。あの村の男はヤワじやない。とにかく、まず少年のいる、療養所へ行こう。すぐ隣に保安庁もあるから、ナタールにも会えるだろうし……。じつちだよ」

「君は……特にウジカを連れて入るのはまずい。待つてて」

保安庁の前で、エウムにそう言つて二人を置いて、ジーニーズは足早に保安庁の建物の中へ入つていきました。入り口横の、受付には面長の背のとても高い男がいて、彼にいきさつを話しました。

「ナ……死ん、だ？」

「ええ。ずっと入院していたんですが、完全な植物人間の状態でしたので。少年に身寄りは無かつたですし。医師の判断で、数ヶ月前

に安死術が施されたのです」

「馬鹿な！ 私は任されていたんですよ！ 少年の治療を、ナタール氏に！」

「ああ……そのナタール氏ですが、彼は逮捕されました。息子さんが金花の売買に加担していたということが分かりまして、連座制の適用で……。父親であり、ましてや彼は、保安官という立場であつたわけですからね。

あと、あなたは……ジーニズさんですよね。今回の処置に関する件を、ナタール氏にお願いされて、連絡を電文でお送りしたはずですが、お受けにならなかつたのですか？」

「…………」
ジーニズはたまらなくて、喉が詰まり言葉が出ず、ガクリと首を垂れて足元を睨み付けました。電文など受け取つていません。何らかの手違いか、それとも何か……。

ジーニズは、気を取り直して、強い視線で男を見返しました。

「それで、ナタール氏はどうなつたんですか？ 息子さんは？」
「ナタール氏は収監されますよ。息子も同じく。息子の方は、路上で、婦女暴行の容疑での逮捕です。かなり酷く金花を飲んでいたようで、錯乱状態だつたようですね。

それと当たり前ですが、ナタール氏に会うのは出来ませんよ。あなたとは御友人と伺っていますが。今回のこの事件は国にとつて非常に重大な件ですから、面会は誰とも出来ません」

「何か、私に言伝は無いですか？」

「いえ、何も」

「…………そ、ですか」

ジーニズは衝撃を抑え切れず、フラリと腰が砕けて倒れそうになるのを何とか踏み止まって、そしてきびすを返して、エウムの元に戻りました。

「エウム……すまない……」

立つ瀬が無くて、俯き加減で近付いて、ソッと頭を上げました。エウムは、どこか明後日の方向を向いて、上の空の様子で呆然としています。

「エウム」

「……あ」

エウムは恥ずかしそうに俯いて、可愛らしく照れ笑いしました。

「あの、どうでした？」

「…………」

ジー二ズは先ほどのことを全て正直に話しました。

「本当にすまない……私はこの街に他に知り合いなどいないし、少年とも、ゾークとも、どうにも連絡手段がない」

「そんな……亡くなられてたなんて」

エウムはそう呟き、ガックリと肩を落として、しゃがみ込みました。車椅子にもたれかかり、かろうじて倒れないように支えているようでした。

ジー二ズはエウムの青白い顔を見て、悔しくて舌打ちしました。そして、力強い声を上げて、

「もう一度、行ってくる」

ジー二ズは、エウムを励ます気持ちを込めて言いました。

「すうすう引き下がって入られない。仮にもナタール氏とは色々親密にさせてもらっていた。私だって、この件の関係者なんだ。エウム、ちょっと待っててくれ。また行って、話を付けてくるから」

「ア……あのッ」

そしてジー二ズは、駆け足でまた保安庁の建物の中へと入ってしまいました。

……エウムは、言おう言おうと思っていた言葉を、伝えるきっかけを失って、歯がゆくて指先を擦り合わせました。困った顔で、さつき呆けて見つめていた方向を再び向きました。彼女の心の動揺は、もう一つ……別の意味も含まれていました。

ハウムの小さな鼻が、ピクリ、ピクリと動きました。香り……先ほどから、どこからか漂つてくる、甘い、気持ちがとろけるような、ネットリした芳香。その香りは、この街にはじめて降り立った、列車を降りた時から既に感じていました。しかしその時は、大きな街特有の濁つた臭いと混じつていて、何となく気にならなかったが、先を行くジーニズを追つて、気にしないようにしていました。

しかし、こうして一人（眠るウジカはいますが）になって、ボーッと街の景色を眺めていると、またあの香りのことを思い出して、鼻を鳴らしているうちに……こつしか夢中になつていて自分に気が付きました。

「（……これは……）」

それは、どこか……懐かしいような……そんな香り。

「（……でも……）」

どいか……不思議な感じのする香り。

「（一体……どこから？）」

ハウムの心は、少年の死の事実によつて、強い動搖を受けました。心の焦点が定まらず、どうしたらいいのか……整理がつかず、フランフランと酩酊したように参つてしましました。そんな弱つた心に、不意に芳しい香りが、隙間を埋めるように入り込み、彼女の心をさらに“かく乱”させました。

ハウムは無意識にウジカの車椅子の取つ手を掴み、フランフランと……その香りに惹き付けられるように……見知らぬ道を進み始めました。

右に、左に、迷路のような街路を、たまよつとうに進んでいくハウムとウジカ……ただ匂いのより強まっていく方向だけを目指して、この角か、あの角か、自分の鼻だけを頼りに。しかし、それが思うより迷い無く、スルスルと、自分で不思議なくらい道が“分かる”のでした。

「（この、凄く、濃くて、甘くて、優しい香り……）」

それは、エウムのよく知つてゐる金花の香りとは、少し違つてい
るようなのでした。

「（似てゐるけど……）」

村で摘んで飲んでいたものより、もつと……濃い、甘い。より不
思議で、より魅惑的な濃密な香りに、エウムの心はすっかり囚われ
てしまつて、いつしか自然と早足氣味に、ガラガラと派手に車椅子
の車輪を鳴らしながら、一心不乱に突き進んでいきました。

やがてたどりついた先は、一軒の古い木造の家の前でした。柱が斜めに湾曲し、壁には亀裂が入り、その上に、壁一面にツタのような長い植物が這うように生えている、ボロボロの家でした。ツタは、干からびた土地に、長年生えていたらしいが、一部が枯れてさえいます。

エウムは、ゴクリと唾を飲み込んで、正面の入り口……扉が朽ちて無くなつた、家の玄関の穴の向こうを覗き見ました。穴の先は全くの暗闇で、まるで光を中に寄せ付けない洞穴か何かのようだ、無気味な四角い穴でした。しかし、その中の闇の奥の方に、四角い光が見えるのです。洞窟の入り口とは反対側にある、出口のような光……その幻のような光に、エウムの目は釘付けにされました。あの穴の向こう側に、何か未知なる世界が待つているようだ……そんな幻想をエウムは抱きました。まるで知らない未知の街へと来て、いつしかエウムは街を探索する冒険者のような気持ちになっていたのでした。

エウムはまた唾をひと飲み……そして足元のウジカの頭と金花を見て、一緒にその暗い穴の中へと入っていきました。

床のあちこちが相当痛んでいて、歩くたびに嫌な軋み音を立てます。フト油断したら、ウジカの車椅子の車輪が下に落ちて、はまつてしまいかねません。なるべく変な力は加えないよう、慎重に気を配つて、目の前の四角い光を目指します。周りの壁は、その光のおかげで、おぼろげながら何とか廊下の形は分かりました。

やがて、その先に到達しました。四角い光は、思ったとおり、部屋の中の扉の形がそのまま光っていたのでした。中の扉も朽ち果て無くなり、その前に幕のような物が、天井から吊るして張つてあります。しかし、この幕をよく見て、エウムは少し驚きました。

小さい頃に母親から聞いた、光を通さない遮光の布だったのです。しかも目の前のものはかなり厚い布地で、ちょっとやそつとの光は完全に遮断してしまったのです。それが、暗闇の中とはいえ、輝くほど光つているところのは、この先によほど強く光を発する何かがあるということ。そして、おそらくその光を発しているのは……。

エウムは、ウジカの車椅子を少し横に退け、手を幕へと差し伸べていきました。

「ツ、熱い……」

熱い遮光幕は、もう少し熱が強ければ燃えてしまうのではないか……と、触った手が少し痛く感じるほどに、強く熱せられていました。かいていた手のひらの汗もすぐに乾いてしまうほど、そのまま強く握つて、恐る恐る、幕を開いていきました。隙間が少し開くと共に、細いわずかな間から、光が光線のように漏れ出しました。暗闇の廊下に射し込まれた、幾筋もの鋭い光……暗黒を鋭く駆け抜け、あつという間に入り口の先まで到達すると、廊下の様子がさらに明るく映りました。真っ直ぐ進んだ廊下は、途中には幾つか道の左右に穴が開いていました。その様子からして……ここはアパートか何かの後のように思えました。丁度歩いてきた所が中央の廊下で、左右の穴はそれぞれの部屋の入り口でしょうか。そういうえば廊下は随分と縦長でした。そして、その廊下の先に、一つの大きな部屋。輝く光の部屋。

エウムは、幕の残りを、一気に横に引きました。途端に、パツと恐ろしいほどの真っ白い光が、エウムを一杯に包み込みました。それは常人なら、瞬時に目が潰れてしまうほどの激しい刺々しい光でしたが、生まれた時から金花の咲き誇る光の村に住んでいるエウムには、本来は……さほどのものでもありませんでした。が、しかし、村から離れて久しい今の彼女にとっては、かなり辛いほどの眩しさで、思わず手をかざして目を覆いました。やがて、ただ白いだけだった世界に、エウムの目も慣れてきて、少しずつ辺りの様子が見え

てきました。エウムは掲げた手を、ゆっくりと下げました。

そこは、まさに“光の園”ともいづべき世界でした。朽ち果てた壁や梁の只中に、一面に咲き誇る金花畠。花は壁やタンスの木などを突き破り、侵食するように生えていました。家の中に、あの懐かしい金花の畠が、自然のように育っているのです。既に家の元の形は失いかけ、壊れ、そこには生命の原野が形成されていました。

とりわけ目を引いたのは、その原野の中央に咲く、何本かの、長い、太い金花です。それらは周りのものより背が高く、天に向って突くように（天井も壊れ一部に穴が開いています）、立派に咲き誇っています。よく見れば、その辺りの地面が少し盛り上がっているように見受けられます。

辺りには、濃密な香りが立ち込めています。そして、中央のその金花からは、その香りを一層強く漂わせているようなのです。

ヒウムの目は、もうすっかり光の明るさに慣れました。そして、ウジカは入り口の外に置いたまま……彼女はすっかりウジカのこと忘れてしまつていました……中へと歩き始めました。背の低い小さな金花を踏みしめて、中央へと、どこか吸い寄せられるようにな付いていきました。そして……あと数歩といつとじりまで近付いて、エウムは……ハツと、手を口元に当てました。

「うん、」ツバキ、 わん……？
エウムはしゃがみこみ、盛り上がりの土をなぐるように手を当てました。半分が土となりかけていたそれは、元の姿をほとんど残していませんでしたが、エウムは直感的に彼だと悟りました。

エウムは驚きと共に、反射的に両手で、口と鼻を塞ぎました。林檎腹の背の花からの強烈な匂いに、むせそうになつたのです。彼の花は、死しても、その肉体が土と変わり、本物の土と混じり、スクスクと育ち続けていたのです。丁度、彼の倒れた真上の天井の穴から、神々しく射す太陽の光が、彼の金花の成長を鼓舞するかのよう

に光が当たっています。そしてその光が、金花の花びらに当たつて反射し、辺りの金花も反射させ、恐ろしい勢いで光が渦巻いているのです。

「ロングッパラさん、」

突然、ガタリと何かが崩れるような音がして、エウムは驚いて顔を上げました。辺りを窺つて、林檎腹のいる奥……そこには元は何か棚と思しき大きな木の箱が、やはりボロボロに崩れて倒れています。その後ろに……何かがいるような気配を感じました。

エウムはソロソロと、膝をついて背を低くして、その木箱へと、忍び足で寄つて行きました。そして、恩々……その後ろを上から覗き込んでみました。

「…………ア…………ウ…………」

そこには……そこには、小さな小さな裸の赤ん坊が……半ば土に埋もれるよつに、泥だらけになつて蠢いていました。

「…………ア…………」

赤ん坊の口元が、モゴモゴと動いています。……土を口に含んで、噛んでいるのでした。

「アアツ」

エウムはとつさに手を伸ばして、赤ん坊の体を抱き上げました。赤ん坊はその間に、口の中の土を飲み込んでしまいました。エウムは少し驚いて慌ててしましましたが、ふと、そういえばと、幼き頃の長老様のお話を思い出しました。肥沃な、元気な土は、食べてみれば分かる、良い土は美味しいのだと。

エウムは、しゃがみ込んで、ソツと……赤ん坊がいた辺りの土を、ひと摘み取つて、恐る恐る舌の上にのせてみました。そして、ひと飲み。

「…………」

もつひとつ摘み……今度はさつきの一倍くらい取つて、今度は少し噛んでみて食べました。美味しいです。

「（この子は……この土を食べて生き長らえたのかしら）」

エウムは腕の中の赤ん坊を見つめました。フウと息を吹きかけて、顔に付いた土をはらつてあげました。赤ん坊は眠っているのか、目をつむつて、口をモゴモゴ小さく動かしています。

そして、林檎腹の方を眺めました。

「（……）」は一体……？」「

ジーニーズは息を切らして、街のあちこちを駆けずり回っていました。大通りに差し掛かり、保安隊の派出所を見つけると、入り口の前に立番している保安員に訊ねました。

「車椅子をひいた女の子を見かけなかつたですか、私の連れでして……」

「いえ……行方不明ですか？」

「ええ。車椅子には男の子が眠っています。」

「私は一時間ほどこうして立つてますが、その間に車椅子をひいた子は見かけてないですね」

「そうですか」

「……何でしたら、捜索願を出しますか？」

「いえ、そんな大げさなことじゃないので。それでは、失礼詳しいこととなるとウジカのことも説明しなくてはなりません。それは出来れば避けたいことでした。ジーニーズは頭を下げて、また街の中を走り出しました。

あちこち回つているうちに、段々と人通りの少ない道へと出てきました。通行人のまばらな、静かな裏通りを、コツコツと硬い足音を立てて、幾度か角を曲がった時、

「ジーニーズさん」

ハツと気付いて、ジーニーズは足を止めました。すぐ側に、泥だらけになつたエウムがいました。車椅子のウジカも、いまだ昏々と眠りながら側に連れられています。

「ゴメンナサイ、探してましたよね……夜になつてしまつて……」

「ああ……まあいいよ。……夜、ああ、もう夜か」

ジーニーズは顔を上に向け、立ち並ぶ建物の隙間に見える空を見上げました。ジーニーズのその目のせいで、辺りが暗くなっていることに気付かなかつたのですが、確かに、既にもう星の光が瞬いていま

した。

「どこにいったの？……エウム、それは、」
ジーニズが指差した先……エウムの腕の中に抱かれた赤ん坊、そ
の小さな子を、エウムは裾を少し上に捲り上げて、体を包み込んで
いました。

「よく分からんんです。けど、この子……」

「エウム、貸して」「らん」

エウムは赤ん坊を、ジーニズの腕の中に置きました。ジーニズは、
眠るその子の顔をジツと見つめました。

「この子は……」

「きっと……多分、林檎腹さんの子だと思います」

「まさか」

「いえ……さつき、ある家に行つてたんですが、そこにこの子がい
たんです。近くに……林檎腹さんが、」

「いたのか！？」

「……いえ、既に……亡くなられていきました」

「そう、か……」

「林檎腹さん、あの方の金の花が……輝いていました。とても美し
く、眩しいくらいに」

「……そうか」

ジーニズは顔を上げてエウムを見ました。

「……とにかく、この子が風邪を引いてしまった。とりあ
えず、今日はもう帰ろうか」

「ホテルに行くんですか？」

「……いや、私名義で買ったアパートがある。そこに行くよ
」

そして、赤ん坊を含め四人は、夜の冷たい街並みを歩いていきました。誰も黙つたまま……エウムは密かに、ジーニズの向うアパー
トが、どこなのだろうか、何となく想像出来ていました。

行く先は、さらには人の気配が薄れた、群立したアパート街の一角

で、一軒の小さなアパートの前で立ち止まりました。

「小さなアパートですまないね。庭に小さな倉庫があるから、私はそこで眠ることにする。君たち二人は仲の部屋で休んでね」

ジーニーズは深く息を吐いて、感慨深く目を細めて、そのアパートの外観を見渡しました。今にはやや珍しい、一階建ての背の低いアパート。年代の経過を物語る、シミのように、黒く汚れのアチコチ付いた……白い外壁。庭に大きな倉庫が付いて、当時格安に借りれたこのアパート。お医者様の亡くなられた場所。旅立つた後も、家賃は払い続けていて、ある時、管理人の人と掛け合つて、最終的には部屋を買ったのでした。

とりあえず皆、アパートの中へと入りました。鍵を開け、扉を開けると、ムワツと白い煙のような埃が溢れてくれました。

「ウワツ……凄い埃だ。何年ぶりだしなア……」

クスクスという小さな笑い声が聞こえました。

「少し、掃除しましようか」

「ああ、そうだね。雑巾で拭いて、サッと埃を取っちゃおうか」

「ハイ」

鞄などは扉の外の横に置いて、ジーニーズは庭の倉庫から雑巾を取り出してくださいました。そして一人で、手早く部屋を掃除しました。エウムは床に屈んで下を、ジーニーズはベッドや棚などの上方を、水に濡らした雑巾で拭いてきました。ベッドは一つあり、一つは二人用なので、エウムとウジカは一人用に、赤ん坊はもう一方に寝てもらうしかありません。一人は一気に、簡単に掃除を済ませました。ジーニーズはエウムの使っていた雑巾を受け取ると、彼女に言いました。

「さあ、エウムは先に寝てなさい。赤ん坊のことは私が見ておくから」

「そんな……あたしも見ています。だって、あたしがこの子を連れて来たんですもの」

「見るといつても、どんな具合かを調べるだけだから……先に休ん

でなさい」

「いえ、あたしも心配なんです」

「……そつか」

「……」

「……」

ジー二ズは赤ん坊をベッドに寝かせて、携帯の聴診器を当てたり、仔細に調べていきました。

ジー二ズは表向きは平静を何とか保とうとしていましたが、心中では、驚きで必死に考えをまとめていました。かつて、一度だけ金花の村に行つた時に、林檎腹に見せられた子供……その時の記憶を思い出すと、浮かび上がつてくる子供の姿は……確かに十歳ぐらいの少年だったはずです。しかし、ここにいる子は、赤ん坊の姿……。この子は、あの林檎腹に見せられた子とは別の子なのか……いや、顔にかすかに面影があるし、それにこの子には特徴的な茶色い三角形の大きなアザがお腹の辺りにあり、それが記憶の子と同一であることを、明らかに示していました。縮んでいる……！

「……ジー二ズさん」

「……なんだい」

「ジー二ズさんは、前にも一度この子を見たことがあるって言つてましたよね。……治りますか？」

「……」

「……どう、ですか」

「……エウム」

「ハ、ハイ……」

「この子の父親……林檎腹は、もう死んでいる……んだよね」

「ハ、イ……」

「クツ」

ジー二ズは悔しそうに唇を歪めて、やつぱりひの無い怒りを叩く

ように、拳で空を切りました。

「そして……この子の母親も死んでいる……クソッ」

「あ、あの」

ジーニズはエウムの肩を掴んで、彼女の目を真剣に見つめました。
「いいか、エウム。ちゃんと聞いてくれ。このこと……これから話すことは、ウジカのこととも関係していくことだ。とても大切な話だ。きちんと聞いてくれ」

エウムは少し圧倒され、思わずゴクリと音を立てて唾を飲み込みました。エウムは言葉が出ず、真剣に見つめ返し、頷きました。ジーニズは、ややあって、一つ一つ言葉を丁寧に選びながら、話していました。

「この子は今、大きく言つて、二つの症状に見舞われている。一つは感染症、もう一つは……金花によるもの。

この子を初めて診た時は、前者の方ははつきりと原因が分かつていたが、その感染症に効くワクチンは特殊なもので、手持ちには無かつたから、あの時に投与してあげることが出来なかつた。だが、今いるこの国……この街の病院なら、そのワクチンは必ずあるはずだ。

だが、もう一つの症状……それを治すには、この子の……血縁者が必要なんだ

「どういう、ことですか」

「……血だ。同じ一族の血を引く者の血液だ。それがあれば、何か助けられるかもしれない。それが、私の長年の研究と、お医者様が生涯を掛けての研究を合わせた結果の結論なんだ」

「血縁者……ということは、例えば、林檎腹さんのお父さんやお母さんでも、大丈夫なんですか？」

「ああ、特にこの子と、血の繋がりが近ければ祖父や祖母でも……親子などのように親等が近ければ近いほど、一層理想的だが」

「でしたら！ 林檎腹さんのご両親はまだ健在です！ 村に戻れば……それで協力して頂ければ……助かるんですね！？」

「そうだね、祖父、祖母……出来れば父方の方の血液を頂けたら、

きつと治せる。それが、唯一の……治療法……」

何故か、ジーニズの言葉尻が、穴の開いた風船のよつこ、急激に小さく萎み、調子が沈んでいったことに、エウムは変な感じを覚えました。その時、急にエウムの頭の中には……何か黒い雲が立ち込めてくるような……そんなモヤモヤした不安な気持ちが、膨れるよう広がっていきました。急速にエウムの心臓の音が、はつきりと分かるように音を立て始め、それがドンドンと、ひと鳴り毎に煩さを増してきました。最初にジーニズが、真剣な顔で「きちんと聞いてくれ」と「ウジカのこととも関係してること」と……。

「ジーニズ……さん」

エウムの動搖は隠しきれず、声が崩れそうなほどに震えていました。

ジーニズは、目を一回瞑りました。そしてまた、硬い眼差しで、エウムを見ました。

「……そうだ。ウジカと、この子の症状は、“ほとんど”同じものなんだ。だから、ウジカを治すためにも……彼の血縁者が、いる」「そんなの……そんなこと、無理じゃないですか！」

エウムは瞳を飛ばして、激しく激昂しました。顔を真っ赤にして、彼女はジーニズに駆け寄り、胸倉を掴んで、幾度も幾度も、ジーニズの胸を叩きました。

「ジーニズさんが言つてましたよね！　ウジカは何百年も生きているって！　もしそのことが本当なら、彼の両親が生きているはずがないわ！　それに！　それに……私も、彼の両親や……家族のことなんて知らない……」

エウムは涙で顔を汚し、力尽きたよつにズルズルと体を下ろしていました。

「ウジカ……ウジカ……」

「エウム」

ジーニズは、しゃがみ込み、彼女と田線を同じ高さに、話を続けました。彼の口調は落ち着いていました。

「エウム、落ち着いて、話を聞いてくれ。私は、ウジ力を治せる可能性があるからこそ、君に話をして、そして一緒に旅をするのを決めたんだ。だから……最後まで、簡単に諦めるようなことは言わないでほしい」

エウムは呆然とジーニーズの言葉を聞き、ハッと顔の涙を腕で乱暴に拭いました。

「じゃあ、どうやって、ウジカを治すんですか?」

ジー二ズは立ち上がり、そして扉の横に置いてある自分の鞄を取りました。そして、中から……大きな鼻の豚の絵の、あの手帳を取り出しました。

「この最後の方のページ……ここを見てجاらん」

エウムはジー二ズの横に並んで、その指差す所を覗きました。そこには……

……『月 日、ついに秘境の密林に入る。全く開拓の手が入っていない未知の世界、出口の無い迷宮へと入り込んでいくような気持ち。だけど、恐れてはいられない。万全の準備をして、突き進むのみ』……『月 日、いまだ森の中をさまようように進んでいく。少し、発熱している。風邪か、肺炎に近いような。一応、抗生素を飲んでおく』……『月 日、発熱に続き、下痢、全身に虚脱感。書くことも辛い。悔しいけれど、一度引き返すしかない』……

後ろの文章ほど、まともに筆を持つことが出来なかつたよつて、字がグシャグシャに歪んでいました。

「これは……」

「この“秘境の密林”というのは、この日記の前後の文章から推測して、ちょうど金花の村のある大陸から、南に海を渡つた先にある、古代の森なんだよ。この密林はまだろくに研究者や冒険者に足を踏み入れられていない、文字通りの秘境で、研究者の間ではここにいる原住民のことが昔から噂されているんだ。何百年、何千年も、現代の文明とは全く関わり無く、独自の文明を築いている人たちがいるという説。だが、あまりに濃く険しい自然のために、生きているものは、特に生命力の強い獣か、細菌などしかいないという人も多

い。人間が住むにはあまりに過酷な世界なんだ

「ハイ……」、エウムには、いまいち話が見えてきません。ジーニーズは、落ち着いて説明を続けます。

「大陸移動というのを知っているかい。今ある大陸は、今の形が昔からあるのではなく、長い年月をかけてゆっくり大地は動いていて、その結果が今日の大陸の形をしている。だが、かつては大地は一つの形を成していて、それが大陸移動によつて、陸地が分かれていつたという。そう、金花の村のある大地と、秘境の大地は、かつて太古は、ひと繋がりの陸地だつたという説があるんだ。その有史以前の時代に、そのひと繋がりの大地に住んでいた人間達は、大陸移動によつて、二つに分かれていつた。そこで考えられるのが……金花の村に住む人たちの先祖と、秘境に住む原住民（もし存在するとして）の先祖は、一つの大きな一族だつた可能性が考えられるんだ」「エッ……」

「そりなんだ、だからつままりは君たちの遠い祖先の生き別れが、この秘境の地に存在するかもしれないんだ」

興奮して前のめりになつて話すジーニーズに対して、エウムは冷静に、質問をしました。

「それは……それが確かだと見えるような証拠があるんですか？」
「勿論だよ。これを見てごらん」

そしてジーニーズは、また鞄から、今度は蓋でビックリ閉められた小さなガラスの小瓶を取り出して見せました。中には、何か白か灰色の粉のような物が入っています。

「今日……一度戻つてからまた保安所の人間に掛け合つたが……ナルルや少年の件は結局、話も聞いてもらえなかつた……それは本当にすまない。しかし、その代わりに、必死に頭を下げて嘆願して、療養所の研究施設を特別に貸してもらつた。この小瓶の……骨と、あと実はウジカとエウム……少し髪を失敬して、遺伝子検査をさせてもらつたよ。この骨というのはね、先の秘境の森の『有人説』を

証拠付ける有名な骨なんだ。秘境の森の大陸に、唯一船をつけられる海岸で発見されたもので、人骨が発見されたわけなんだよ。今から五十年以上前の話だよ。反対派の意見では……海流の流れで、他の大陸から流れた死体が、たまたまその海岸に辿り着いた……と言っているが、私はそうじやないとと思う。海流の流れなどを計算する、そこに流れ着く可能性はきわめて低いとみられるからね。この骨は世界各国の有数の研究者に分けて渡されたといふことながら、それをお医者様も手に入れたらしい。

私は最初、この小瓶の中の骨が一体何を意味するのか分からなかつた。瓶には何も説明も無かつたしね。けど、金花のことや、ウジ力の存在、そして手帳の記録などをそれぞれ照らし合わせて、一つの予測を立てた。そして、それを証明するために、ウジカの髪と共に遺伝子検査をしたんだ。それで、どう出たと思う?..

「まさか……」

「その、まさか、なんだよ。骨の遺伝子の中にね……専門用語は避けて、仮に“”と名を付けるが、その遺伝子情報が、ウジカと小瓶の骨の両方に含まれていたんだよ。これは非常に特殊なモノで、エウム、君の遺伝子には含まれていないものなんだ。ウジカは、エウム……君たちとは同族ながら、遺伝子情報は相当な違いを見せている。このことからしても、ウジカは、君よりずっと祖先の存在だつてことの裏付けにもなっているよ。とにかく、その“”要素を持つた骨が、秘境の森の近くで発見され、それがウジカにも共通する……この繋がりは、非常に明るい希望だと思う

「でも、遠い昔に分かれたということは、仮に私たちと同じ血を持つ人がいるとしても、それは随分違つてくるもんじゃないんですか?あの赤ちゃんと林檎腹さんのお父さんたちは血は近いんですけど、遙か太古に別れた一族で、ウジカと近い血を持つている人がいるなんてことは、どうしても想像出来ないのですが……。たとえウジカと共に通する祖先の生き別れだとしても……お互の間には長い年月

の流れがあります」

「遺伝子の共通点はね、” ”だけじゃないんだよ。その他の方でも、不思議なことに、ウジカとその骨の遺伝子は、驚くほど多くの共通性を発見出来たんだ。この資料を見て、数値がほとんど一致しているだろう?」

ジーニーズは書類の束を二つ、鞄から取り出すと、それらを床に並べて見せました。エウムは上から見てみると、確かに両方の情報の数値がほとんど同じなのです。

「でも……どうして……?」

「私の説だけど、聞いてくれるかな。二つの可能性を考えて、まず一つは、ウジカとこの骨の人物は、単純に遺伝子が全く進化しなかつたという説。しかしこれは、人間というのは環境が変われば、それに応じて体のつくりは変わっていくもの。遺伝子が全く変化しないなんてことは、あまりに考え難い。例えば……肉体が冷凍され、時を超えて現代に生き返った……というような突拍子も無い理屈が無ければ、普通には考え辛いだろ?」

だから、私が有力だと思う説はもう一つの方……近親相姦によつて、他の血の入り混じりの無い、一族の純血によつて代々生まれていつたという説

「エッ……!」

エウムは、驚きのあまり、口をアングリと大きく開けて、呆然とジーニーズを見つめました。

「まあ、これも考え方としては非常に突飛だが、しかし何らかの理由が原因があつて、一族の血のみで重ねていき、遺伝子情報にほどんど変化の起きないまま、今の時代まで受け継がれた……可能性は高い。もしかしたら……奇跡で、ウジカとほとんど同じ血を持つ一族が、その密林に生きているかもしれない」

そこでジーニーズは言葉を切り……しかし、と、次なる言葉を続けました。

「その森に入ることは、非常に危険なことだ……お医者様が病になられた、未知の危険な細菌たちが棲む密林だ……無事に生きて出られるかも分からぬし、それに血がもし絶えていたら……」

暫く一人とも黙ってしまいました。するとエウムが、ウジカの車椅子に近寄つて、彼の肩を抱えて、彼をベッドへと運ぼうとしました。

「ああ、手伝うよ」

ジー二ズは彼の肩を持つて、エウムは足の方を掴んで、ベッドに静かに寝かせてあげました。勿論、背中の花を上にして、窓に近い方に頭を置きました。

「この部屋の良いところは、田舎たりのよさだよ」

エウムはその言葉を聞いているのかいないのか、無言で、ウジカの花を撫でてあげています。まるで、簡単に壊れてしまいそうなガラス細工に触れるように、優しく……穏やかに……。

「ジー二ズさん」

「……なんだい」

「あたし、行きますよ。その森へ」

エウムは顔を上げてジー二ズを見ました。その表情は、どこか儂げに……薄い不安の感情が混じりながら……しかしながらそれとは逆の、強固な覚悟も籠められた、悲壮な、たくましい顔でした。

「ウジカを治すのに……血縁者が必要……なんですよね」

「ああ」

「……分かりました。ジー二ズさん、今日はもう、遅いです。もう今夜は休みませんか」

「そうだね、これからもっと大変になるしね……休める時はしっかり休もうか

「ハイ」

「それじゃあ寝る前に確認しておこうか。とにかくは、この赤ん坊の回復のために、君たちの故郷へと行こう。そして林檎腹の家族の者にお願いをする。そして赤ん坊を治した後、そこから海を渡り、

秘境の密林へと向う。そこが全てだ。

明日は一日、旅の準備をしよう。食料や、あと様々な薬品も手に入れなければ。森にはあらゆる危険がある、あらかじめワクチンを投与したりなど、万全を期せねばならない。あと……エウム、明日は朝一番で、林檎腹の花の所へ案内してくれないか

「ア……はい」

「私は、そこへ行かなくてはならない」

ジー二ズは、赤ん坊のお腹のアザを撫でてそつ咳きました。

49・薬探し（前書き）

補足説明：今回載せる話が、やや表現に際どい部分（若干の性的な仄めかし）があるのを考え、一応念のために小説の設定を15禁に変更させて頂きました。青年漫画程度のものですが、一応気になる方はお気をつけ下さい。

翌朝、庭の倉庫の中、ジーニーズはまだ太陽の姿が見えぬうちから目を覚ました。そしてすぐに素早く着替えたら、そのまま街へと出ました。準備することが多いので、まだエウムたちの目を覚まさない早いうちから、今日の仕事を始めていきました。昨夜は深夜まで起きていたので、結局四時間ほどしか眠れなくて、ジーニーズは欠伸を噛み殺して、少しほやけた頭を平手で自ら叩きました。

目指した先は、自身のかつて在籍していた学校。本当はもう一度とそこに向いたくは無かつたのですが、ソコでなければ手に入らない薬品や道具があるので、向わないわけにはいきませんでした。いや気の重いジーニーズは、白い思い息を吐いて、懐かしい学校への通学路を辿っていきました。その間、ジーニーズは脇道や裏道を見つける度に、その方へ目をやっていました。

……路上にたむろする浮浪者……そこに老若男女などの区別は無く、ただ人間が寄り合い群れを成して集合している……

…………ロウヤ老爺が幼女を、少年が少年を襲う……老婆は股を開き周囲の者を挑発し、少女は手を口の陰部へと差し伸べて優しく愛でる……濁つて響く艶かしい合奏……

……一人が拳を田の前の相手の腹に打ち込んだ……やられた相手はお返しにと拳を顔面に返す……鼻の骨を折り血を噴き出して転び掛ける……と思つてゐるうちに、そこから周りに暴力が連鎖し、右から左から、一人また一人と、その殴り合いに参加していき、激しい殴打の鈍い音……やがて血の飛沫が、辺りに雨のようにビシヤリビシャリと飛び散る……「俺こそは世界に名立たる格闘技！ 世界の王者よ！ この俺の無敵の力で、雑魚どもを蹴散らしてくれるわ！」

……血みどろの赤黒い拳を掲げて咆哮する……

ジーニーズは、その混沌の中へと、入っていきました。するとすぐに気付いた赤黒い拳の男が、その手を下ろして力強く構えると、ジーニーズに向けて突進してきました。

「死ねえエエエエエ！」

ジーニーズは素早く懷に手を突っ込むと、透明な液体の入ったビールのケースを取り出しました。そしてケースの先っぽ……細く尖つている方を男に向けて、そのケースの中央を勢いよく指で押しました。中の液体が押し出されて、それが先を通り霧となつて噴出され、男の顔に吹き掛けられました。その途端に、男は目玉をグレンと回して、次の瞬間、突然、力が抜けたように倒れ込みました。ケースの中身は、一種の眠り薬で、男は一瞬にして氣を失つたのでした。

そして、ジーニーズはそこにいる全員に、それを一人一人吹き掛けていきました。やがて全員が意識を失い、早朝の静寂が訪れました。ジーニーズは、一人一人の眼を覗いていきました。それぞれ、ほとんど真っ白に飛んでいました。ジーニーズは怪我した者に、それぞれ簡単な応急処置を済ませると、その中の比較的怪我の軽い……腹部に打撲を受けただけの青年の足に、懷に持つていた、ある塗料の缶を取り出して、塗りたくりました。そして、一警を投げて、その場を離れました。

空は大分明るくなつていました。しかし、まだ街の路上には人の影は疎ら。しかし、気にせずにジーニーズは学校の前へと到着しました。ジーニーズの行っていた学校は、二十四時間、緊急の患者も受け入れられるようにと、昼も夜も無く開いている窓口があります。ジーニーズは門をくぐり、その窓口へと向いました。外のベルのボタン

を押すと、窓の横に取り付けられた黒いスピーカーから、女性の声が聞こえました。

「ハイ」

「スミマセン、救急の患者じゃないのですが、私は昔この学校の生徒だったジーニズ・ホーチという者です。早朝からお訪ねして申し訳無いのですが、中に入りたくて、こここの窓口にきました。応対お願い出来ないでしょうか」

「……ハア……少々お待ち下さい」

そして暫く待ちました。二十分は経ったでしょうか、……ようやくといった感じで、扉から姿を現したのは、パリッとした白衣をキツチリ着込んだ、若い背の高い男でした。

「どうも、はじめまして！ ジーニズ・ホーチさんですよ」

「え……ヒ」

「いやーお会いできて光榮です！ あなたの功績の素晴らしい……よくお聞きします」

男は、ジーニズのことによく知っているようでした。

「我が学校に」入学され、後、世界中を旅しての治療活動。特に僻地などの無医村に赴かれて、世界でまだ発見されていないあらゆる奇病、難病の、新しい治療法を確立されたりなど、数々のお話は、私たちの仲間の間では伝説として話していますよ！」

「それは……ハハハ……ありがとうございます。よくご存知ですね」

ジーニズは照れ臭そうに、指で鼻の頭を軽く搔きました。

「しかし、びっくりしましたよ。突然あなたのような方がお訪ねになるなんて……どのような用件でしょうか」

「今度、少し長い旅に出ることになつて、そのために色々準備がいるんだ。ココでしか手に入らない薬品もあるから、どうにかそれを分けてもらえないかなと思つて……」

「そうでしたか！ ではお入り下さい、私が案内致しますので」

男は快活に響く声で返事をすると、扉を開けて、手を差し出して先を進めました。ジーニズは彼に一度頭を下げて、中へと……何十

年ぶりに入つていきました。

「先生がいらされた頃とは全く様変わりしているでしょうね、私が入学した数年前に、校舎は改築工事をしていますから。設備は一層充実されて、世界に誇れる学校だと思います！」

「フム……しかし変わらるのは、薬の匂いだね。それに、私はこの学校を中退した者だ。きっと、酷い噂をされていて、追い出されるかと思つていたよ」

「先生のお噂は、よく存じています。でも、噂なんでしょう？」

「……私は、まだ人に褒められるような医者じゃないよ」

「何を仰るんですか」

「私が世界を旅して回つて、多くの人を助けたいと思うのは、私自身の懺悔だ。若い頃に犯した罪への悔恨だ。そして、それはまだ、続いている。まだ、人に褒められてはいけないんだ。だから、これ以上、私を持ち上げるような言い方はよしてくれ。その方が、辛いんだよ」

「…………」

男は真剣な眼差しで、ジーニーズのことを見つめました。そして静かに足を止めて、先を行くジーニーズの背中に向けて、ソッと小さく頭を下げました。そして、早足で近付いて、背後から訊ねました。

「地下の薬品庫の方へ行きますか」

「そうだね、案内してくれ」

「ハイツ」

そして階段を下りて、地下の『薬品庫』とプレートの貼られた扉へと入つていきました。扉の脇の部屋の電気のスイッチが押され、パツと明かりが点けられました。目の前には、棚棚棚棚……の樹海となつていて、種々の瓶や袋に入った薬品が、ギッシリと敷き詰められています。

ジーニーズはその方へと歩いつとして、ふと足を止めて、振り返り

ました。

「君は宿直かね、お疲れだう」と、いつして丁寧に案内してくれて、本当にありがとうございました。」「い……イイエー！ とんでもないです！ いつして、先生のお仕事のお手伝いが出来るなんて、光栄です。今回の旅は、とても大変なのでしょうか？」

「ウン……秘境の密林へ行くんだよ」

「エエツ ほ、本当ですか！」

まだ鳥の澄んだ声の聞こえる早朝だというのに、男は随分と元気よく大声を上げています。彼は既に徹夜の眠気など、ゼロへ吹き飛んでしまった様子で、非常に舞い上がっていました。

「危険な旅じゃないですか！ いまだ森全体の八割以上が、全くの未開の土地だというのに！」

「だから、どうしても来る必要があつたんだよ。ここには様々な薬品が揃つているしね。……オオ、こんなものまで常備してあるのかい？」

「ああ、それは半年前から、少量ですが必ず置いておくよにしているんです。前に一度、ソレが無くて患者に亡くなられたことがありました……珍しい病気ですが、それでも万一のことを考え、あらかじめ準備しておけば、もう同じことは起きないで済みますしね」「その通り……だな」

そして暫く、二人は色々な雑談を交えながら、ジーニズは必要な薬品を選んで手に取つていきました。ジーニズは久しぶりに、まるで学生の頃の友達との会話のような気持ちで、男と笑いを上げながら話しました。男は段々と、最初のような畏まった態度から、良い意味で碎けた、遠慮の無い会話をしてくれたので、ジーニズもそれで気が楽になつて、自身の旅での色々な出来事……様々な奇病と出会つてきて、それとの戦いの記憶を、一つ一つ彼に伝える気持ちで話しました。それが彼への勉強になれば、これも一つ自分自身の役目を果たしたことになると思いました。

一時間ほど経つて、めぼしいものは全て集められました。

「ありがとう、これは薬品の代金だよ。私はこれで失敬するよ。本当に申し訳無いのだが、薬品庫の無くなつた物の説明は、私の名を出して説明しておいてくれないか。勝手に持ち出しているんだからね、私の名を出せば、君への咎めは無いだろう」

ジー二ズは丁寧に頭を深く下げてお願いしました。男は狼狽して、何と言つていゝのか分からず、ただひたすら「やめてください」と、頭を上げてもううように言い返すばかりでした。

そしてジー二ズは、そそくさと学校を後にしました。それを見送つた男が呆然と立ちつくしていると、背後の方から、物凄い勢いでこちらに近付いてくる足音が、硬い床を踏んで冷たく響いてきて、男は後ろを振り向きました。それは、厳つくましまいの肩で風を切つて走つてくる、学校の教授でした。

「オイ、ジー二ズ・ホーチが来たといつのは本当かね」

「H……ハイ、今ちょうど、お帰りになられました。いや、突然来られてビックリし……」

「何で中に入れたんだ」

「エ、えっと……」

「それと、薬品庫へと案内したそうだな。何か持つていったのか」「ハイ、あ、それで、これがジー二ズさんからお預かりした代金です」

「そういうことじやない、お前、何で、無許可での男を薬品庫へ入れたんだ?」

「どうしても必要な薬品があつて、お困りでしたので……今度はかなり大変な旅みたいですよ。珍しいものばかり持つていかれましたよ。まあ、すぐに困るようなものではないので、すぐに業者の注文すれば大丈夫ですよ」

「お前な……あの男が犯罪者だつてこと、分かつていいのか?」

「噂じやないです」

「馬鹿者、お前らはそう捉えているかもしかんが、私たちの世代では有名な話だ。おかげで、あの男が学校から消えて以降、学校の医療機関としての信頼が一気に失墜して、入学者もガクンと減ったんだぞ。私はその頃入学して、周りから随分冷たい目で見られたものだ。それを再び、世間に信用されるようにと頑張ってきたんだ。それが、あの男が学校に入りしていると噂されたら、また信用を失いかねんぞ」

「でも、教授もご存知でしょう？　の方の医療活動のご活躍を」「……勿論、知っているさ。だがな、あの男はうちの学校においての汚点なんだよ。『ろくな学生を出さない』というな。だから……すると突然、教授はグラリと姿勢を崩し、よろけました。

「ど、どうしたんですか？」

「いや……私は……部屋に戻るよ……君は宿直……なんだから……早く……戻り……なさい……」

最後の方は言葉が濁つてよく聞き取り辛かったのですが、教授の方はそう言い終えると、きびすを返して、フラフラと……少し背中を上へ突つ張らせせるような様子を見せながら、ぎこちない足取りで、廊下の向こうへと行つてしまいました。

男も、それを暫く見送つてから、背中を向けて、急ぎ足で戻りました。

再びアパートに戻つてみると、もうエウムは起きていて、彼女はまた部屋の掃除をしていました。

「あ、お帰りなさい」

彼女は床を拭くのを止めて、顔を上げて二ヶコリと微笑みました。その目の中のまぶたが、少し厚ぼつたく膨らんでいました。

「昨日は疲れなかつたかい？」

「あ……ハイ、ちょっと、遅くまで起きていたので……」

「……そうか。私は学校の方に行つて、薬品を頂いてきたよ。望みの物が手に入つたよ。後は食料とか、幾つかの道具だが、それは昼過ぎから行こうか。少し、眠つた方がいいよ」

「あたしは大丈夫ですよ。それより、気になつたのですが、ウジカを今回の旅に連れていつても大丈夫ですか……？」

「ウン……そうだよね。秘境の密林を、眠る彼を連れて入るのは、とても困難だし、危険が増す。それで考えていたのは、私の友人の病院に預けるというはどうだろ？ もしウジカの血縁者を見つけられたら、その人をそこへと案内するのが、一番安全で理想だと思うんだ。きちんとした医療施設のあるところで治療した方が良い」

「そうですね……」

「……金花の村に、彼を置いていくというのもあるが……」

「それは……」

エウムは言い淀み、俯いて視線を外してしまいました。

「まあ、私の友人はとても親切な、良い人だよ。若い女医なんだけど、とても頭の切れる、美しい人だ。そこに預けておけば安心だよ」「分かりました。では、その病院でお願いします。……出発は、明日ですよね」

「ン？ ……ああ、明日の、出来れば早朝に発ちたいと思っている、

大丈夫かい？」

「ハイ、それじゃあ……と

エウムは勢いよく立ち上がり、雑巾をたたんで片付け始めました。

「早速、買い物に行きましょう。すぐ準備します」「気持ちを奮い立たせるように、雑巾を強く握つて、彼女は努めて明るい顔を見せました。

そしてまだ朝早かつたですが（ジーニーズが戻ってきた時はようやく朝の出勤の人たちの姿が見え始めた頃でした……それから一時間もせぬ内に再び出掛けました）、とりあえずウジカはアパートに寝かせておいて、赤ん坊はエウムが（ベッドの毛布で包んで）抱いて、そしてエウムが先頭となつて朝の街を歩きました。手元の子のいた……林檎腹のいる所へと向かいました。

朝の街はせわしなく、人ごみが渦のように巻いて流れています。

赤ん坊がふいに咳をしたので、エウムは毛布を改めて包み直し、赤ん坊の口元を隠すようにしてあげました。皆が皆、キツチリとしたスーツや制服を着込み、同じような格好をした人たちが、右から左から前から後ろから、ひつきりなしに……洪水のように溢れています。その光景にエウムは圧倒され、好奇の視線を周りに振り撒きました。この街に着いてから、昨日は何となく初めて来た所への恐怖で、視線を下げがちで街を歩いていましたが、今日はしつかりと見ようと思つたのです。世の中には、こんなに沢山の人が集まつてゐる場所があるんだと、まるで経験のしたこと無い世界へと来て、ただ驚きで、エウムの心は躍つていました。思わず興味深いものを見つけては（例えば、あるお菓子屋の前に続く凄く長い行列など）、そちらへと視線のみならず足も引き付けられて、横から店の中を覗き込むうとしたりして、アチコチで足を止めています。それを後ろから見ているジーニーズはとくに、エウムのその好奇の仕草が面白くて、ニコニコと笑みを浮かべながら、彼女の引かれる先々に付き合つてあげました。

「そりいえば朝ご飯を食べてないし、食べたいかい？」

「……いいんですか？」

「勿論、私もお腹空いたしね」

そこで、そのお菓子屋で売っていた、皆が買っている、一番人気らしい丸い揚げパンを四つ買いました。手の平に収まるほどの小さなパンですが、砂糖を塗して揚げてあるらしく、油と甘みが良い感じで、サクサクと食べました。

「こりゃ面白いね、紅糖を使っているね。コレは南部の特産の砂糖で、ちょっとハツカのようなスッとする感じがあつて、甘ったるくなくてスッキリ食べられるんだ」

「へへ……詳しいですね、ジーニーズさん」

「まあ、世界中を回っているからね。その土地の特産を食べるのが楽しみなんだ」

エウムはその紅糖のパンを食べました。

「美味しいです」

「でしょ？ もっと沢山、美味しい食べ物は、世界中にあるよ。それも旅の楽しみだね」

そんなことを話したりして、一人はすっかり時間を潰して、昼近くまで街で遊んでいました。エウムの「そろそろ行きましょうか」という声で、ジーニーズは「ああ……そうだった」と苦笑しました。既に時間も大分経つて、昼ご飯の分まで食べてしまっていました。

何度か角を曲がり、段々と人ごみが薄れてきて……「待って」と、急にジーニーズが足を止めました。

前を行くエウムは振り返ると、ジーニーズは地面の石畳の上をジッと見つめています。何かを考えるように首を捻り、あごを人差し指と親指で擦りながら、一心に眺めています。そこは、ただの路上の石畳しか見えません。ジーニーズは、何かを辿るように、目線を、石畳の上を這つていきます。そして、まるで何かを追うように、ジーニーズは一人でスタッフと進んでいきました。エウムはその後を無言

で追いました。不思議なことに、ジーニーズが進んでいく先は、これから彼女が進もうとしていた方向だつたのです。

そして、ついにあのボロボロの家へと、到着しました。ジーニーズはやはり地面を見つめたまま、その視線を、入り口の黒い穴の方へと走らせました。

「よく分かりましたね、ここが林檎腹さんのいるところです」「ここが？」

と、何故かジーニーズは少し驚いた調子で声を上げました。

「そうか……いやね、今日の朝なんだけど……薬をもらいに行つた時のこと、ちょっとした事件に出くわして。その場は鎮めたんだけど、彼らは皆、重度の金花の中毒だつたんだ。それで、彼らはどこから金花を手に入れているのか気になつてね。一人の青年の足に、ある特殊な塗料を塗りたくつておいたんだよ。それは普通の人の目には不可視の光を放つ塗料なんだ。しかし、前に言つたとおり、私の目はおかしくなつていて、その影響か私には、それが見えるんだ。それで、彼の足跡を見つけたから、辿つてみたら……この中に続いている」

ジーニーズは顔を上げて、家全体を仰ぎ見ました。

「中、入りますか？」

「ウン」

ジーニーズは懐から指先ほどの小さな懐中電灯を取り出し、明かりを点けて、それをエウムに手渡しました。

「これを持つて。私は暗闇でも見えるから」

エウムは右手に赤ん坊をしつかり抱いて、左手でそれを受け取り、静かに領きました。そして彼女は前に出て、電灯を前に向けて、入り口の穴の暗闇へと光を投げ込みました。

そして三人一緒に、中へと踏み込みました。足元を照らしながら、奥の四角い光を目指して歩いていましたが、ふいにまたジーニーズの足がピタリと、闇の真ん中で止まりました。

廊下の両端に幾つか、規則正しく開いている穴……かつて人に使われていた部屋の入り口の跡。家の外を覆っていたツタは、中まで深く侵食していく、ツタの先がビラビラと、長い髪の毛のように穴の上から垂れ下がっています。入り口の上の半分近くが、膜のように覆われています。しかし、目線を下げて、足元の木の床から生えている植物はというと……何故か、踏みにじられたように潰れていました。気になつたジーニーズは、頭のツタを手で押し退けて、中へと入つていきました。

部屋は小さな個室で、壁際には一つ小さな窓があるようでしたが、外側からやはりツタに覆われていて、完全に塞がれていて外の明かりは見えません。エウムは中に入るのが少し怖いのか、入り口の外で控えているので、電灯の明かりもありません。しかし……ジーニーズには、見えているのです。部屋の左の隅の方、……何か黒い影が……何重にも折り重なるように……積み重ねられるように……固まって置かれています。そこへ、ジーニーズはゆっくり近付きました。

そして、ジーニーズの腰の辺りまで高く積まれている“それ”は、サツと見ただけなら、かつてこの部屋で使われた毛布か何かが、重ねられているようにも見えなくもありませんでした。ジーニーズは、その一番上のものを、掴み、上へ少し持ち上げてみました。グニヤリとした冷たい手触り……そして鼻を刺すような強烈な異臭、……間違ひ無く、死体でした。暗闇の部屋の隅に、何体もの多くの死体が、積み重ねられていたのです。よく見ると、死体の多くは頭が叩き割られていました。何か硬い凶器で殴られて、殺されたのでしょうか。乱雑に部屋の隅に積み重ねられていることからも、犯人の粗暴さを物語っているようでした。死体の体は傷だらけでした。

「どうしたんですか？」

外からエウムが、恐々と不安そうな声を掛けました。

「いや、何でもないよ」

ジーニーズはそう言って、離れ際に横目で一瞥をくれて、部屋を出ました。

ジー二ズは予想を立てました。あの隅に置かれた哀れな死体……彼らは何故殺されたのか。それはもしや……口封じか何かではないだろうか。この家の奥の、見てはいけないものを見てしまったことへの、口封じ。奥に待つ、金花と林檎腹の死体。そこへ、昨日はエウムが一人（ウジカも一緒に）でやってきた。それで、殺されたかったのは、たまたま運が良かつたのだろうか。それとも、もしやエウムが金花の村の人間だから、それとなく“仲間”だと悟つたらどううか。……あの死体たちは、一体“誰”なんだろうか。そして、“誰”に殺されたんだろうか。

そんなことを考えているうちに、廊下の奥の遮光幕の前へと辿りつきました。

ジー二ズは、サッと勢いよく引き開けました。真っ白い光の原野、アチコチに金花が我が物顔に咲き誇っています。エウムは、ジー二ズの背中越しに指を指しました。

「あの、真ん中の盛り上がりしている所が……そうです」

ジー二ズは小さく頷いて、そこへと近付きました。目の前に来るドカリとアグラをかけて地面に座り込むと、両の手の平を大きく広げて差し出して、その隆起した土の上にソッとのせました。ひんやりと冷たい土……しかしそこにジー二ズは、人の身体の形と同じ盛り上がりを感じました。ジー二ズはその格好で……ジッと、触れていました。段々と土が温まってきて、手から滲み出てきた汗が土に染み込みました。段々と土が泥になつていて、手に茶色く付いていました。ジー二ズは、土と自らの手が、一体化していくような感覚を覚えました。土は完全に、温かみを取り戻しました。

「あなたとの再会が、こんな形になつてしまつとはね……」

そして、上にそびえる立派な太い金花の花を見上げました。

「あなたの金花、幾つかもらつていいですか？」

そして、ジー二ズはスッと目をつむり……再び開けると、隆起の上から生える中の、手の平に收まりそうなくらいの……とても小さ

な金花の子供みたいなの一株、土^トと掘つて取り出しました。

「エウム、後でこの金花を入れる鉢を買おう。これも一緒に持つて、

旅を行こう」

土がこぼれ落ちないよう、両手で椀を作るようにして下から抱え込み、ジーニーズは立ち上がって、その花を見つめました。それは遠目には目に付かないほど小さな花ですが、周りの光を受けて、燐然と力強く輝いています。そして、小さくとも、中にはしつかり粉のような細かい種を携えています。

51・旧友の計画

さてもう出ようかと、入り口へ振り返りうつと体を回した時、視界の端に、人影を感じました。体を止めて、そこを見てみると、部屋の奥に朽ちた木の扉があつて、一杯に開け放たれています。……と、いうより、扉は壊れかけ、もうまともに閉まらないのでしょうか。だらしなく口の開いた先には中庭があり、そこにも金花が、ギッシリと隙間が無いほど生えています。あまりに多く生え過ぎて、扉の方へと茎が溢れ返っています。その扉の目の前で、飛び出た金花の一つに……内股になつてペタリと座り込んで、茎を掴んでいる男……朝の、あの塗料を足に塗つたあの青年でした。

青年は、右手……左手……右手……次から次に花を掴んでは、頭から口の中に飲み込んで、ザリザリと茎を引いて、歯で花びら」と種をむしり取るように食べています。彼の側には既に、四本ほどのボロボロになつた茎が落ちていました。彼はそれから十本ほどを食べて、ようやく満足したようで、最後の一本を食べ終えて放ると、そのまま後ろに大の字に倒れ込みました。

「ウ～……ア～……ア～……」

何とも変なうめき声を上げて、体を左右に可愛らしく揺れていると、ようやくジー二ズとエウムの姿に気付いたようです。

「ダ～～……ダ～～ダ～～……」

二十歳位と思える大きな青年は、まるで本当の赤ん坊のように、両手をこっちに向けて上げて、……エウムを呼んでいるようです。無垢な、あどけない緩い笑顔、その目は彼女の方見ていました。

「えつ……と……」

どう対してあげればいいのか……エウムはとりあえず、ニッコリと……少し戸惑つたせいで変な顔付きになつてしましましたが、笑い返してあげました。すると、青年は横に転がつて体を反転させると、俯けの格好で、ハイハイを始めました。ゆっくりと、見つめる

先の……エウムを田指して歩いてきます。そして田の前に来ると、いきなり両手を勢いよく上に挙げて、倒れ込むようにエウムに抱きました。

「キャツ！」

青年は顔を胸に埋めて、擦り付けるように頭をモゾモゾ回していくのです。そしてその内に、段々とエウムの上着が……彼女は華奢な体付きで、細い撫で肩なので……大きめの服の左肩の方が、少しづつ下にずれてきて、彼女の胸の片方が……外にこぼれ出ました。

「あツ……」

と言う間もなく、青年はその胸の先端に、突然しゃぶりつきました。そして……チュウチュウ……と、彼女の胸を吸い出したのです。

「あ……ク、くすぐつたい……」

青年は、赤ん坊のように乳を飲もうと懸命に吸い付きますが、エウムに出るはずありません。それでも、青年は意に介さないように、音を立てて吸い続けます。エウムは一瞬、とっさに払い除けようとしたが、あまりに真剣に吸う姿を見て、また突然のことでの呆気にとられたのもあって、止めるのを躊躇してしまいました。

ジーニーズは側に寄つて、しゃがみ込み、横から青年の顔を見つめました。青年の目は一心にエウムの胸元を見つめ……その目には何らいやらしさみたいな色は無く、むしろとても真剣な、一生懸命な眼差しで、彼女に抱きついていました。すると、ジーニーズの存在に今気付いたように、田がこちらを向きました。クルリと丸い、大きな綺麗な目で……

「……この田、」

「彼は幼少の頃から、母親から虐待を受けていた。父親は、彼が生まれる前に、家からいなくなつた。やがて成長した彼は、あるきっかけで発作的に母親を殺し、そして家を飛び出した。そして街の浮浪者たちと混ざり、泥水をすすつて生きていた。やがて、金花の存在を知った

年寄りじみた枯れた声、……かすれたその声は、ジーニーズのものではありませんでした。

「誰だ！」

ジーニーズはとっさに、その声のした方、……ここに入った時の幕の張られた入り口、そこに立つ、腰まで届く長い白髪を垂らした、背の低い老人の姿を認めました。

「久しぶりだ、ジーニーズ」

老人は右手で額の髪をかき上げ、右目を見せました。目の周囲にクマのように、黒く焦げた痕が見えました。ジーニーズは、声無き叫びを上げました。

「……久しぶり、だな」、そう答えました。

エウムは驚いて、顔を見上げました。ジーニーズは、老人を見据えたまま、その者の名を静かに呟きました。

「ユ・ゾーク」

老人……ゾークは、いかにも、と頷きました。

「ゾーク……さん？」

不思議なものを見るように、まるで幻を見付けたかのように、二人は目を見開いて、そこに立つ者を見つめました。彼は……確かに彼は、生徒に生体実験を行つて、その咎で逮捕されたはずです。その人間が、何故こうして白昼の街に、一人、立つているのでしょうか。「ジーニーズ、私と会いたかったのではないのか？ 何度か私と面会出来るように動いていたのは知っている。こっちへ来ないか」

「お前……」

「…………」

「白い目……瞳が、無い。相當に飲んでいるな」

「ああ。君も同じじゃないか」

「……説明してくれ。どうしてお前は、“ここ”にいるんだ？」

「分かつて、いるだろ？？」

「やりと、シワだらけの顔が怪しく歪みました。そして、手を伸ばして、いまだ胸をむさぼる青年を指しました。

「この男は、私の研究の対象。そのためにここに来たのだが、こうして君と会えるとは」

「お前、保安隊と繋がっているのか？」

「相互協力だ。声を掛けてくれたのは、あちらの方だが」

「金花の、研究のために？」

「費用は惜しまないと言ってくれる。それまで私は自費で行つていた。願つてもない提案だった」

一人の視線は、遠い距離からぶつかり合い、探り合いました。しかしその色合いには若干の違いがあり、やや攻撃的に鋭く睨み付けるジーニーズに比べ、ゾークの視線にはどこか親しみのような情が混じつているようでした。

「そう睨むことはない。私とお前は同窓だ。お前は中退してしまったが。そうだ、私を強引に眠らせて帰した後、あのお医者様はどうなつた？」

「……亡くなられた」

「どうか。私を慌てて帰すからだ」

「何だつて？」

「私は、とつておきの治療法を見つけていた。ところのこ、睡眠薬で強引に帰らせてしまつたのが、お前の一番の失敗」

「……」

「終つたことは、もういいな。それより、今だ。その青年を連れて帰る。そして……」

ゾークは額を少し上にあげて、額の髪を軽くざかして、一の句を告げました。

「ジーニーズ、お前に協力を求める」

「……何だつて」

「お前の深い薬学の知識。世界中を旅して得た知識を、私の研究の

ために貸してほしい」「

「……いきなりそう言われて、易々答えられるものじゃないぞ」ジーニーズは手を一旦懷に入れ、すぐ外に出して、その手でエウムの手を握りました。そして手を後ろにグッグッと引っ張りました。エウムはそれが何かの合図と氣付き、引っ張った先……中庭の方角を、横目で見ました。

ゾークは、たるんだシワだらけの顔を、さらに深く潰して笑みを浮かべました。

「長らく会つてなかつたから、変わつたな。そんな、作り笑いなんか止めろよ。」「

「私は、生まれた時から、何も変わっていない。感情はいつも素直に。この笑顔は、私の心からの気持ちの表れ。そして、幼い頃より研究していることは、今もまだ、続いている」

「風の中の魂と交信……というやつかい？」

「……ああ。今、この愚かな世界、人と人との関係が希薄になり、親が子を、子が親を、殺す。捨てる。裏切り。虐め。差別。嘘。そして、愚かな政治家や指導者たち。荒廃し切つた人間関係、どの人間も信用ならない。腐敗した存在しかこの世にはいない。なら、世を律してくれる……正しい方向へと導いてくれる救世主が必要だろう」「う

「何だつて？」

「降臨、だ。悟りを開き、世のまよえる者どもに教えを説いてまわつた、唯一無一の真の救世主、神の子」

「神の子を、現世に降ろす……だと！？」

「その通り」

「ば……馬鹿な。お前、靈媒術か何かを施すというのか？」

「私のする手段は、もっと科学的な理論による。ただ靈を呼ぶのではない、この世に、定着させる。つまり、今この時代に『復活』させること」

ゾークの表情に、何ら誤魔化しやでまかせのような様子を見つけ

られず、極めて真面目な顔で、淡々と話をしていました。ジーニーズは、一つ咳き込んで、喉に詰まつたタンを切りました。

「それを、金花を使って、可能だというのか。一体、どうやって……」

「お前は、金花を飲んだことがあるのだ」「……」

「ああ」

「何を見た?」「……

過去に出会った人たちと、最後に、母親」

「その存在は、生々しいものだったろう。当然のこと。その時お前は、本当の母親の魂と相対したのだ。金花の、効力の真の意味を知つていいか?」

「……いや」

「己の魂と、肉体との分離……魂の離脱だ。肉体より魂が抜け出で、そして過去の人間や母親の魂と交差したのだ。」

現れる魂は、その者が一番に望んでいる願望……その者が心から会いたいと思う者……お前にとつての親や過去の人間。または、こんなことも……力無き者が焦がれる、絶対的な暴力、その象徴である世界一の格闘家、優れた格闘家の魂が現れ、その者は教えを請う、そして己は無敵の力を手に入れたと“錯覚”する……そして、またある者は、憎み切つた親を殺し、理想の母を求める

ゾークは、エウムの胸の中にいる青年に視線を流しました。

「即ち、現れたるは、聖母。絶対なる安心の……母の腕の中で温かく包み込まれ、ふくよかな乳房によつて美味しい乳を与えられる喜び。夢想した世界。その青年は、まさにこの今、聖母に抱かれ、真の安息を得ている。その青年の目を見れば、分かること」

ゾークは右手で、頭の方の髪に触れ、ゆっくりと梳きながら腕を顔に交差させながら……手を下におろしていきました。

「私の絶対の望みである、神の子との対話……いや、神の子をこの世へと呼ぶこと。私の肉体を、神の子のために捧げる。そのためには、一つ咳き込んで、喉に詰まつたタンを切りました。

……」

おろした右手を、真つ直ぐに、人差し指を立て、ジーニーズを射る
ように指示示しました。

「お前の協力が、要る」

ジーニーズは暫く黙り込み、こちらを睨むゾークを見据えました。三歩ほど前に出て、ジーニーズはエウムの前に立ちはだかり、ゾークと一対一で睨み合いました。

「……どちらにしても、」

ジーニーズが、乾いた声で言葉を発しました。緊張のため、舌が口の中にベットリとはり付いてしまっていました。

「今は、協力が出来ない。するべきことがあるんだ。お前の言うことが、正しいのか、その答えは分からないが、今の私は、今、己のすべきことを為さなければならない。協力は出来ない」

「その女は、金花の村の娘か」

「……」

「事情は、その娘のことか？」

「そうだ、約束したんだ。だから、それを^{ホコ}反故出来ない」

「ならば、仕方が無い、旧友だが、力尽くでも……私の研究所へ案内する」

すると、突然ゾークの後ろの廊下の闇から、ゾロゾロと十人ほどの、銃を構えた屈強の兵士が現れました。

ジーニーズは、とっさに、背中に回していた左手の手首を、前からは見えないように静かに素早く動かしました。

「確保を」

ゾークがそう一言呟き、その合図で一斉に兵士が、ジーニーズめがけて突進しました。銃を用心深く構えて、全く抵抗出来ない内に、ジーニーズは取り囮まれてしまいました。

「ジーニーズ・ホーチ、管理番号・零六番、二人を確保！ 娘の方は逃走しました、追い掛けますッ」

戦闘服の胸の辺りに鳥の紋様が描かれた、隊長と思しき男の野太

い声が響きました。

「いや、娘の方はいい。それよりジーニーズを研究所に案内する。零六番もついでに連れて行け」

口を半開きにして（涎でベトベトに汚れていました）こちらを見る青年を指差して言いました。

「ハッ！」

ゾークは、エウムが風のように駆けて行つた先……トンネルのようすにポツカリかき分けられた中庭の花畠を見て、また顔が潰れたようなシワだらけの笑みを浮かべました。

ジーニーズが壁になつてゾークの死角になつた時、ジーニーズに手を握られて……紙の感触を感じました。そして手を後ろに引いて、その先にある中庭を見て、何となく意味するところが分かつたような気がしました。その時、一瞬でしたが、ジーニーズがソッと首を回して、こちらを見たのです。無言でしたが、その目にはひつ迫した雰囲気が張り詰めていて、それは何となくでも、今この状況の危うさというのを感じさせるのに十分でした。

そして、部屋の中に銃を構えた兵士たちが雪崩れ込んできた時、ジーニーズは、力カトでエウムの足を軽く蹴りました……「行け」……。それが引き金のようになつて、エウムはとっさに足を滑るよう動かして、裏の庭の扉を目指して、一直線に駆け出しました。胸元にいた青年は、駆け出す少し前に、突然彼女の腕の中から下りていって、ジーニーズの靴へと近付き、指で靴ヒモに触れたり引っ張ったりしていました。ハッと気付いて、青年を連れようと振り返つたのですが、その時には既に兵士が、ジーニーズたちを取り囮んでいました。そして一人の兵士が、こちらに気付いて銃口を向けようとしたので、慌てて目をそらして、中庭を懸命に目標しました。赤ん坊の方は、最初からずっと腕の中に離さず抱きしめていたので、決して落とさないようにと、腕の重みの確かさを常に意識に置きながら、走っていました。背中から撃たれることを半ば覚悟して、冷たい汗を搔きながら、とにかく中庭の輝く金花だけを見て走りました。幸運にも、銃声は響かず（それはジーニーズの無事も知らせていました）、エウムは、出口から溢れんばかりに生える金花の中に、頭から一気に突つ込みました。

光の花畠の中を、必死に搔き分け進みました。花が揺れる度に、光があらゆる角度に乱反射して、あちこちで閃光が発せられました。右も左も分からぬまま、ただ真っ直ぐ進むのみで、前屈みに、目の

前の花の茎を、掴んでは除けて掴んでは除けて……すると不意に、手が何かにぶつかりました。それはコンクリートの壁でした。エウムは、特に下の方を見ながら、壁に沿つて動いて、丹念に見て調べました。そして、大きな……体も通れる位の穴を見つけると、考えることも無く、すぐに頭から飛び込みました。

エウムは勢い余つて……壁は無事抜けたものの……真っ直ぐ頭から地面に落ちてしましました。

「イタタツ……」

暫く頭を両手で押さえ、うずくまつていきました。多少痛みが落ちてきています、周りを見渡すと、すぐ目の前に壁がありました。そこは狭い裏通路のような所でした。目の前の壁とは、一メートルの幅もありません。上を見てみるとコンクリートが屋根のように繋がつていて、辺りは暗いです。左右を見回すと、両方とも出口のよう光が見えました。エウムは最初にこの家に来た時のこと思い出して、方角を思い出しました。そして、右だと思い、通路右の光を目指して駆けました。

太陽の光の下に出ると、既に空は赤く染まり始め、ビル街の隅には濃い影が溜まつてきました。エウムは無我夢中で、夕方の……帰宅のためにじっと返す人々の波の中を……アパートへと急ぎました。彼女の頭の中には、今、何も考えることはありませんでした。ただ、とにかく早くアパートへと戻らなければ……追い詰められるような思いだけが、彼女の足の運びをドンドン加速させていくのでした。

そして、何度も角を曲がったか分からないくらい……ようやくという氣分で、アパートの前へと到着しました。そのまま部屋へと駆け込みました。もうほとんど暗闇の流れ込んだ部屋の中で、ウジカは無事にベッドの上に、静かに眠っていました。それを見て、急に安堵感が溢れました。エウムは、その場に……ペタリと、腰が抜けたように内股で座りました。そして、よつやく気付いたように……自分の呼吸が異様に荒れているのを、落ち着けるために、何度も何

度も、深呼吸をしました。

最後に唾をひと飲みして、ジーニーズに寸前に渡された……手の中で強く握つてクシャクシャになった一枚の紙を、シワを伸ばして広げました。そこには、メモ書きのように、荒っぽく流れるような文字で、何やら住所が記されていました。その中の、上から二番目の住所……その頭に『レティス』という女性の名前が書かれ、赤いペンで何重にも囲まれていました。

「この人が……ジーニーズさんの言つていた、知り合いの女人の医者かしら……」

エウムは、紙を裏返したりして仔細に眺めて、そしてシワを綺麗に伸ばすために、手の平にのせて押したりしました。……とつさに渡されたこの紙……そして足を蹴つて、まるで「行け」と示すように……

住所を見ても、それがどこなのかエウムにはさうぱり分かりません。街の役所へ行つて聞いてみれば、どこなのか分かるでしょうか。エウムはふと顔を上げると、入り口側の壁に置かれた、ジーニーズの大きな鞄が目に入りました。膝を擦りながら近付いて、側の壁に背をもたせかけ、鞄の口を大きく開いて中を見ました。そこには財布やら細々した医療道具やら、ジーニーズの大切な持ち物が詰まっていました。今日出掛けた時に持っていた財布は、別の小さな小銭入れだつたのでしょう。失礼して中を見てみると、こちらには沢山のお金が入っていました。

更に中を探ると、色々なカードが、一つのケースに収められていました。一枚取り出して見てみると、それはジーニーズの身分証明書のようでした。ジーニーズの顔写真と、読めない文字で何か書いてありました。そして、数字の羅列……電話番号が一列書かれています。それまでエウムは、電話というものを知りませんでした。遠くの国の人とも簡単に言葉を交わせる機械……そんなものは村には無く、ジーニーズが持つていた携帯型の電話を見せてもらつて、長い列

車の旅の間、触らせてもらいました。……アツ！

エウムはその時のことと思い出し、更に鞄の中を、深く手を突つ込んでゴソゴソ漁ると、硬い手応えがありました。抜き出してみれば、それは携帯電話でした。

「あつたッ……あれ？」

画面のところが、何故か緑色の明かりが点滅していました。とにかくエウムは耳に当てました。するとそれとほとんど同時に、ガチャリといつ音がして、こきなじりとても甲高い女性の声が発せられました。

「ジー二ズさんですか！ お久しぶりですー！」

「あ……アノ、」

「あれ？ ジー二ズ……さん？」

「あの、あたしは……エウムといいます……あの……」

「エウムちゃん？ ジー二ズさんの電話、ですよね？」

「あ……ハイ、そうです。ちょっと……お借りしているんです」

「あへ、そうですか。……で、どういったご用件でしょーか？」

……どうも、エウムが鞄を漁った際に、間違えてボタンを押してしまって、どこかに掛かつてしまつたようです。

「スマスマセン……あたし……間違えてボタンを押してしまつたみたいで……」

「あ、そななんだ。リダイヤルボタンでも押したのかな……まあいいや。ジー二ズさん、そこにいるんですけど？」

「あ……いえ……」

説明することをためらい、エウムは押し黙ってしまいました。それから数分ほど沈黙してしまいました。

「……何か、あつたの？」

ふいに、電話先の女性が、優しげな声で訊ねてきました。

「いえ……あの……スマスマセン、間違えてお掛けして……それでは

……あの……失礼し」

「ちょっと待つて！ 電話切らないで。何か困ったことが起きたん

じゃないの？ よかつたら、あたしに聞かせてくれないかな？」「でも……」

「ジーニーズさんがそこにいなっていいし、何かトラブルに遭つたんじゃないの？ あたしはアマティっていうんだけど、」

アマティ……その名に覚えがあつたエウムは、さつきの住所の紙を取つて見ました。やはり……下の方に書かれています。

「あたしとジーニーズさんは友達なんだ。あたしは単なる旅が大好きの女なんだけど。よく旅先でジーニーズさんと会うんだ」

「あの、あたしはエウムつていいます。ジーニーズさんとは……」

そしてこれまでの経緯を順番に話していました。アマティはとても気さくに話を聞いてくれて、とても話がし易くて……それは相手も同じだったようで、やがてお互いドンドン打ち解けていくのを感じました。エウムは、故郷の友達のことをふと思い出していました。

「そりなんだ……相変わらず、ジーニーズさん、色々トラブルに巻き込まれて大変だね～」

「そうなんですか？」

「ウン。だつてジーニーズさん、免許を持つてないからね。それと、少し思い込むところがあつて、訪れた病院で入院してた子に、いきなり自分の薬をその子に飲ませちゃって……病院の人とか親にメチャメチャ苦情言われたの……あたしもその時一緒にいたんだけど……結局その子、その薬でみるみるうちに治っちゃったから、何とか示談で済んだんだけど。でも、腕は本当に凄いんだよ。ウジカ君もすぐ治しちゃうよ」

「ウン、ありがとう」

「それで……、エウムちゃん、これからどうするの？」

「はい、アノ……是非会つてみたい人がいるんですけど、ソノ……その人の家がどこなのか分からなくて……」

「何で人？」

「レティスさん……といつ人ですけど」

「あ～。あ～あ～」

「……？」

「知ってる。レティス。ウン」

「あの……実はジーニズさんに聞かせて頂いたんです、ジーニズさんのお友達で、とても綺麗な人だつて」

「ウン、あたしも会つたことあるから分かるよ。確かに、凄い美人だよ。ジーニズさんのお弟子さんみたいな人みたいだけど……」

「ウジカをその人に預けようと思つているんです。あたし、決めたんです。今、こうしてアマティさんとお話しているうちに。とにかく、ジーニズさんいなくとも、出来るだけのことをしていこうつて。それで、とにかく最初に決めたように、レティスさんにウジカや赤ちゃんを預けておこうと思つて……」

「エウムちゃん、あたし、レティスのいる病院分かるよ。メモ用紙はある？ 行き方を教えてあげるから、書いておいて」

「ア……ありがとうございます！」

エウムは再びジーニズの鞄を漁り、入っていたメモ帳とペンを取つて、最後の白紙のページを開きました。

「いい？ エウムちゃんのいる街からは、駅から深夜発の特急列車が何本か出てるの。その中に『北部行』という列車があるはず……国境を越えて……その列車の終着駅が、レティスのいるところなの。『北部』はとても寒いところだから、防寒着とかキチンと用意しておいたほうがいいよ」

「『北部行』ですね」

「ウン。凄く田舎なんだよ。駅からはバスが出てるんだけど、日に四本くらいしか出でないから注意して。そのバスに乗つて、『学校前』という所で降りるの」

「『学校前』ですか」

「そう、どうしてそんな名前の停留所なのかは、實際に行つてみれば分かるよ。とにかく自然がいっぱいのところだから」

「分かりました。ありがとうございます！」

「あと……」

「ハイ

「……頑張つてね」

「あ、ハイ！」

「いつか、エウムちゃんと直接会って、話がしたいね。入つて、実際に会つて会話することがとても大切だと思うんだ」

「あたしも、アマティさんの旅のお話とか、色々聞きたいです」

「アハハ……そうね、いつかお話しようね。それじゃあね！」

「それでは、ありがとうございました！」

エウムは、思わず電話相手に頭を下げて、そして電話を切りました。エウムはとても良い気持ちになつていきました。思わぬ電話で見も知らぬ人とお話をし、それが彼女の心の緊張をほぐしました。ジーニーズさんが捕まつて、これから先どうなるのか分からなかつた不安が、きっとどうにかなるのではないかという思いを抱くようになりました。とにかく、今は出来ることをしなければ……。

その後、エウムは荷物を一気に整理して、全てを背負い、夜、アパートを発ちました。アパートには、これから自分たちがしていくことを記した手紙を、ベッドの上に置いておきました。『ジーニーズさんとまたすぐに会えることを信じています』。

エウムとウジカと赤ん坊の三人、足早に人通りの少ない夜の街を抜け、駅へと急ぎました。

とりあえず目的の『北部行』の列車を探すため、駅の案内所を探しました。改札の横にガラス窓があり、そこへ行って、中に座つていた駅員に声を掛けました。

「あの……『北部行』の列車に乗りたいんですけど……」

口髭をたくわえた小さな中年の男は、唇に挟んでいた短い煙草を指でつまむと、上目遣いにエウムの顔を見て……手元の赤ん坊や、側の車椅子のウジカを見て……煙草で構内の奥を指して言いました。

「急いだほうがいいよ、もうすぐ出発するから。切符を買うかね」

「ハイ

ジーニズの財布をお借りして、切符代を払いました。

「はい、一人分。赤ん坊はタダだからね」

切符を受け取りました。

「ありがとうございます」

エウムは丁寧に頭を下げてお礼を言つて、そして改札をくぐつていきました。中年の駅員は、再び手元の煙草を唇に挟んで、エウムたち……とりわけ車椅子の少年のことを、ジッと見つめていました。ホームに出ると、もうまさに今出発せんとばかりに、出発のベルが鳴り響いていました。ガラガラと車椅子を押して、雪崩れ込むようく慌てて乗り込みました。扉をくぐると同時に閉じ始めて、危うく体を挟めるところでしたが、何とかギリギリ間に合いました。そして、ガタリ……と車体が揺れて、列車は走り出しました。

エウムは顔を上げて、辺りを見回しました。深夜の列車……異様なほどに中は静まり返つていて、疲労した車内の明かりに薄暗く照らされています。明かりの弱さゆえ……座席の影が何だかどす黒いシミのように滲んでいて、見た目の印象を汚らしくさせていました。いえ、列車 자체も実際に疲弊しているようで、アチコチに擦れ傷や

汚れが付いていました。初め街に来た時の列車はもつと全然綺麗だつたので、年代を感じさせるくたくたの列車の様子に、エウムは少し気後れしました。

乗客に注目して見ると、客は「く少なくて、疎らに……片手の指で数えられるくらいの座席に座っている程度でした。エウムのいる車両には、スー^ツに帽子を深く被つた顔の見えない男が列車の一番奥のほうに、体の丸々肥えた中年の女性が列車の真ん中辺りに（彼女は酷い大きな寝息を立てて眠っていました）、そしてエウムのいる列車入り口のすぐ横の座席には、エウムより三つか四つ年下でしょうか……少女が一人で座っていました。少女はエウムが入ってきた時に、チラリとこちらを見たのですが、エウムが彼女の方へと視線が移りそうになつた時……少女は素早く視線を前へと戻しました。

エウムもとりあえず座ろうと思いましたが……困りました。その列車には、車椅子を備え付ける場所が無かつたのです。古い列車のため、車椅子用の空間が用意されてなくて、座席はギッシリ敷き詰められていきました。真ん中の通路に置いては、そこを通る他のお客様に迷惑がかかるし、どうしようかと悩みました。エウムはとりあえず、ゆっくりと通路を歩いていきました。左右の座席を見回して、どうにかならないかと考え考え進むのですが……結局そのまま一番前まで行つてしましました。後ろを振り返つて……通路に置いてしまおうかと少し考えたのですが、その考えを消すように頭を振つて前を向くと、扉を開けて、前の車両に行こうと思つました。すると、そこはどうやらトイレなどがあるところらしいへ、すぐ横を見てみると、人が溜まるようなスペースがありました。席ではないんですけど、ここなら何とかウジカを置いて一緒にいられそうです。ウジカを一番奥の方に入れて、壁についた窓に彼の背中を向けるようにして、エウムはその近くの床に直接座りました。お尻がヒヤリと冷えて、思わず腰を上げ掛けましたが、我慢して座り続けました。次第に温まつていきました。

ここは人が普通はいないとこらのためか、特に明かりが暗く、薄暗い闇の中のようでした。光の村で育ったエウムには、その闇はこのほか怖さを覚えました。列車が高速に走るため、時折派手にガタリと車体が持ち上がって、その度にエウムは上に跳ねて腰を抜かしそうになりました。また、エウムの心の中に、何ともいえない不安が、モヤモヤとした暗い薄雲のように立ち込めてきました。

今、エウムは、一人なのでした。ウジカがいるけれど、彼は話すことはなく、エウムは独りで沈黙に耐えなければなりませんでした。彼女は心の中で、自分自身と会話をしていました……していないと落ち着きませんでした。『これから大丈夫かな……無事にレティスさんに会えるかな……せめて事前に電話出来ればよかったですのに（例の紙には住所は書かれていたけれど電話番号は書かれていませんでした……他の人の電話番号は書かれていたのですが、何故かレティスさんのだけは書かれてなかつたのです）……ジーニーズさんどうしてるかな……すぐ会えるかな……村は……今どうなつてるんだろう……』

その不安な気持ちが、また別の不安を誘発させました……果たして、ジーニーズさんの言つたとおりに、ウジカと同じ血を引く人が秘境の森というところにいるのだろうか……この不安は、エウムにはどうにも消すことが出来ませんでした。それはあまりに不確かな話に聞こえ、ジーニーズさんのことを信用しないというわけではないのですが、だからといって簡単に安心出来る話ではありませんでした。エウムは……ふと自分のお腹をさすりました。そして、手を伸ばして、ウジカの頭をさすつてあげました。

列車の規則正しい揺れが、エウムの体を一定に揺らして、それがエウムに眠気を誘いました。彼女の体はとても疲れていました。襲つてきた眠気……急にとろけるような心地良さを感じ、エウムはゆっくり頭を下に垂れました。すると一気に……エウムの意識が真っ黒に塗り潰されました。あつという間に、眠りについてしまいました。

何かの音が、聞こえました。そして、頬の辺りの空気が微かに……震えたようを感じました。

エウムは重たげに頭を上げて、辺りをゆっくり見回しました。真っ暗です。ガタリ、ガタリと体が揺れて……そういえば列車に乗っているんだ……と思い出して、天井を見ました。付いていた明かりが、夜中だから消されていて、ほとんど光が無くて周囲の様子が見えません。顔を左に向けて、窓の外を見てみると、遠くの方に星の光が見えました。夜が明けるには、まだ少し時間がありそうです。段々と意識がはっきりと……頭が冴えてきました。手元の赤ん坊に、顔を傾け近付けました。小さな寝息が静かに聞こえました。

エウムはウジカの方を見ました。暗くてよく見えませんが、相変わらずジッとして眠つたまま、何も変わった様子はありませんでした。今のエウムは、ウジカの姿を見るだけで、とても安心な気持ちになれるのです。感じるのは、自分と彼との、二つだけの存在……暗闇の中……無限の時の中……一人きりで共有する、自分たちの他に“何も無い”空間……。

またエウムに、甘いまどろみが訪れようとしていました……何気なく視線を流して、自身の鞄を見るまでは。鞄の口が、大きく開かれていたのです。それを目にした瞬間、一度、大きく心臓が胸を叩きました。何か、言い様のない違和感……。妙な、嫌な感じを覚えたのです。素早く鞄を引き寄せ、中身を確認しました。財布がありません。他は何も盗られたものは無いようでしたが、有り金全てが入つた、大切な財布が、何者かに漁られ、盗まれてしまつたようです。ジーニズから借りている財布を……。

「嘘……やだ……」

エウムは少し混乱てきて、身を屈めて床に顔を沿わせ、手をアチコチ床を撫でるようにして動かしました。もしかして列車の振動で、財布が滑つて落ちたのでは……と、一縷の望みを掛け、探してみました。が、鞄のすぐ近くは勿論、トイレの車両全体を這い回つ

てみましたが、どこにもありません。もう、誰かに盗まれたとしか、考える他ありません。

気落ちして、再びウジカの側に戻つてきました。窓の外は、列車の中よりほんの僅かですが明るく、ボンヤリとした夜の明かりが窓から差し、それがウジカの背中を照らしていました。泥のように醜く、グシャリと潰れてしまつているウジカの背中の花……その首に近い所の一部が、明らかに何者かの手によつて、引っ張られ、千切られていたのです。エウムは、ウジカの背中と車椅子との間の辺りに手を突つ込みました。そこには、引き千切られたウジカの花の茎やらが、落ちていました。一度口に含んだのか、それらは唾液でベットリ塗れていました。

心は底無しに打ち沈み、小さな震えが彼女の体に訪れました。震えは、激しい怒りというより、悲しみと、怖さ……からでした。エウムは、ウジカの背中を撫でてあげて……撫でることしか出来ていない自分に気付かされました。

エウムは、立ち上がりました。体を反転させました。そして、目の前の扉を勢いよく開けました。

「誰ですか」

小さな声で……しかしシンの通つた、しつかりとした明瞭な言葉で、彼女は自分の思いを発しました。しかし、列車は静まり返っています。今の声で目を覚ましたらしい……すぐ近くの座席のスツの男が、こちらにちよつと顔を向けただけでした。

「誰ですか？」

「うるせえぞ！」

男がドスを利かせた一喝を放ち、帽子の下から物凄い目付きでエウムを睨みました。

「夜中にバカデカイ声出すんじゃねえ……静かにしろッ」

エウムは、男を睨み返しました。それに気付いた男が、癪に障つたように、顎を上げ、目を大きく見せて、更に鋭い目で睨みました。

しかし、やがて男の方が先に意気を下げました。エウムの目には、確固たる意志を持つ者特有の、負けまいとする力強さが含まれていました。男は手で帽子を上から押して深くして、再び眠る格好になりました。

別に、エウムはその男を疑っていたわけではありませんでした。ただ……誰でもよかつたのです。とっさの思いで、自分の怒りを、周りに伝えずにつぶれなかつたのです。

エウムの中で、ウジカの存在はとても大きくなっていました。それは、最初に彼を世話し始めた頃や、また、ウジカを連れて村を飛び出た時より、ずっとずつと大きくなっていました。乱暴に引き千切られ、吐き捨てられた花の茎の無残な様子に、エウムは我を忘れてしまつていました。

何故こんなにも彼女は取り乱したのか……彼女は村の外の世界に、夢のような幻想を思い浮かべていたからかもしません……幼い頃から、そこには自分の知らない何か素敵なものがあると、夢に描いていた世界でした。しかしそれは、ジー・ニーズと街を歩いている時から、段々と漠然とした不安感へと……色が薄暗く変わつてきていたのかもしれません。短い間でしたが、街を歩いて、ウジカと一緒にの時……ウジカを見る周りの目。しかし、それはきっと、自分の思ひ違ひなんだと……むしろ逆に、周りの人のことを見定的に思う、自分の方を責めようとしたしました。

エウムは扉を閉め、ウジカの元へ戻りました。彼の垂れ下がった頭を、胸の中に抱きました。二人と一緒に抱きしめました。そして……また、ウジカの背中を撫でてあげました。エウムは車椅子の肘掛のところに腰をのせて、彼の頭を横へ傾けて、包み込みました。そしてそのまま、朝に光が見えるまで、窓を見詰めながら、時を過ごしました。

朝日の輝きが地平の端に顔を出して、一時間は経つたでしょうか。まだ早朝といえる時間、客車の扉が開いて出てきたのは、年下と思しきあの少女でした。少女は一瞬、こちらを一瞥しましたが、特に気に留めることなく、そのまま真っ直ぐ歩いていきました。奥の方でガタリという音がして、また戻つてくると手に飲み物の缶を持っていました。また少女はこちらに目を向けましたが、またすぐ目を戻して、元の客車へと行つてしましました。

それから数時間、何人かの人がエウムの前を通りていきました。エウムたちの姿は周りから随分奇妙に映り、そこを通る度に、目を向けない人は誰もいませんでした。エウムは、そういった人たちを、どうしても自然な目で見ることが出来ませんでした。途中全く駅に止まらなかつたこの列車、乗客の“誰か”が、財布や、ウジカにこんなことをしたということになります。目的地で降りるまで、この気持ちのままにいるのは辛いことでしたが、心は半ばむきになつていました。

車内が段々と冷えてきました。三人はより肌をあわせて寄り添い、小刻みに震えながら耐えていました。客車に比べ、エウムたちのいる所は暖房の利きが弱いのでしょうか。窓の外の景色を見ると、広い野原の真ん中を列車は走つているようでした。あちこちに見える樹木の葉は多くは枯れしていて、寒々しげに吹く風に木々も震えているようでした。都会から随分離れ、荒涼とした灰色の大地が姿を現し、大分北の方に来たみたいでした。

列車が目的地に到着するのは、明日の明け方頃です。エウムは、このまま明日までずつと起きていくようと考えていました。今は……お昼を過ぎた頃でしょうか。今日は起きた時間がかなり早かつたので、エウムは既に少し眠気を感じていました。何度も目を擦つたり、小さく欠伸をしたり……しかし、ウジカの頭と自身の頭を擦るよう

にしたりして、何とか眠気を遠ざけようとしました。列車の規則正しい揺れは、エウムを眠りの底へと誘い込む魔力を持つていました。エウムは強く頭を振りました。しかし、時間が経つにつれて、眠気は増すばかりです。やがていつしか、エウムは舟を漕ぎ始めていました。体が斜めに傾き掛けて、ハツと気付いて体を真っ直ぐ起こすのですが、またいすれ……段々と傾いていきます。

「あのう」

小さな丸っこい声が、エウムに掛けられました。重々しく顔を上げると、あの少女が、手に飲み物の缶を持って、にこやかに笑顔で立っていました。少女は両手に缶を持っていました。

「飲みますか？」

左手の缶を差し出して、ひとりわ満面の笑みを浮かべて言いました。

「コレ……結構美味しいんですよ」

今一度、前に差し出して勧めています。エウムは少しためらい、しかし、手を伸ばして受け取りました。エウムは果然としながら、何となく無意識に缶の口を開けて、そして一口流し込みました。ムワツとするような、物凄く甘いジュースでした。その甘さは、エウムの懐かしい記憶をくすぐりました……そう、どこか金の花に似た甘さです。

少女はしゃがんで、膝を胸に抱えて、下からエウムの顔を覗き込むようにして、訊ねました。

「あの……その車椅子の方の背中って……金花……ですよね？」

「…………」

エウムは黙つて、少女を見返しました。少女はまた、ニッコリと大きく笑顔を作つて、続けました。

「あの……金花って持つてますか？　あたし、持つていた分、全部使っちゃいまして……。もしお持ちでしたら、少しでも分けて頂けませんか？」

エウムは、口をつぐんだまま、首を左右に小さく何度も振りました。

「あ……そうですか。分かりました」

少女はウジカの前に、床に座り込んで、興味深げに、俯いた彼の顔を眺めました。

「噂には聞いたことあつたんですけど、こんな風に背中に花が本当に咲いているんですね。背中が重かつたりしないんですかね」

「…………」

「でも何だか……黒ずんでて、グシャグシャですね……何か病気なんですか?」

「…………」

「赤ちゃんは、お一人のお子さんなんですか?」

「…………」

「ううん」と、寒くないです?」

「…………」

「どうして喋つてくれないんですか?」

「…………」

「……『メンナサイ。今、ちょっと気分が優れないんです』

「寝不足ですか?」

「…………」

「お薬、飲まれたらどうですか?」

「薬……そういえば、ジーニーズの鞄には彼が常備していた薬が幾つか入っていることを思い出しました。しかし、

「飲まないの……ずっと……起きてるから……」

エウムの声は、舌足らずなはつきりしない喋り方でした。先ほどジースの甘さが、懐かしさからくる安心感を与えました。エウムは自分の喋つてることを、ほとんど自覚していました。反射的に、少女に言葉を返していました。

「寝不足は危険ですよ。ずっと眠つていないと、入つて死んじゃうこともあるんですか?」

「…………」

「鞄、失礼しますね。……あつた。コレ、睡眠薬ですよ。お飲みになられたらしいと思いますよ」

「…………」

少女は小さな薬の瓶の蓋を開け、白い三粒を手の平に転がしました。

「どうぞ、ジュースです。飲めますか？」

「…………」

既に、エウムは眠っていました。

「そりやあ、最近流行っている寝込み泥棒の仕業だと思いますね。飲み物に睡眠薬か何かを入れたのでしょうか」

「…………」

列車の揺れる音が、淡々と響いているのがつるつるしてたまりませんでした。窓の外は暗黒。車掌が点けた非常用の豆電球が、黄色く暗く車内を照らしています。車掌は、俯いて寂しそうに立ち尽くすエウムを見て、腕を組んで息を吐きました。

「しかし、その犯人、本当に少女だったんですか？ 先ほど全車両を複数名で見回りましたが、あなたより若い女性はお乗りになつていませんよ」

「あたしより少しだけ若い感じの女の子でした。その子が私に缶を渡して、そうしたら段々と眠くなつてきて……目を覚まして鞄を見たら、ほとんど丸ごと中身が無くなつっていました」

「それでは、切符もですか？」

「いえ……切符は懐にしまつてあつたので、大丈夫でした」

「とにかく、いつもして列車内で泥棒が出たということは、私たち鉄道会社の方としても遺憾です。幸い列車は終着駅まで止まりませんから、保安隊の方に連絡をして、終着駅で荷物の調査をしましょう。そこで必ず犯人は見つかりますよ」

「あの……この車椅子の子のことも……」

「……申し訳ないです、そちらのことも、保安隊の方にご相談下さい」

い

何度か、エウムはこうしてウジカのことも合わせて説明しました。しかし、泥棒の件と比べて、どうしてか車掌は誤魔化そうとするばかりで、真剣に取り合おうとしてくれませんでした。それがまた、エウムを気落ちさせました。

「当列車はあと数時間ほどで終着駅へ到着します。そうしたらまたこちらからご連絡致しますので、到着までの数時間、お休みになつて下さい。必ず、犯人を捕まえてみせますから」

そして、車掌はきびすを返し、列車の奥へと行つてしましました。エウムはまた、あの客車の扉の前に立ち、開きました。中には、スーツの男と、太った女性の一人しかいませんでした。エウムはすぐ扉を閉めました。

そして、再び二人の頭を抱いて、目は大きく見開いて、反対側の窓を見つめました。そして時の経つにつれて、窓の外は光を帯び始めました。蒼い光が、窓一面から透き通つて、エウムの顔へと注がれました。列車の速度が、ゆっくりと落ちていきました。

駅には既に保安隊の数名が待ち構えていました。駅に到着する寸前、車内放送がされ、車内泥棒が発生した旨、駅で乗客の持ち物検査することが伝えられました。駅に到着すると、保安隊の一人の男が入ってきて、一人ずつ先頭の車両の扉から出て検査を受けてくれと説明しました。一斉にため息やら叫び声やらざわめき立ちましたが、やがて一人一人と順々に検査が進められていく様子を見て、後続の人たちは諦めたように、再び椅子に腰を下ろして踏ん反り返りました。検査は簡単なもので、鞄の中を開かせ覗き込み確認、そして一步進むと次の保安官が服の懷をまさぐりました。そして無事に検査が終つたらそのまま開放されました。深夜の、地方へと行く列車だつたこともあり、乗客の数は少なく、数十人の確認はあつと

いう間に終つてしましました。何も発見されることはありませんでした。そして、やはり少女の姿は見つかりませんでした。最後の最後で、保安官らと車掌とエウム自身とで、列車を隅々まで見回りましたが、乗客の残した「ミミや忘れ物以外は何もありませんでした。エウムらは、トイレの所の車両に集まりました。

「これだけ探しでも見つからないとは不思議ですね……」

車掌が疲れた声で呟きました。

「とにかく、盗難届けを出して下さい。後は見つかり次第ご連絡致しますので……。見つからなくて、申し訳ありません」

「あたしは……今は家が無いですし……電話も盗まれました」

「…………」

そして、列車を降りました。

55：灰色荒野・森林原野

冷気が吹き荒れていました。明るくなつて見えてきた空は、曇り雲。雨こそ降つていないので、風が強く荒れていきました。エウムたちは服を三枚にして着込んでいましたが、それでも気温がかなり低いこともあります。骨に沁みるような冷たさです。突つ立つているとあまりの寒さに震えが止まりません。エウムは一人を連れて、足早に改札を出ました。

灰色の野原でした。所々に雑草や、枯れ木が立っていましたが、見渡す限り灰色の台地が、世の果てまで続いているのではと思えるほど広大に広がっています。起伏の無いなだらかな大きな平野が、エウムの気を遠のかせました。白い空と、灰色の大地と、世界がたつた一つに……単純に一分されたようなところ。そして、身を切る寒さ。身も心も凍り付きそうな世界でした。

駅のすぐ前には停留所があり、そこには一台のバスが停まっています。エンジンは掛ってなく、息が止まつたように静かに佇んでいるその様子は、まるで朽ちた廃車が放置されているように見えました。車体の、土や埃などの汚れや、とりわけ傷が酷く、車体の胴体に横に長く一本の太い線が彫られていました。何かに引っ掛けたて、そのまま走り続けたために、引きずつて付いてしまつたような、歪んだ傷でした。

エウムはそのバスの方へと向いました。そして入り口に体を半分乗り込ませて、運転席を見ました。厳つい太い腕を組んで、顔にタオルを掛けて眠っている様子の運転手を見て、オズオズと声を掛けました。

「すみません」

「……ん、何だい」

運転手は顔のタオルを取つて、眠そうな目でエウムを見ました。

「このバスは、『学校前』という所に停まりますか？」

「ああ、停まるよ。まだ出発しないけど、乗るんだつたら乗つてもいいよ」

「あの……それが……お金が無いんですよ」

「……そりやかなわんな。お金が無いと乗れないよ」

「その……『学校前』というのは、ここから遠いんですか?」

「歩いていくのは止めたほうがいい。厳しい自然だから、のたれ死んじまうよ」

「そうですか……」

「お嬢ちゃんは、病院の患者か?」

「あたしの……友達を連れていくんです」

「レティス先生のところへか」

「ハイ

「……ツケ

「エ?」

「ツケにして、乗せてやつてもいいよ。タダつてわけにはいかないから、後から支払って欲しいんだけど。とりあえず、乗せてやってもいいよ」

「いいんですね?」

「まあね。何やら事情があるようだし。このまま知らん顔してお嬢ちゃんたちのこと放つたら、先生にメチャメチャ怒られるだらうしね」

そして運転手は親指で後ろを指して、乗りなよと勧められました。エウムは彼の好意に甘え、頭を下げて乗り込みました。運転席と通路を挟んで反対側の先頭の席は折り畳むことが出来、そこは車椅子が固定出来るようになっていました。

「この装置は、先生の要望で付けたんだよ」

そしてその後ろの席にエウムは赤ん坊と座りました。出発はまだ一時間後だというので、鞄を開けました。非常用の食べ物だけは、底の方に深くしまってあつたせいか無事でした。袋に入った炒った豆を摘み取ると、口に含んで砕き、また手に出しました。そして赤

ん坊に食べさせてあげました。

「ママ、か」

運転手は料金箱に肘をのせて、じつに体に似合わず懐っこい微笑を浮かべてエウムたちを眺めていました。

「あたしの子供じゃないんですけどね……」

「そうなの。でも、何か、いいママって感じだな。何ていうか……自分が食べるより先に、赤ん坊に食べさせたりとしてるところとかな」

エウムは、はにかみ、顔を傾けました。

「オシ、じゃあそろそろ出発だな。道が悪いから、車が揺れるから気を付けてな」

乗客が大分乗り、席の大方が埋まつたことを確認して、運転手は前を向きました。エンジンを掛け、派手な手さばきでシフトレバーを動かし、大きな揺れを起してバスは動き出しました。道が荒れていることもありましたが、年代ものの車でもあつたので、揺ればかなり酷いものでした。ガタガタとまるで地震がずっと起っこり続けているような振動が、体を襲ってきます。エウムは赤ん坊をしつかり胸の中に抱きました。前の車椅子は、出発前に何度も設置を確認したので、何とか耐えることを祈りました。

遮るもののが無いところだけに、横から吹き付ける風は強く、時に車体が不安定にグラグラと揺れる時さえありました。運転手の上手いハンドルさばきで、傾きかけながらも、スピードを落としたりしながら体勢を整えて、走り続けていました。しかし、寒さがどうしようもありませんでした。暖房は一応効いているようですが、力が弱いらしく、外にいるよりは、かろうじて暖か……という感じです。窓の隙間から冷気が入り込んで、結局は空気が冷めています。窓の隙間から冷気が入り込んで、結局は空気が冷めています。エウムは出来るだけ窓際から離れ、着ていた上着を

深く着込んで寒さに耐えました。

バスはどんどん進んでいきます。朝方に出発して、毎過ぎには、丘へと差し掛かりました。駅周辺の荒涼とした風景から変わって、丘には木々が多く生えていました。葉の無い丸坊主の枝ばかりの木々が、道路に沿つて生えていました。というよりは、木々が道を作っているような感じなのです。バスの通り道だけ木を切り落として、その間を通りいる……というような様子で、まるで自然の森の中を走っているような感じです。道はろくに舗装もされていないので、バスは一層激しく、上下に跳ねるように揺れました。あまりの忙しさにエウムはビックリしてしまいましたが、振り返って他の乗客を見ると、存外落ち着いて乗っていたり、中には本を読んでいる人もいて驚かされました。

道は進むにつれて、更に険しくなってきたようです。もはや丘というより、森というべきような木々の生い茂る中へとやってきました。道の両端はまるで壁のように木々が立っているのですが、その景色を見ていて、ふとエウムは気付きました。車が進んでいくにつれて、段々と葉のある木々が姿を現してきたのです。最初は、はげた茶色い枝ばかりだったのが、緑色の葉をつけた瑞々しい樹木が目立つてきました。車は走り続け、やがて夕方頃になると、周りは緑の深い森になっていました。

やがて、太陽が顔を地の下に隠した頃、バスはあるバス停で停まりました。

「『学校前』『学校前』。……あれ？」
放送を流した後、運転手は後ろを振り返りました。
「お嬢ちゃん、着いたよ！」

「あ、ハイ！」

ボウツとしていて、エウムは慌てて立ち上がりました。ウジカの車椅子の装置を外して、そして運転席の元に行きました。

「とりあえず、シケつてことだから。ちゃんと払ってよ。先生の病

院はね、ここを降りて少し先に行くと、脇に広めの道があるから、そこを真っ直ぐ歩いていくと着くから」

「ありがとうございました」

エウムは深く頭を下げ、下車、バスが出発するまで見送りました。酷い揺れだったバスから落ち着いて、辺りを見ると、もう夕闇を通り越して、夜の暗さが落ちていました。バスはもうとっくに、闇の中に隠れてしましました。生い茂る木々に光は全く無く、黒く厚い壁となつて、道の双璧を成しています。かるうじて、すぐ目の前の道の辺りは濃紺を保っていますが、これもすぐ真っ黒に塗り潰されるでしょう。少し先を見れば、もう闇ばかりです。空に、星や月の姿はありません。

そして、日の落ちたことによる……寒さ。急に吹いてきた一陣の風が、エウムの服の裾を舞い上がらせました。それだけで一気に体温が奪われたようで、ガタガタと身を震わせました。暖かい村で育つたエウムにはこの寒さはたまりませんでした。

「は……はやく行こつか

エウムは自身にも言つよつて、ウジカたちに声を掛け、車椅子を押して少し早足で向いました。運転手の言つていた通り、少し道を進むと、左手に、森の奥へと続いている広い道がありました。何とも不気味な林道です。幅がとても広く、先ほどのバスでも一台並んで入つていけるほどです。それは、巨大な宇宙の穴を彷彿させられました。何もかも吸い込んでしまうような……そんな深い穴を思わずました。エウムは、風などとはまた別の……凍り付く寒気を感じました。それは緊張も伴っていました。

三人は夜の森の中を歩いていきました。周りに木々が立ち並ぶせいか、風はさほど吹かず、歩く音を聞きながら、無心で進んでいました。エウムはふと、あの街での金花の家のことを思い出しました。あのトンネルのような廊下と、今歩いている道は少し似ていました。……似ていましたが、あちらは道の先に温かな光を発する出口がありました。こちらはただ闇が永遠に続くような道です。時

折、森の奥のどこかから、鳥か何か動物の、甲高い鳴き声が響いてきました。しかしそれ以外は何も聞こえない、無音の世界でした。何も見えなく……何も聞こえてこない……。

かるうじて分かる、道の端に立ち並ぶ木々に沿つて、少し蛇行しながら、奥へ奥へと歩み続けました。腕の中の赤ん坊が、小刻みに震えているのを感じました。早く……早く行こう……どうか出口は近くにあつて欲しい……。

暗闇の中では、時間の流れは分かりません。すっかり体は冷え切つて、手がかじかんできた頃、前方に……見えました。背の低い建物らしき姿が見えました。それは壁が白いせいか、その存在がはつきりと分かりました。エウムはその姿に勇気付けられて、思わず駆け出してしまいました。森の道を抜けると、大きな原っぱの広場があり、そこを横切つて建物のすぐ前へと近付きました。

白い建物は、一階建ての、横幅の広い病院でした。壁面に規則正しく、目のような窓が幾つも並んでいて、それらが冷たくエウムを見つめているように思えました。窓に明かりは無く、シン...と静かな様子です。一刻も早く一人を中心に入れたいと思ったエウムは、目の前のスロープを上がって、玄関のガラスの扉を叩きました。

「すみませんッ 誰かいませんかッ？ すみませんッ」

暫く叩いていると、突然、... ガチャリと、鍵の開けられる音がしました。慌てて一步下がって、そして扉が開かれていました。

「... どなた？」

とても背の高い女性が、上から見下ろして訊ねました。

「私は、エウムといいます。あの... ジーイズさんの紹介で... こちらに... 来たんですが...」

「... どうぞ」

更に大きく開かれて、奥を手で指しました。

「あの... それで...」

「詳しいことは奥で、寒いですから」

女性は反対側の扉も大きく開いて観音開きにし、車椅子を入れ易くしてくれました。ぐぐりながらエウムは訊ねました。

「あなたがレティスさんですか？」

「ええ」

入ると、少し広めの部屋でした。柔らかそうなソファーアーが置かれ、小さなテーブルが置かれています。左手には扉はありませんがまた別の部屋があり、そこには何かオモチャのような物が床においてありました。レティスは部屋の奥を指差しました。

「奥に来て、ちょっと狭いけど車椅子も入れると思うから、入れて」

奥の部屋は、台所でした。レティスは中央の木のテーブルと椅子を指し、エウムは勧められるままその椅子を引いて座りました。車

椅子のウジカは机に沿つては置けなかつたので、入り口の側にとめました。レティスが壁のスイッチを押して、パッと眩しい明かりが点きました。蛍光灯の日に染みる光を受けて、レティスの顔がようやくはつきり見えました。目や眉毛、口元も、とても細い纖細な顔立ちの女性でした。白い看護服を着ていましたが、それらはあちこちに黄色やら赤い染みを作つていました。一見とても汚れた服を着ているのですが、レティスの全身から感じられる、とても落ち着いた、清楚な雰囲気から、あまり汚らしい印象を感じませんでした。ただ、最初の幾つかの会話の感じからして、彼女に対し、少し冷たい印象も抱きました。

レティスは、エウムが椅子に座るのを見届けると、彼女は台所の調理する所に立ちました。そして水を出したり、コンロに火を点けたり、しゃがみ込んで下の棚を開いたり……やがてテーブルには、器に入つた焼き菓子やら、コーヒーやらが置かれました。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

温かそうなコーヒーに、思わず生唾を、大きな音を立てて飲み込んだでしまいました。両手で包み込むように持つと、その温かさに手が心地良く痺れました。

「赤ちゃんのミルクは今作つてるから、もう少し待つて。そっちの車椅子の子も……」

レティスは焼き菓子を二三枚取つて、ウジカの元へ向いました。

「……眠つてるなら後で栄養剤を」

レティスは菓子をテーブルに置き直して、ウジカの容態を見るように手を当てたりしました。そして、背中の金花を触つたりしました。エウムは少し落ち着かない様子で、指を絡ませながらその様子を見していました。

「この病院にいれば絶対に安全だから」
レティスは振り向きました。

「少し、お話ししましょう」

レティスも席について、コーヒーを一口飲むと、落ち着かない様子のハウムの目をジッと見つめました。

「もう怖がられても困るわ。この病院は山奥にある、世間とは隔離された所なの。患者のプライバシーは外部には漏れないわ。だから、金花のあの子がここにいても、誰にも迫害されないし、あたしは全力で保護するわ。この病院を訪ねるくらいだから、大体事情は分かってるわ」

「…………」

「お話ししましょう。あたしの話し方が気に入らなくても、我慢して。こういう話し方があたしなの。冷たいって言われるけど、どうしようもないわ。ジー＝ズさんにもよく指摘されてたわ」

「……あの、実は、」

エウムは事情を、搔い摘んで説明していました。

「分かつたわ。さつきも言つたけど、この病院に入院した子は、どんな事情でも必ず保護するから。入院を許可してあげる。

とりあえず、今夜はこれで終わりにして、もう寝ましょう。あたしも明日の仕事が忙しいから、夜更かし出来ないの」「ごめんなさい、遅くに来まして……」

「バスが夜に到着するから、仕方ないでしょ。さあ、あなたはとりあえず、仮眠室で寝てもらうわ。そっちの横の扉の部屋がそうだから。ウジカと赤ちゃんは、あたしが部屋に連れて行くわ。おやすみ」

赤ん坊とウジカを連れて行こうとするレティスを見て、エウムはふと不安な気持ちを抱きました。列車の件を思い出し、ジッと一緒にを見つめました。

「心配なら、一緒に来なさい」

レティスは、そう声を掛けました。

また玄関の所の広い部屋に出て左手の方に歩いていきました。細

い廊下を、床を軋ませて進みました。するとレティスが立ち止まりました。

「どうしたの？」

暗くてよく見えませんが、レティスの前に誰かが立つているようです。背の低いその子は……声からして小さな男の子のようでした……ボソボソと呟きました。

「……オモチャ」

「夜は部屋にいなさい」といつたでしょう。他の皆は寝ているんだから

「…………」

「じゃあオモチャを持つていって、自分の部屋で遊びなさい。あたしは少し忙しいから、先に行つてオモチャを選んでなさい」

「……ウン」

そしてレティスは廊下の横の一室の扉を開け、部屋の電気を点けました。パッと光が外にも漏れ出て、その少年の顔を照らしました。エウムはハッと驚き、思わず口元に手を当てました。その少年の頭……一見したところは普通なのですが、どこか違和感があるのです。少年がレティスの言つことに従つて、パタパタとエウムの横を駆け抜けていった時……少年の背中を見送った時に、その違和感の正体が分かりました。少年の頭の後ろにも、もう一つの顔があつたのです。丁度、顔型の仮面を裏合わせにしたような感じで、少年の前と後ろに顔があつたのです。

レティスは部屋の中に入つて行きました。

「さ、ここを一人の部屋にするわ。ウジカをベッドにのせるから手伝つて」

エウムは廊下に突つ立つて、少年の方を見ていました。

「エウム、手伝つて」

促され部屋に入つて、二人で車椅子からウジカを引つ張つて、ゆっくりと寝かしました。部屋は、左端に一段ベッドがあつて、二階にウジカを、一階に赤ん坊を寝かしました。レティスは横の窓の力

「一テンを開けました。

「田中、田当たりはいいから大丈夫でしょう」

振り返り、目を細めて、廊下の方をずっと見つめている、エウムの肩に手をのせました。

「時間が遅いし、もう寝なさい。あたしはさつきの子の世話をしなければならないから。さつき教えた仮眠室、部屋の棚に毛布が何枚か置いてあるから、寒かつたらそれを重ねて寝なさい」

レティスはエウムの背中を押してあげました。体が傾きゆらりと揺れて、二三歩たらを踏みました。レティスはエウムの横を早足で通り抜けて、オモチャの部屋へと向かいました。エウムは廊下に出て、彼らの方へ静かに近付いていきました。すぐに仮眠室へと行く気にならず、途中で立ち止まって、一人がいる辺りの闇を見つめました。しばらくすると、その遠くの陰の中から、ボソボソと小さな話し声が聞こえてきました。

「この猫のお人形で遊ぼうか」

「ん～ん……」

「この猫の人形、皆嫌いみたいね……やつぱりこのギロギロした目が怖いのかしら」

「コレ……コレ……」

「車のオモチャね、あなたはコレが本当に好きね。じゃあこれを持つていきましょうか。静かに走らせなさい」

二人の影が立ち上がり、ソロソロといひひへ近付いてきました。

「もう寝なさい」

脇を通り際、レティスはそう言つて、そして一人は廊下の奥の部屋へと入つていきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4279c/>

金色（コンジキ）の花

2010年10月11日21時04分発行